日本は今世界へ何を発信すべきか

グローバルジャパン 研究会

2008年

米欧亜回覧の会

日本は今、世界へ何を発信すべきか

はじめに　―世界へ日本から発信すべきものはあるのか　・・　泉　三郎　（1）

〈報告〉

一、日本において近代を超えるということはどういうことか・　吹田　尚一　（5）

質疑応答

二、世界に発信する日本文明の課題　・・・・・・・・・・・・・・　永池　榮吉（16）

質疑応答

三、貪欲収奪文明から最適循環文明へ　・・・・・・・・・・・・・・　泉　三郎　（31）

質疑応答

四、西洋医学と東洋医学の比較　・・・・・・・・・・・・・・・・・　西井　易穂（44）

質疑応答

五、日本美術からの世界への発信　・・・・・・・・・・・・・・・・　塚田　晴可（52）

質疑応答

六、トヨタウェイを世界に　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　石坂　芳男（60）

質疑応答

七、グローバル・デジタルVSローカル・アナログ　・・・・・　石垣　禎信（71）

質疑応答

〈発言と寄稿〉

八、日本は世界のモラルリーダーに　・・・・・・・・・・・・・・　森本　淳之（84）

九、共生（シンビオーシス）から共創（コビベンス）へ　・・　小松　優香（87）

まとめ　―地球文明時代の思想をもとめて　・・・・・・・・・・　泉　三郎　（91）

はじめに
―世界へ日本から発信すべきものはあるのか？

泉　三郎

一、グローバリゼイションと日本

本研究会の趣旨を述べる前に、その時代背景を概観しておきたい。それをひとことで言えば、グローバリゼーションの大波である。

グローバリゼイションとは何か、それは世界がグローバルに一つになっていく動きといっていいでしょう。それはいつごろから始まったのか。

遡れば、最初の動きは一五世紀の大航海時代に始まりました。大洋をわたる新たな航海術によって、スペインとポルトガルがそれまでの地中海世界からまず大西洋とインドに乗り出しました。その象徴的な事件が一四九二年のコロンブスのアメリカ航海であり、一四九八年のヴァスコダガマのインド航路発見でした。そして一四九四年にはローマ法王の下に「トルデシリヤス条約」が結ばれ、世界をスペインとポルトガルに分割支配せんとする勢いを見せます。そのイベリアン・グローバリゼイションともいうべき第一波は、極東の小島である日本にも打ち寄せ、鉄砲とキリスト教を伝えました。しかし、日本は遥かな遠隔地に存在していたことが幸いして、影響は軽微にとどまり、徳川幕府は「鎖国」策を講じてそれ以上の影響を防ぎました。

グローバリゼイションの第二波は、幕末に「黒船」と共にやってきました。それは近代技術と産業革命の成果を背景に極めて大きな波となって襲来します。日本は旧来の「鎖国策」では対応できず、やむなく「開国」に踏み切ります。しかし、この西洋文明の衝撃は大きく、幕府システムは崩壊し明治新政府ができます。そして文明開化の流れが滔々と日本列島を襲ったのです。これに対し明治政府は、「和魂洋才」をスローガンに、一方では西洋の技術を積極的に摂取して「殖産興業」と「富国強兵」をはかり、他方では「和魂の砦」としての「帝国憲法」と「教育勅語」を制定・発布して、日本の伝統的価値やそのアイデンティティを保守しつなぎ止めようとしました。

明治日本は、幕末に結ばされた「不平等条約」に苦しみながらも懸命に西洋列強の圧力に抗し、日清・日露の戦争に勝利して独立を確保することをはかりました。その結果、白人帝国の大国ロシアをアジアの小国日本が破ったということで世界を驚かせ、日本の存在を初めて世界に知らしめることになりました。しかし、この多分に幸運に恵まれた戦勝は日本を傲慢にさせ、国際的に孤立化させていきました。日本は西洋風の一神教的天皇国家をつくり、さらには西洋的な侵略的帝国主義を自ら採用することによって米英と正面衝突し、やがて無惨な大敗北を喫することになるのです。これは第二波の英米主導のアングロサクソン・グローバリゼイションに対する日本の懸命な対応であり、その成功と失敗の歴史と解釈できましょう。

グローバリゼイションの第三波は、敗戦と同時に大津波となって押し寄せました。日本は歴史上初めて他国の占領下に置かれ主権を奪われます。そして占領軍である圧倒的なアメリカのパワーの影響下で、自由と民主主義を採用し、新しい国づくりを始めます。そして新技術を導

入し、大量生産・大量消費の方式を採用し、自由貿易と市場経済を取り入れます。日本は戦前の軍事大国への猛烈な反省から平和を標榜してもっぱら経済優先をはかり、日米安保条約を結んで大国アメリカの下、エコノミックアニマルと揶揄されるほどに勤勉に働き、戦後四〇年で世界でも有数の経済大国にまでのし上がるのです。それは、焼土と化し亡国寸前と見られた日本からは想像も出来ないほどの輝かしい経済的な成功でした。

その間、アメリカはソ連との冷戦を戦いながらもそれを圧倒する力をつけ、遂に米ソ対立の象徴ともいうべきベルリンの壁を崩壊させます。その結果、アメリカ的な自由主義市場経済の巨大津波は旧ソ連圏に流れ込み、さらには大中国へも、そしてインドへも怒涛のように流入していきます。こうして、アメリカ流の自由主義経済が一気に全世界に普及することになるのです。それはまさにアメリカン・グローバリゼイションの大波といってよいでしょう。

日本は歴史上初の敗戦ショックという大後遺症もあり、また安全保障をアメリカに依存したこともあって、アメリカの影響をとくに強く受け、心身ともにアメリカナイズしてしまいました。明治期に保守しようとした日本人としての独立自尊の矜持やモラルはないがしろにし、拝金主義的な個人主義、自己中心的快楽主義に浸る日本人、いわば奇形の日本人を生み出してしまいました。そして日本の伝統的な文化や思想はいよいよ希薄になり、日本人としてのアイデンティティは危機に瀕するまでになったのです。

以上が、種子島以来四五〇年、幕末以来一五〇年のグローバリゼイションの流れと、それへの日本の対応の仕方だといっていいでしょう。

二、日本は、これまで何を世界に向けて発信してきたのか

では日本は、こうした西洋近代の圧倒的なパワーに遭って、もっぱら受け身一方の受容の歴史を辿って来たというべきなのでしょうか。必ずしもそうではなかったと思います。

幕末の開国後、日本が世界に向けて発信したものといえば、ささやかながらパリ万博やウィーン万博において陳列した陶器や漆器や浮世絵といえましょうか。それは西洋の美術工芸界に少なからず影響を与え「ジャポニズム」の流れとなったことは周知のとおりです。そしてより大きなことは、日本を訪れたペリーをはじめオリファントやシュリーマンやメチニコフに代表されるように、日本の社会が一見貧しいように見えても、感性豊かな人々の住む笑顔と親切の溢れたアルカディア（桃源郷）のような国であることを欧米人に印象づけ感銘を与えたことです。

そして無血革命ともいうべき「明治維新」や大文明調査団ともいうべき「岩倉使節」の派遣は欧米人の目を見張らせました。使節団を構成したリーダーたちや随行した若き留学生らは、その凛としたサムライ精神、知的教養と鋭敏な感性、礼儀正しさと優雅なふるまい、責任感と使命感で、米欧の人々に強い印象を与えたのです。それらは日本そのもの、日本人そのものの存在が、語らずして世界に何ものかを発信したことになりましょう。

明治三〇年代になると、日本はにわかに世界から注目を集めました。とりわけ日露戦争での勝利は、それまで不動と思われた白人帝国の存在に一撃を下し、植民地化されたアジアや中東

の諸国民から喝采を浴びました。そしてそれに呼応するように、新渡戸稲造が「武士道」を、岡倉天心が「茶の本」を、見事な英語で書きました。それはまさしく、日本の思想、その倫理観と美意識を世界に発信したことを意味します。

敗戦後も、日本はある意味でしたたかでした。焼土の中から不死鳥のように蘇ります。日本は新技術を導入し、物づくりの才を生かして懸命に働き、驚異的な経済発展を遂げます。それはつまるところ日本の人材パワーによるものであり、より具体的にはメイドインジャパンの優秀な製品群でありました。それは繊維製品に始まり船舶や電気機器や諸機械に及び、ソニーやホンダのヒット商品を生み、キャノンやトヨタの世界的な商品を生みました。こうした電子製品や自動車に象徴される高品質の商品こそが日本の代名詞となりました。それは西洋オリジンの模倣ではありましたが、品質を改良しデザインを美しくし、効率的な生産によってコストダウンをはかった結果であり、そこに日本の独創性が付加されたといえましょう。

また日本は戦後の民主的改革もあって、貧富の差の少ない「一億総中流」といわれる社会をつくりあげ、国民一般が豊かで便利な生活をエンジョイすることができるようになりました。それは時に「社会主義のモデル」と見間違えるほどで、格差の激しい国から羨望の眼で見られました。日本的経営の三要素といわれた終身雇用、年功序列制、企業内組合が特徴とされ、大多数の国民が平和と繁栄を享受できる国として高く評価されたのです。

しかも、日本は非西洋の国にあって、西洋的近代化に成功しながら伝統的な価値や文化を温存してきたともいわれました。植民地的支配を受けて自国の言語さえ奪われた国々も少なくない中で、日本は一つの文明圏として存在し続けたのです。そうした日本という国柄の存在そのものが、もの言わぬまでもすでに発信の主体になっていたといえるでありましょう。

また、近来では文化面でも独自のものがあるとされ、それが盛んに発信されているといえます。黒沢明の映画や手塚治虫のマンガをはじめ、映画の「おしん」、宮崎駿のアニメ、武満徹の音楽、さらには黒川紀章や安藤忠雄の建築などが世界各地において人気を博し、人の心をつかんだともいえます。その他、日本文化の定番ともいうべき「茶道・華道」があり、「禅や柔道」があり、最近では寿司や天ぷらをはじめ、魚貝や菜食主体の料理がヘルシー食品として、日本食ブームを起こしていて、世界の人々の生活に浸透しつつあります。

しかし、政治や政策、学問や思想については、発信がほとんどないといわれています。経済や技術の面では「日本的経営」や「カイゼン」があり、小型化、自動化、省力技術などがあります。また、人材や資金面では、海外協力隊の活動やＯＤＡによる成果もあります。でも、政治や外交になると日本の存在は影が薄いのです。確かにカンボジア和平やイラクの復興援助などにおいて相応の貢献をしているといえます。しかし、そこには日本としての明快な思想の表明もなく、イメージも鮮明ではありません。

それはあるいは内向きでシャイな国民性によるものであるかもしれません。そのことは日本文学でノーベル賞に輝いた二人の作家、川端康成と大江健三郎の記念講演にも表れています。川端は「美しい日本の私」といい、大江は「あいまいな日本」といいました。それは日本人のもつ特性、言挙げしない国民性に起因しているともいえるでしょう。日本はやはり「論理」で

はなく「詩歌」の国であり、理屈でなく情緒の国であるのでしょうか。

三、本研究会の趣旨

ここであらためて問いたいのは、日本はこのままアメリカン・グローバリゼイションの大波の中に埋没していいのか、ということです。日本はよきものをたくさん持っていながら、自身それを認識しておらず、不当に己を卑下し自信をなくしているのではないか、ということです。日本にはもっと積極的に世界に発信すべきものがあるはずです、世界に役立つ思想やノウハウもあるはずです。とくに戦後日本の経済的成功を支えてきた企業戦士や技術戦士に、そして教育や美術の分野で貢献してきた文化戦士の中に、その思いや知恵があるはずです。本研究会の趣旨は、そうした豊富なキャリアをもつメンバーがその体験を基に、この問題に取り組もうとする点にあります。

実は「米欧亜回覧の会」では、二〇〇六年秋に、「世界の中の日本の役割」をテーマに国際シンポジウムを開催しました。そこでは「平和国家」として、「共生」思想の国として、また「世界の世話役」としての日本が語られました。そしてアジア各国からも論者を招いて、日本へ期待する声を聞きました。このシンポジウムの記録は、「世界の中の日本の役割—岩倉使節団を起点として」のタイトルで慶応義塾大学出版会から出版されています。

本研究会は、この路線上にあるものです。そこでの議論を踏まえながらさらに多面的に深く研究をすすめていこうというのが本会の趣旨です。そして、発表はそれぞれの体験を踏まえて、荒削りでもいいから世界へ向けて日本から発信できるような「提言」的な内容を意図するように申し合わせました。

メンバーの構成は「米欧亜回覧の会」の有志をコアに、外部からも論者を招くことにし、それぞれの分野でのキャリアが豊富で、ここに掲げるテーマと趣旨に賛同する人を基準にしました。そのため、学者や評論家によるアカデミックな研究会とは異なり、現実に即した体験的な議論が主になると思います。そこにこそ、当研究会の特色があると考えています。因みに「米欧亜回覧の会」のメンバーは「岩倉使節団」や「米欧回覧実記」を暗黙のうちに基本テキストとしていますので、次の三点が共通の特色になっていると思います。

一、グローバルな視点、二、百年単位の尺度、三、文明論的な多面的な視野です。

なお、当研究会の内容と構成は、アドバイザー的存在である吹田尚一氏のご協力を得て決めました。そして二〇〇八年四月から二〇〇九年三月までの間に、各論者にそれぞれのテーマで発表してもらい、そのあと参加者の間で質疑応答を行い、その要点を収録しました。また、本報告書の作成にあたっては、参加メンバーから二つの寄稿を加え、最後に泉が総括的なコメントを述べる形で編集しました。内容を主に配列したため発表の順序と異なっている箇所があり、若干前後することがありますがご了承ください。終わりに、終始ご指導をくださった吹田尚一氏をはじめ、永池榮吉氏他の発表者のみなさん、質疑に参加してくださった方々、また、テープ起こしから編集まで担当してくれた小松優香さんに、心より御礼を申し上げます。

二〇〇九年九月一日

日本において近代を超えるというのはどういうことか
―四つの可能性と一つの提言―

吹田 尚一

一、「近代を超える」ということの議論の仕方

この研究会の趣旨に、西洋近代を超える道を探りたいという意味の言葉がありました。これはまことに魅力的で刺激的な発想であり、日頃から関心もあるので私の考えを述べてみたいと思います。

最初に言っておきたいことは、「近代を超える」などということは軽々に言ってはならぬことだということです。たしかに魔力のような言葉ですが・・・。現にこの会場の電気も、眼前にある録音機も、すべて近代の産物で、それが嫌なら「竹林の七賢人」になって、あるいはガンジーのごとく一枚の布をまとって、陋屋で会合することになる。なお、当たり前のことですが、近代とは西洋近代のことであります。

われわれができることは、また追求すべきことは、この近代の発展のなかにおいても、それは一つしかないのではなく別のコースもありうること、また近代のもたらす障害や、あるいはそれが突き当たる壁をどのように修正し、あるいは打破していくか、その智恵を探ること、そして実際にそれが可能であることを実証していくことです。

もう一つ、近代を超えるという発想は、なにか日本独自のものと思われがちですが、近代を切り開いた西洋自身のなかに、つねに提起され、問われてきたことなのです。近代革命の思想的指導者であるルッソー自身も「自然に帰れ」と叫んでいました。フランス革命をその勃発当時からそれが危険な人間破壊の思想をもつと告発したのはイギリスのE・バークでした。近代の基盤をつくった産業革命を論じた最初の研究はむしろその展開における惨苦を指摘するものでした。

このように近代世界の先頭をいっていたイギリスでも、一九世紀前半には、道徳感覚、家族、連帯性、など国民のなかにある盲目的生命力を強調する思想運動が起こったのです（ラスキンやカーライル）。これは合理主義一辺倒に対する反対であり、在来価値の復権を求めたものでしょう。マルクス＝エンゲルスが人間「疎外」を指摘したのも同じ流れであったといえます。二〇世紀に入ると、ニーチェは「神は死んだ」として科学技術社会を告発しました。以後、ベルジャーエフやオルテガのように、共同体から解き放されアトム化された人間を大量につくりだした「大衆社会」が文明の成果を消尽し衰弱させると警告しました。それは警告ですまず、悲惨な現実を生んでしまったのはご承知のとおりです。

このように、近代批判は実は広範でかつ深甚な問題設定であって、それはこのわれわれが生きている文明そのものを俎上に載せるものです。そこで、この報告では、上記の思想展開を念頭におきつつも、対象は日本にしぼって、そのため日本の近現代史を振りかえり、想念的接近ではなく、現実問題を捉えて、いったい近代を超えるとはどういうことであったのか、を考えることにします。

二、日本における四つの可能性

結論的にいうと、それは四つの可能性をもっていたと思います。

(一)「大国化」の道以外になかったのか

日本は明治に本格的に開国したのち、「大国化」の道を進んだが、それとは別に発展の方向を示していた人物として横井小楠がいた。小楠の言に次のごときものがあります。

①「堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を尽くさば、何ぞ富国に止まらん、何ぞ強兵に止まらん、大義を四海に布かんのみ」

②「日本に仁義の大道を起こさねばならぬ。強国に為るのはならぬ。強あれば弱あり」

③「我日本は印度になるか、世界第一等の仁義の国になるか、頓と此二筋の内、此外には更に無い」

④「戦争の惨憺万民の疲弊、これを思いまた思い、さらに見聞に求むれば自然に良心を発すべし」

これは泉三郎氏から教えてもらい、また金子淳人「近代日本の成立期における、横井小楠の問題提起について」(同氏著『近代日本の基底にあるもの』、新風社、一九九八年、所収)に拠ってもいるのですが、①は、富国強兵を越える道筋を指摘しています。しかも東洋と西洋の精華を入れつつ、これを超えて日本が求めねばならない道筋であることを指摘しているのは、日本の世界のなかでの位置を指し示していて実に示唆的です。その大義とは何かを日本は追求すべきだったのです。②も同様に弱肉強食の国家となってならぬと説いてます。③も含めて、独立国として生きながら、その道は仁義を尽くした国である、と説いています。④は世界平和の道であります。さらに後半部は世界平和が仁義と一体になっている、と解釈したいものです。

本当に、以上のような道が選択できたのでしょうか。現実はまったく反対であり、またそれ以外にありえたのでしょうか。日本は基本的に近代世界のなかの「遅れた青年」として大国化の道を急速に進んだが、理想と現実の大きなずれがここでもあるわけです。しかし、ここで提示された別コースは西洋近代を超克する思想であり、それを提示していた人物がいたことは記憶さるべきです。

(二)中国との和平

近現代の日本の決定的といってよい過誤は、中国との和平を達成できなかったこと、少なくとも中国ナショナリズムを見守ってその健全な発展を支援できなかったこと、にあると思うのですが、そのための路線をつくろうとした動きはあったのです。

大正一三=一九二四年、北上宣言を発した孫文は、北京に入る前に神戸に立ち寄り、二日間にわたって頭山満と会談しました。そのとき頭山は孫文に次のように語ったといいます。

「日本と支那とは、互いに相計って他人離れのした心持に於いて、許すべき事は相手の求むるに先立って之を許すやうでなくてはならぬ。日支が一つになれば、印度の独立位何でもない。(中略)而して今度はコッチが強うなった時、始めて本当の人道を踏んで、世界人類を無窮に救うてやることじゃ。前にヒドイ事をされたから、今迄の西洋文明は獣の文明であっ

たから、これからは真の人間文明としなくちゃならん。」（藤山尚則『頭山満翁写真伝』）

中国の求めるものを先に渡してしまう。西洋と同じことをしてはならぬ。そして日中の提携の必要性。この精神が日本外交に生きることはなかったのです。

これを取りあげたのは、日本自身の選択として、植民地的支配拡大をやらない、ということができていたら、西洋近代を克服できると威張ってよいでしょう。その事例としてここで取り上げたのです。しかも、これが日本では通常、右翼といわれる人によって提起されたことはもっと注目されてよいことです。具体的には対支問題の解決の路線があったのにそれは生かされなかったのです。

(三)「日本型経営」

それは言いつくされているので、ポイントのみを述べれば、日本企業においては、従業員と会社の間に価値と情報の共有があり、会社の目標に向かって全員が参画して努力することです。したがって仕事はティーム・ワークでなされ、また社内組織間の協同が厚く組織効率が高いこと、であります。いわゆる「三種の神器」はこのような参画と協同を支える装置として位置づけられるものです。

こういったことをイギリスの航空会社ＢＡの幹部研修で話したら、最初の質問というかコメントは「それはまるで社会主義国のようですね」ということでした。ちょっと答えようがなく、一瞬黙ってしまいました。アングロサクソンのつくりあげた資本主義企業というのは、従業員に会社の方針を説明したり、投資計画に「諒承」を求めたり、従業員から改善の提案を受け入れたりはしないのです(最近は変わったかもしれませんが)。それは従業員・組合員からみたら、「旦那」方のすることで、われわれの関知するところではないというわけです。日本は資本主義企業でありながら、それをやりました。本当に彼らからみれば考えられないことです。最近になって従業員の時間外の小集団活動に残業料が支払われるようになりましたが、ＱＣ活動全盛期に、その全国大会で受け取る賞金をその参加者で割ってみたら四三〇円でした。少し高いコーヒー一杯分です。

このようにして、日本企業はかつてウェッブが産業民主主義を唱えたものに近い経営体となっていたのであり、それは西洋型資本主義を乗り越える道をつくりあげたのです。

(四)平和の実現

最後は平和です。

広島平和記念公園にある有名な墓碑銘「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませんから」の意味です。これを見たパール博士は激怒したといいますが、パール博士さえその真意を理解できなかったほど、それは意味の深いものであったのです。これは啓示というべきであって、人間の業にまで深入りし、その克服を願ったものであったと思います。

日本は、これを原点にして世界平和のために世界の先頭にたつべきことは言うまでもないことです。

これに関して思いだすのは、広島市民病院の院長さんにインタビューしたことがありました。そのなかでチェルノブイリ原発事故のあと、世界の放射線医学者がソ連に呼ばれ住民と対話集

会がもたれました。ところがその場での質問はすべてわれわれ日本の医者に集中したということです。「ヒロシマ・ナガサキと比べて私どもの病状はどうなのですか。」と必死に聞いてくる。そこでハッと気づいたのですが、自分たちは基準点であり出発点に居るということです。その意味は、原爆病を公的に認知しその診断を継続しておこない、そのカルテを豊富にもっているのは日本の医者のみであるということです（外国は正式にはこのような認知はしない）。誤解を恐れずにいえば、いかに日本が世界の「先頭」にあるのか、ということです。続けてこの子供たちを日本に呼び治療しました。そこで訪日して最も感動したことを聞くと、「病院での治療よりもヒロシマの街が樹木の緑に溢れていること」と言うのです。希望が湧いてくる話ですね。また最後に「今日のように医学畑以外の人、社会科学の分野の人とこのような話をしたのは初めてです。」意外ではないですか。政治学者は何をやっているのでしょう。

以上、西洋近代を超えるとは、アジア後発国であった日本が力による「大国化」の道を選ばないこと、さらに世界支配の後追いをしないこと、科学技術の究極の成果である熱核爆弾の開発をせずその全廃に取りくむこと、そして際立つ個人主義と合理主義による組織形成とは別途の方策を選択すること、なのです。ここで四つはすべて可能性と言っています。このなかで実現したのは、唯一日本型経営くらいでしょう。その日本型経営も九〇年代の長期低迷とグローバル化のもとで試練にさらされ、大きな修正をせざるをえなかったのですが、それでも基本骨格は維持しているといえます。

このように考えてくると、西洋近代を超えることが生易しいことでないこと、むしろ、近現代の日本はその課題のもとでの打ち回ったのではないでしょうか。これが私の見解です。

三、日本発の世界平和構想を

そこで、以上の検討を踏まえて、日本は何を世界に発信すべきか、あるいは発信することができるかについてですが、いろいろありますけれど、一点に絞って述べます。

それは世界平和への限りない追求である、と思います。

われわれは、どのような精妙な文化の華を咲かせても、あるいは生活水準の一層の向上を求めようとしても、そして地球上で異なる民族・文化の豊穣な交流の実現、それに通ずる真の共生をめざしても、戦争という事態を迎えては何事も崩壊するのみです。平和であることは、すべての人間生存の基本でしょう。

ところが、現実の世界にひとたび目をやれば、平和の実現がまさに「絶望的」といえるほど困難であること、人類は今まで世界の永久平和を唱え続けてきたが、それは実現したことがないことが分かります。そこで、理想と現実のはざまで声を失うのです。

しかし、勇気を奮いおこして、この理念を実現したい。今までの反省にもたって、陣形を立て直し、つぎのような提案を行いたいと思います。

（一）まず、理論的な接近であるが、「平和基軸基本人権論」の概念をうちたてることです。

これは、人類の今までの人権概念の確立の延長線上にあるものですが、具体的にいうならば、第二次大戦後成立した国際連合において、最初に謳ったのが基本的人権の確立でした。しかし、

これを引きついで、その後は女性差別撤廃、社会発展計画の採用、そして地球環境保全への広がり、という展開となっています。さらに冷戦後は、平和と安全保障のため経済的側面を重視する「人間の安全保障」の確立を謳うまで発展してきていることに注目したいと思います。これらの考え方を一層推し進め、かつ次元をもう一つ上げて、平和を保障する基本理念を提唱するのが上記の言葉になっています。この言葉のように、基本人権の前に平和を置いたのは、いくらさまざまな基本的人権を強調しても、爆弾と戦火のもとではなんら意味がないこと、さらにこの考えを改めて強調するため、それを基軸に据えるべき、という主張を盛りこんだものです。

（二）この概念をまずは国際政治学、国際法学あるいは平和学のなかで提唱し、平和理論を一層堅固にした上で、いかに具体的に世界平和を実現する道筋を構想するかについては、国連が主導して、その理論的枠組みと実際的道筋を見出す研究を世界の有識者を総動員して行うことを提案したいと思います。これは儀礼的となった、一片の決議や理念を総会で謳って終り、ということではなく、もっと現実的な一歩を踏みだしたいという狙いがあり、同時にそこでの成果が世界の指導者に直接に影響力を与える、さらにいえばコミットメントを求めることになる、という狙いがあります。すでにこういう言い方で分かってもらえると思いますが、今までの世界的平和運動の反省もあり、それらの貴重な努力を大きく高めたいということでもあります。

（三）おそらく最終的には、現在の安全保障理事会の抜本的改組とその昇格、あるいは国連における上院の設置といった姿が想定され、そこで世界政府的機能を担っていく、ということが期待されるのです。

なおこのような機構の提案と接近は、イギリスの国際政治学者D．ヘルド教授によってなされています。その背景には、国境を越える「国民国家」体制を超えるＥＵなどの動き、さらに経済の領域ではＩＭＦなどの国際機関の活動（いろいろ問題はあるが、国家主権に制約を課するようになったという事実はグローバル化の一端をあらわすもの）、などを踏まえています。

さて足元の日本はどうでしょうか。日本の平和への希求は広く国民の支持を受けていますが、それは「願い」であり、アッピールであり、「祈り」にとどまっていないでしょうか。これを理論的に強固に裏打ちし、さらに具体的に進める狙いがあります。また、上からいきなり世界政府というものを期待し、目的にするのではなく、下から着実に固めていって国連を動かしていくことを考えています。またその運動の主体に国境を越えて人々の連帯を想定しています。

質疑応答

泉　「近代を超える」といえば、やはり昭和一七年におこなわれた『文学界』の、かの有名な座談会「近代の超克」を想起しますが、あれについてはどうお考えですか。

吹田　三回読みましたが、やはりよく分かりませんでした。そこで社会科学をやった者として率直に感想を述べます。西洋近代に対する対抗論理があれだけの思想家を動員しているのだから出ているかと思いましたら、それは期待はずれで、当時この座談会が大変評判になり一般にも受け入れられた理由が未だに分かりません。一言でいえば、想念的で各自勝手に喋っている

感じです。残念です。

開戦についてたとえ賛成であっても、百歩譲って止むをえなかったと受けてとめても、日米の国力差などについては一般の人々より知っているのだから、この報を聞いたとき、前途暗澹たる気持ちになるのが本当のところではないか、と思います。私の父は小学校を出ただけですが、「また戦争か」と重苦しく呟やいたのを子供心に覚えています。

「近代の超克」を考える際、近代西洋はどのように成立ってきたかを歴史的に明らかにし、それを受容したアジアにある日本がどのように変わってきたのか、その結果日本はどうなってしまったのか、その過程をレビューした上で「超克」を語るのであれば説得的であるのに、そうしていないのが問題だと思います。

実は私は私なりに、西洋近代が“普遍性”を主張する論理を、歴史哲学、宗教認識、科学・技術の発展、国際政治、それらの根本をなす自然法、などの分野で反論する本を書きました(『「西洋近代の「普遍性」を問う』、新評論、二〇〇六年)。本当に西洋近代を超克しようとするなら、こういう内在的な批判を積み重ねるべきでしょう。したがってこの会についても現実を踏まえ、またわれわれが直面しいている課題を念頭におきながら、それをできるだけ広い視野と深い分析で進行することを願っています。

泉　今の日本は世界に発信できるような立場にあると思いますか。発信に当たっての基本姿勢ですが、もう少し具体的に留意すべきことは何でしょうか。

吹田　「ちょっと待って下さい」というのが私の最初の感想です。発信すると言っても、近現代の日本は一九四五年の敗戦によって一〇〇年前の幕末の時の領土に戻った、戻された、ということをよく噛みしめた後での話です。外に出ることはいかに厳しいかということです。

もう一つは皆さんにお聞きたいのですが「この日本は、このように立派な国に発展したから後はよろしく」と子孫に言い伝えられる自信はおありですか、ということです。自国を守るという基本基軸を立てているかということです。自国の運命を自分自身で決定できる態勢になっているかということです。軽がるしく世界に発信して世界に貢献するということを言う前に、あまりにも重い課題があるのではないですか、と思います。

泉　その指摘は分かりますが、そうかといって日本にもよいところはあります。そのあたりが微妙なところで、等身大に捉える必要があると思いますが・・・。

吹田　悲観も楽観もなく、現実をみてそう思うのです。福沢諭吉『文明論之概略』は相当に矛盾した内容だと思っていますが、それはさておき文明開化を進めるなかで対外関係をどのように処理するかが大問題だと出発点で指摘しています。この懸念は残念ながら当たったではないですか。

「我日本に於ける外国交際の性質は、理財上に論ずるも権義上に論ずるも至困至難の大事件にして、国命貴要の部分を犯したる痼疾と云ふ可し。」あるいは「外国交際は我国の一大難病にして、之を療するに当て、自国の人民に非ざれば頼む可きものなし。其任大にして其責重しと云可し。」

原初に戻ってこの警告を噛みしめたいと思います。しかも後者の言葉には、その困難を克服

するには国民の成熟に待つという意味に受けとりたいです。とくに対外関係においては、国民全体の成熟した判断がつくられないと、悪しきナショナリズムになります。この会でも、この点をとくに強調してほしいと思います。これから様々な摩擦が生ずるとき、感情的、短期的に対処してはならないということです。

泉　それはまことに大事なポイントだと思います。ついては、われわれがやろうとしているテーマに即して展開するとどういうことになりますか。

吹田　根本的な発想で発言し、提言するというスタンスに立つことではないですか。その意味は次のような内容です。

①日本の歴史上、初めての発信であるから、その覚悟をしておくべきです。

日本は受容において成功した文明です。しかし、発信あるいは対外発展については果たしてどれだけの成果があるか、について反省してかかることです。また、日本の発信は必ずしも、いわゆる先進欧米諸国の受け入れるものではなかったこと、をよく知っておくべきです。その代表例は第一次大戦終了後のベルサイユ平和会議において、人種差別撤廃を提案したが流されてしまったことです。正義の主張は正しくとも、西洋先進国の認知するところとはならなかったのです。こういった現実を冷厳に認識しておかねばならないでしょう。

②他方、大きく歴史は転換しました。少なくとも各国は対等に発言し、要求することができます。さらに、グローバル化は世界が一つの文化になるのではなく、それが進めば進むほど反対にローカル化が切実に求められることです。個々の歴史や文化をもつ社会にいるからこそ、人間は生きておられる。だから個々のあり方が益々意味をもってきます。

例えば宗教などは再考察の好例のような気がします。中国で孔子復興運動があるように聞きますが、日本で言えば神道などはどのような意味を持つかということでしょう。

③あらゆる文化は対等の価値をもつということを出発点にしたいと思います。そこに優劣を持ちこむのは正しくないと思います。とくに日本の場合、長い間西洋信仰であり、現在もそれを抜け出していません。それが日本人の自信のなさ、自己卑下になっていて、おそらく日本ほど自国を自虐的にみている民族はないのではないでしょうか。これを払拭してかかるべきです。別に威張る必要はないですが、いたずらに卑下ばかりしていては発信する姿勢にならないのです。

④現在は、丁度、いろいろな意味で「パラダイム」の転換期であるから、あまり個々の専門分野に縛られず、相当に思いきった発言ができるし、それが求められていると思います。例えば、世界の平和のため理論構築をしようと思うと、従来の国際政治学は一国単位、すなわち「国民国家」の主権はほぼ絶対という前提でつくられているから、それを乗りこえないと先に進めない。

今世界で起こっている不況に関しても、アメリカは大量の赤字国債をこれから発行する予定ですが、その最大の引き受け先は中国となるでしょう。基本体制が違い、将来もしかすると衝突の可能性がないわけでもない中国が救いの手を出さないと世界は動かないということは、在来の思考では考えられないことです。こういった変化をよく展望して発信する中身を充実させ

るべきです。

小松　日本は雑種文化であるという説がありますが、それについてはどう思われますか。

吹田　雑種文化論があることは知っていますが、その言葉から受ける印象では唐物も洋物も、その洋物もイギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリアと多様なものがあるわけで、まるでショーウインドウにすべてが並んでいるように、きわめて印象的、表相的な表現に思えてなりません。実際はもっと入り組んでいて、丁度織物でいえばキルトのようになっているのではないかと思います。

その事例を長い間、産業の実際に接していたから、そのなかから一つだけ挙げます。日本の鉄鋼業は臨海製鉄所を建設して世界最高の競争力の基盤をつくりましたが、その実際を調べたとき、日本を代表する鉄鋼会社の建設責任者は、世界の代表的鉄鋼工場をつぶさに調べ、その縮尺図を何枚も広げ、そのなかから最適の設計をしたことを説明してくれました。戦後、資源が海上交通路で安価に利用できるようになった条件を踏まえ、日本における最適条件を実現する仕組みをそこでは開発しました。それは単に物まねでもなく、また海外からそのまま移入したものでもないのです。

雑種といっても、自己が存在し、ただ雑じり合った状態ではないのです。例えば万葉集は、漢字で表現されていますが、そこでは日本人の心情・真情が吐露されています。手段として漢字を借りたのであって、日本人自体が消滅したのではないと解釈していますがどうですか。漢字文化に呑みこまれていないと思います。

ただ、外国文化と雑じりあうなかで、そのなかから自己独自のものが醗酵して生まれてくるにはどうも時間がかかるようです。日本仏教が日本仏教らしくなったには、鎌倉時代の法然・親鸞によってであると言われるが、最澄・空海が中国で仏教を学んで日本に広めてから三百年以上かかっています。思想の領域ではこういったことがあるように思えます。機械を入れたから、明日からテレビができるといったことではない。この点はとくに要注意でしょう。

泉　現在、グローバリゼーションの中で多様性を認める動きが出ていますが、地球文明時代の思想、原理、こういったものが日本の思想のなかにあると思いますか。どうでしょう。

吹田　この会のテーマは、「グローバル時代における日本のあり方」ということですね。実はあまりに大きすぎて漠としているので、それは私なりにこれを意訳すると、①世界がまさに地球規模で展開するという新しい時代において、その安定した秩序をどのようにつくるのか、②そのなかで日本の位置をいかにして安定的に保つか、③これらの課題に対して日本は何ができるのか、またしなければならないか、この三点に絞られると思います。

そこで整理しますと、提言内容と重なりますが次のような点を日本の資産と捉えたらよいのではないでしょうか。

・長期的にみれば、異文化を積極的に取りいれ、それを発展のバネにしてきたこと。

・豊かな自然に恵まれているので、自然との共生の観念が体得され、それが多神教信仰の基となり、感性や倫理の豊かさと人間と社会の価値をつくる基礎となっている。

・豪奢な生活を望むよりも、簡素あるいは質素を尊ぶように、欲望自制的な倫理をつくってい

る。

・強烈に個人を主張するよりも、人間を相互に依存しあって存在し成長するものとして理解するが、これが安定した社会秩序や社会や組織運営を円滑にするに貢献している。

これらの特質が、広範な異文化接触時代、自然環境の破壊時代、とめどなき欲望暴走時代、抽象的個人のみを基本価値とした結果おこる社会的不安定、に対処できるものだと思います。

問題は、これらの思想はあくまで国内向けに発展してきたものですから、対外発信してどういう成果をあげたのかのノウハウがないのです。

地球的思想ということでは、K．ヤスパースが、東西の宗教・倫理などの違いは認めたうえで、お互いに交流し相互理解することしかないことを指摘しています。この人類相互の交流こそ地球的規模の共生を実らせる最初でかつ基本条件だと思います。相互に理解し合うには、まず異なる考え方のなかから、共通部分を探しだし、そこでお互いの価値を認識しあうということです。

この会との関連でいえば、久米邦武がそれをやっていたのですね。これは山崎渾子教授の論稿で知ったのですが（「岩倉使節団と久米邦武――「ジョスチス（正義）」と「ソサエチ（社会）」の発見――」、聖心女子大学キリスト教文化研究所『宗教と文化』22号）、久米はキリスト教と儒教を補完するような捉え方、あるいは神儒佛、さらにキリスト教を一線上で捉えようとしています。また「忠信」を正義と社会に対応するものといった解釈をして、忠孝仁義もキリスト信者に受けいれ可能と説いています。

分かりやすくいうと、数学で因数分解すると共約数があるように、違う宗教でもよくみていくと、共通部分が多く、これを見つけだして、相互に認識を共有すればよいということです。いたずらに他を排除するために宗教があるのではないのです。また、それぞれの宗教も時代の変化に対応して原理は変えずとも、その一部の解釈の仕方を変えることで対応する必要を説いています。歴史学者らしい接近方法です。

さらに私が付加したいことは、宗教的覆いをかぶった特定民族の選良意識、中華意識を自省することですね。例えば、アメリカの行動はむしろ選良意識を強力にかかげたユダヤ教のもので、これを批判して出現した、隣人への愛を説くキリスト教とは違うのではないか、など日本ばかり反省して歩み寄る努力をするのではなく、世界の大国も自省するところがあることを指摘しあい、相互諒解に達することを提案したい。

グローバルな発信というのは、飛躍的情報手段の発達、地球環境問題への対処、多国籍企業の展開、文化・芸術・社会生活における交流と展開というだけではなく、このような深部の真の問題の打開策を準備してかからねばならないと思います。

この会の会員の人々は必ずしも研究者や学者ではない。これが重要なことです。「実際知」の発想があると期待できます。おそらく、一人の個人として、または一家族として、外国に生活あるいは外国企業で仕事をするなかで、直面した問題を踏まえての発言があるのではないですか。

西井正臣　平和憲法そのものはそれとして、現実に日本の平和が守られたのは、安保体制下であったからだろうと思います。とくに冷戦時代においてはそれ以外の道はなかったと思います。

冷戦が終ってから、今度は中国が非常に大国化してきた。変な言い方ですけれども、中国にとって中国以上の国は存在しないんですね。

そういう国が隣にあって、しかも北朝鮮は朝鮮の統合を夢見ているわけです。そういう隣国がある状況のなかで吹田さんのおっしゃるような提言を国民単位で発していて有効だろうか。難しいかもしれないけれども国家レベルの交渉が重要なのではないかと思います。

吹田 世界に対して平和構築を発信しながら、自己―日本についてはどう考えるか、ということですね。これは二正面作戦を考えています。一見矛盾するようですが・・・。

まず日本は自分の国は自分で守るという意識が必要です。そのためには、どれぐらいの軍備は必要なのかという議論を国民レベルで行い、「自衛のための軍備」は持ってしかるべきだと思います。それでも駄目な場合初めて安全保障体制の協議に入るのが筋だろうと思います。今の日本の状況は、既成事実をそのまま押し付けられた状態で、今日まで仕方なく来てしまった。思い起こすのは、サンフランシスコ条約を結んだときにインドが欠席したことです。インド政府の声明は、一度米軍が撤退した後に国民が米軍の駐留が必要であることを認めたならば、米軍の存在を認めればいい。しかし、その手続きを踏んでいない故に、インドはそれを承認することはできないという声明を残しています。

次に中国問題です。その中国問題を討議する場合、日本は要の位置を占めています。結論的に言うと、鉄鋼の消費量から推定して中国が先進国をキャッチアップするのは、二〇三〇年から二〇四〇年ごろになると思われます。私はその時が危機で、中国がどう動くかというのを考えています。また、東シナ海の問題を考えた場合、航空母艦を持ち海軍を配置するでしょう。また最近、中国はアメリカとの交渉の際に、太平洋をハワイを境に二分割案を出したといいます。

こうした中国問題にどう対処するかは、日本の地政学的運命にも関わっています。中国の膨張や拡張をアメリカが黙っているはずがありませんし、日本は防衛体制をきちんと行うべきだと思います。

私は国民国家を否定しましたが、巨大な国民国家が世界で出来上がるという、二一世紀の新しい事態にどう対処するのかが問われています。ここでせめて言えることは、〝五〇〇年間西ヨーロッパが世界を支配してきたのと同じことをやるのはもうやめましょう。それが東洋の新しい道ではないですか〟と説く以外に方法はないと思います。これは私の頭にあることです。

石垣 日本が「戦争を全くやりたくない」という気持ちをはっきり表明することは、とても素晴らしいと思います。最近多くの人は日本は駄目と言いますが、では日本をどうしたいかという確固たる意思を明確にしたことが、数十年間ないように見受けられます。

戦後において日本は「べき論」と「対応論」しかやってきませんでした。安保にしても自衛隊にしても日本の意思を表しているものではなく、結果的に対応論であり、軍隊を持たないから平和であるという最も妥協的な産物であるわけです。ここまで吹田さんが強く主張されているのは、最後まで戦争をやらないで〝江戸時代の鎖国へ戻ってもいい〟あるいは〝場合によっては滅びてもいい〟という覚悟に聞こえます。その覚悟があるから、平和を言えるわけです。

それともう一つ、宗教との関係はどうなるのかという話です。日本はもともと戦争が嫌いな国ですし、聖徳太子の「和をもって尊しとなす」以来、戦争は嫌いなので先生のお話は充分伝わりますけれども、他の宗教への働きかけが難しいと思います。イスラムにしてもキリストにしても、結局、僕に言わせれば戦争をするための宗教です。一神教で他を認めないから、結果的に戦争になっていきます。そうした国への説得の材料がなければならないと思います。日本が開き直って「平和でいいんです」と言ったときに相手の宗教では、全く理解できないように思います。

吹田　今日の話では、とにかく宗教を持ち出さずに平和を考えるにはどうしたらいいかということを主眼としています。〝お説教〟をしたくないのです。その意味で論旨の展開に制約をかけるのですが、最後の最後にはやはり新しい理性や道徳観に目覚めないとこの論理は貫徹しないと思いました。

さらに踏み込んで言いますと、カールヤスパースに影響を受けています。ヤスパースの最大の功績は、西暦〇年マイナス一〇〇年の間に人間の叡智を代表するものが総て出ているといい、これを「アクシス」と言っている点にあります。これを第一のアクシスとするならば、我々は第一のアクシスから進歩発展はしたけれども、アクシスで確立されたものは結果的に実現されていないといっています。

二〇年位前にダニエルベルとシンポジウムを行なった際、ベルは第二のアクシスは西洋が作り出した科学技術だと言いました。これは正に西洋的な発想です。私は、科学技術では人間が求めてきたものを解決したとはいえないと思います。したがって、ここで第二のアクシスを作り出せればいいなという思いが、今回の発想のもとになっています。

森本　今日のお話は理想論ではなく極めて現実的に感じました。先生は人間の意識変革を唱えられていましたが、正に現在の地球はそういう展開の真っ只中にあると思います。少し前までは理想的にとられたかもしれませんが、今、まさにこれまでなかったことがどんどん起こっています。これはインターネットの力です。ですから戦争の愚かさというのは、もう分かりきっていることだと思います。今まで超大国がやってきたものをこれから中国がやろうとしている愚かさを世界にアピールできるのは、日本しかないという印象です。死ぬ覚悟さえできていれば、アピールできるわけです。これは、全くいいチャンスであり、実現可能なものだと現実的に思いました。

私は両親が広島出身で戦争中にちょうど広島にいましたし、また仕事の関係で転勤で広島に居りました。原爆ドームをいつも見ていた訳ですけれども、あそこへ世界からたくさんの人が来ています。慰霊祭のときはもっと大勢の方がお見えになります。あれだけの人数が世界から訪れるということは、世界的関心の高さを表しています。それをみていると、平和の尊さやあり方は皆、世界中の人が知っていると思うわけです。これはインターネットで世界中にアピールできることだと思います。だから今やインターネットの力の方が暴力の力より強いと思います。そう考えると、今日のお話は実現可能なものだと確信を得た次第です。非暴力というものがどれだけ重要であるかということをまず日本が知らせれば良いと思います。

世界に発信する日本文明の課題

永池　榮吉

一、はじめに

現在、日本の家庭がおかしくなっています。どうしてこういう状態になってしまったのか。そのことを考えてみると、どうしても戦後のアメリカン・デモクラシーの受容の仕方に問題があったように思います。例えば、男女の平等が推進されて数十年、欧米に比べると未だしの感はするものの、女性の地位がかつてないほど高くなっている反面、家庭における母親の地位が、これだけ落ちた時代もありません。

そんなところに、戦後民主主義の盲点というか、欠陥を解く鍵があるのではないかと思います。さらに、こうした問題を追求していくと、この国の土着の精神風土にあるものと、きちんと接合されないままに進められてきた戦後思想の見直し、という問題が浮かんできます。

二、現代文明の危機

（一）ハンチントンの文明論が突きつけているもの

アメリカ・ハーヴァード大学のサミュエル・ハンチントン教授は、一九九三年に「文明の衝突？」と題する論文を、『フォーリン・アフェアーズ』誌に発表し、これに対する賛否両論は、世界的論争にまで発展しました。その後、教授がこの論争を踏まえて発行した同じ題名の著書は、世界的なベストセラーにまでなったことは周知の通りです。

彼によると、世界の文明は多極化しており、それは《西欧、中国、日本、イスラム、ヒンドゥー、スラブ、ラテンアメリカ、アフリカ》の八つに分類されるということです。ここで注目すべきは、日本は中華文明と一線を画した文明と位置づけされ、しかし、他の文明と異なって、一国一文明であると指摘していることです。

現在、世界をリードしているのは西洋文明であり、これに過激に対抗しているのがイスラム文明です。また近年国力をつけてきた中国が共産主義に変わる和偕社会を提唱し、衣替えした儒教を新たな旗印に掲げつつあります。世界中の大学に目下、二百以上の孔子学院を設立しつつあるということです。

では、日本はどうなのか。米中間の対立が先鋭化したとき、日本はどういう路線をとるのか、とハンチントンは問いかけます。しかし、第二次大戦の敗北による後遺症と、アメリカの巧みな占領政策によって、日本人は自国の文明に対して全く認識ができておらず、日本文明を世界に発信するという発想すら持てないのが一般的な意識です。しかし、現在の世界は、明らかに危機的な状況に陥っています。しかも、西洋の人間中心の文明に代わる、生命もしくは宇宙中心の文明を希求する場合、実は日本文明にこそ、その手がかりがあるのではないか、と考えられるわけです。それだけに、日本人はもっと自国の文明を知り、世界とのコミュニケーションのとり方を覚える必要があります。自らの主張を発信してこそ、世界との健全な対話が生まれるからであります。

（二）現代文明の危機とは

では、文明論の視点から見た現代の危機とはどんなものでしょうか。（以下は、二十一世紀文明研究所の近藤章人氏の捉え方を参考にしている。）

一つは、科学技術の暴走です。そこには、人類の愚行とも言うべき、果てしない欲望の追求があります。つまり、現代文明は人間の内なる「欲望の開放」を果たし、外において「人間圏の拡大」を実現しました。その結果の最たるものが、地球環境問題であることは言うまでありません。欲望の追求には切実なものもあります。例えば、子供が欲しい。しかし、出来ない。そんな時昔の人は、これを運命と受容したわけですが、現代医学は試験管ベビーによる受胎への道を開きました。さらに、代理母という問題も起きています。際限ない人間の欲望、願望はいわゆる神の領域にまで侵入してはばかりません。

かつて、ソニーの井深大氏は幼児教育の分野においても、多大な功績を残しましたが、その一つにゼロ歳児教育や、科学に裏づけられた胎教の重要性にまで踏み込み、貴重な提言をしています。しかし、こうした幼児教育に関する長年の研究成果に鑑みるなら、代理母の発想というのは、幼児の心理基盤の形成が他人に委ねられることへの危惧が、スッポリ抜け落ちているわけです。

現代文明の危機として二番目にあげられるのは、覇権主義の鬩ぎ合いです。冷戦構造が崩れたあと、アメリカ一極支配がイラク戦争の失敗と金融経済の躓きによって弱体化し、先行き不透明な現状です。中東のガザにおけるイスラエルとパレスチナの戦争、あるいは北朝鮮の核問題、さらには旧ソ連領でのロシアと周辺各国との軋轢など、世界各処で覇権を巡る紛争が続出しています。さらに、中国の台頭が欧米各国との関係をどのように展開に持っていくのか、予断を許しません。

三番目に、倫理、道徳、法秩序の欠如があげられます。特に、先に上げた各地における紛争、テロ、犯罪などの勃発の背景には、絶望的なまでの貧困にあえぐ人々の存在があります。現在、貧困が原因で三秒に一人の子が死んでいく現実があります。例えに言われていることですが、世界がもし百人の村であるなら、わずか十人の人(日本人も入る)が八割の富を独占しているわけです。ことにテロは、絶対に容認できる行為ではありませんが、これは追い詰められた弱者の抵抗という見方さえ出来ます。つまり、彼らはテロという手段でしか自己主張できない存在なわけです。文明論ではどうしようもない、世界政治の現実があると言えます。

四番目に、人種、民族、国家、地域間の紛争と対立です。いずれも先に上げた第二、第三の問題と関連するわけですが、これらは皮肉な言い方をするなら、人間が存在する限りなくならない、とも言えます。しかし、世界的な相互依存のネットワークが形成されつつある今日です。このネットワークをさらに強化していくことが、自国の平和と安全を守りつつ、経済的な成長を実現する基盤となることでしょう。しかし、そのために日本は、戦略的な構想力と高度な文明性（欧米的なものと一線を画した）を持たなければならないと考えています。

五番目に、宗教の形骸化と宗派間の紛争があります。ことに、現代の国家紛争には必ず宗教的な対立が絡んでいることを思うと、何のための宗教かと思ってしまいます。こうしたことになると、日本は宗教、宗派間の対立を克服した歴史を持っています。いま世界は、人類全体を

結合させるための哲学の登場を望んでいるのではないか、と思うのです。

第六番目が、学問、科学の専門化、分業化です。最もわかりやすい例として、よく語られることですが、一人の患者の手術の仕方を巡って、複数に関わった医師同士の意見の対立が起きることです。西洋医学の根底には、西洋哲学があり、その本質にある思考は「分ける」ことです。自他を分ける。心身を分ける。次々に分けて、対象を細分化して、そこで実験を繰り返すことで法則を発見する。近代において、西洋が東洋を凌駕したのは、こうして飛躍的に発展した科学技術の成果の賜物でした。

確かに、これによって西洋列強はアジア・アフリカを植民地化し、第二次大戦後独立させたとは言っても、旧宗主国としての影響力はなくなってはいません。ただ、ある対象領域に限った発想で生産性を高める手法が、地球環境に大きな影響を与えているのも事実であります。

例えば、近年オーストラリアやアメリカの一部地域において、大量のミツバチが姿を消している事実が報道されています。ミツバチが植物の生育に不可欠な役割を果たしていることは周知の通りです。そのミツバチが、ある日突然いなくなっているのです。もちろん、行方不明です。かつてないことです。その原因として浮上したのが、ミツバチが受けるストレスです。つまり、彼らは多くの様々な植物の間を飛び回って受粉し、交配させていく生態をもっています。

だがアメリカやオーストラリアの農場では、生きた機械の役目を彼らは負わされているわけです。しかも、テレビのインタービューに登場した経営者は、さらに薬を開発して、ミツバチの効果を高めたいと話していました。

生産性を高めるために、無機質の肥料を使い、さらに虫の被害を防ぐために農薬を用いる。それらが土地を痩せさせると、またそこに多くの肥料などを投入する、という人間中心の仕組みを作り上げるのが、現代文明の性質です。

七番目に取り上げたいのは、太古からの叡智や精神世界の軽視です。近代文明が世界を席巻することで、科学の解明が及ばない事柄を「迷信」として軽侮する意識が醸成されました。しかし、解明し得ないのは科学が未熟だからだという場合もあります。

例えば、戦後久しく、「胎教」は迷信だとされてきました。その理由は、母体と胎児をつなぐ神経的な機能が存在しないから、母親が何かをやったからといって、おなかの子供に影響することはない、と考えられてきたのです。しかし、現代では母体の様々な生理的な仕組みによって、その情緒や生活行動が胎児に影響を与えることが証明されています。このように、先人からの言い伝えや経験則の中には、現代の私たちが無視し得ない叡智や経験知の潜んでいるものがあります。ことに、戦後の日本人が忘れ去っている「霊性」の問題は、極めて重要であります。

七番目にあげるべきは、グローバルな意識の欠如であります。覇権主義の蔓延している現代においては、「宇宙船地球号」の提言は、残念ながら各国の政治指導層には受け入れられないのが現実です。しかし、経済のグローバル化が進行する未来において、やがて現実的なテーマとして浮上する日が来ることを願いたいと思います。

三、日本文明とは何か

（一）日本文明の注目すべき点

ここで日本文明というと、そんなのあるかという人が、必ず出て来るはずです。それほど日本人は自国の文明には無関心になっています。しかし、どこの国にもそれぞれの土着の習俗や生活様式があります。当然わが国にもあります。自国の文明への自覚と誇りを持ちえてこそ、他国の文明への畏敬が生まれるのではないでしょうか。そうしたスタンスに立って、日本文明が世界に発信するものは何か、またそれが現代文明の危機的状況の中でどんな意義を持っているのかに、触れてみたいと思います。

その一は、キリスト教のような一元性、また「あれかこれか」という二項対立を超えたものが、日本文明にはあるということです。もともと、アジアはファジーであると言われてきましたが、対立から調和へと転換していく知恵が、この国の意識風土を特徴付けているように思います。

その二は、日本は二千年の歴史の中で三層化され、ゆらぎの姿で成立しているということです。その三層とは、①スンダランド北上の南方系（縄文系）、②中国・朝鮮の大陸系（弥生系）、③その他（北方系？）であります。これは国立博物館“日本人はるかな旅”展に説明されています。スンダランドというのは、現在のインドネシア付近の島々が、約七万年前から始まる最終氷期の頃地続きになっていて、スンダランドと呼ばれていたそうです。これらの重層性で成立したゆらぎの文化は、基層的にはより先住民であったスンダランドの縄文人と、中国、朝鮮半島からの弥生人の二つの民族が混在し、世代を経ることによって、『日本民族』が形成されたわけです。以来、二千年にわたって、似たパターンを繰り返してきました。いわば、雑種性であるために固定的でなく、多様性に富んだゆらぎの中で、三層構造は保たれてきたのです。その象徴的なものは、お正月の雑煮です。列島の北から南までの違いはあっても、「根菜、味噌・醤油、もち」の三層構造は変わらないものとなっています。

その三は、この列島において江戸時代には、石・土・泥、海・山・川と水との自然循環の上に、基本的なライフスタイルを形成してきたことです。いわば、『循環型社会』をつくりあげた経験を持っていることです。日本は、明治維新と昭和の敗戦及び復興の過程で、すっかり社会的変質を遂げたわけですが、こうした歴史的経験は現代においてこそ、高度な文明社会の仕組みの中で甦らせることが、地球環境問題への一つのサンプル提供になるのではないでしょうか。

その四は、神・自然・人間（天地人）を連なりというか、関係性の上で捉えていることです。しかも、その連なりをコーディネートしているのが、祖先という存在です。自らの中に祖先が息づいていて、それが神に行き着き、神は自然の中に息づいている。これを感性的に捉えてきたのが、この島国の人々です。それは、神・自然・人間を対峙した関係で捉えている西洋的な自然観、宇宙観とは異質であります。しかもこれは、日本独自のものではなく、かつてソフィスト登場以前のギリシャでも、同様の宇宙観・人間観を持っていましたし、キリスト教布教以前の世界の各処に存在していました。こうした宇宙観を《コスミック・ライフ・システム》と言います。

その五は、キリスト教に拠らない市民社会を実現したことです。今後どうなっていくかはともかく、旧ソ連崩壊後まで重要な役割を果たしてきたG7に、日本は入っているわけですが、

他の国はみなキリスト教国家です。自由、人権、議会主義、開かれた市場という先進文明国家としてのスタンダードをクリアーしたからこそ、メンバーに迎え入れられました。しかし、これは世界史的に見て、とても意義深いことではないでしょうか。なぜなら、西洋型とは異なるデモクラシー(古代ギリシャのアテネ以来である)を、日本は実現したわけですから。ただ、そこに別な問題が潜んでいますが、これについては後に述べたいと思います。

もともと、このスタンダードは古代ギリシャのアテネが、自由、市民権、議会主義を標榜していたものが、淵源となっているように思います。ギリシャ文明とキリスト教によって、世界をリードする西洋文明がつくられてきましたが、日本は全く別な歴史的経緯を経て市民社会を形成した。この事実はもっと、語られても良いのではないでしょうか。

かくて、上記に掲げた中で1～4までは、縄文以来の日本文明の底流に存在するものだと言ってよいでしょう。いわば、これらに依拠しながら欧米と価値観を共有できる市民社会を堅持することが、日本社会の課題だと考えられます。そのためには、「明治維新」「昭和の改革」で切り捨てられたものの見直しが必要であります。この二つの革命及び改革は、いずれも日本の近代化への取り組みであります。「明治維新」は自らの意思で、「昭和の改革」はアメリカの強制によったものです。現代の日本は、もう一度幕末に視点を戻し、日本文明の現代的なスタイルを再構築すべきだというのが、私の主要な論点です。

(二) 世界に発信するための条件

次に、日本文明が世界に発信するには当然、グローバルな知性に対する説得力が不可欠であります。そのための条件を次のように考えています。

[1] 第二次大戦の折に味わった文明的孤立を可能な限り避けることです。第二次大戦敗戦後に、ドイツと日本では明らかに、同じ敗戦国でも扱いは違っていました。欧米と同じキリスト教国家だったドイツは、その歴史的、精神的伝統を破壊されることはなかったのです。しかし、異教徒の国家であった日本は徹底的に破壊されてしまいました。こうした歴史的体験を踏まえるなら、わが国は先進国のスタンダードともいうべき「自由」「人権」「議会主義」「開かれた市場」などを堅持する土壌に立たなければなりません。これは日本の平和主義を貫く必要条件でもあります。

[2] 日本古来の生命観、宇宙観を西洋的な視座から再構築することです。西洋的な視座というのは、とくに明治維新からの近代化以降、少なくとも「和魂洋才」に象徴されたように、日本人全体が好むと好まざるに関わらず、西洋文明の洗礼を受けているからです。しかも、それは世界的な文明交流の上での検証に堪える水準と普遍性を備えていなければなりません。これは世界における日本の文明的な位置づけを、自他の関わりのなかで認識し、自覚することで、偏狭なナショナリズムに陥ることを防ぐためでもあります。

[3] こうした世界文明との関わりの上に形成される倫理観を、日本人の生活土壌に深く定着させることです。その好例を私たちは、歴史的には神道、仏教といった宗教レベルを超えた江戸時代の武士道や商人道（さらには良い意味での任侠道まで含めて）など、現代にもなお残っている「道」の思想は実践的哲学ないし倫理観と見ることもできます。

〔4〕世界思想として主流をいくキリスト教（聖書）とも、いま欧米に受容されている禅の世界やアジアになお存在感の強い儒教（論語、「易」や陽明学などを含む）とも対話が可能な接点や領域に立脚点をおくべきです。私は一昨年まで、中国人民大学で開催された国際儒学学会に出席し、研究論文の発表を毎年行ってきました。テーマとして、「論語は聖書と対話ができる」「儒教はギリシャ哲学と対話ができる」「論語はドラッカーと対話ができる」などです。これは、中国のお国柄から、儒教による文化帝国主義になりかねませんので、あえて他の思想との接点を取り上げました。つまり、普遍的価値にアプローチする姿勢の重要性を、アピールした次第です。

〔5〕それは二十世紀において行き詰まりをみせてきた、人間中心の思想にではなく、宇宙もしくは生命の本質に視座をおいて、人間のあり方を追求するものでなければならないということです。この場合、宇宙の外に神を見るキリスト教的な態度ではなく、宇宙の内に神を見る。また宇宙の本質の中に生命を見出し、生命の本質の中に宇宙を見出す態度が、日本文明を特徴づけていると考えられます。

〔6〕それは西洋文明への問い直しであるとともに、近代日本を見直す立場に立つことを意味することです。昭和の軍国化及び敗戦という挫折はあったにせよ、基本的に日本は現代まで、欧米化の路線を歩んできました。つまり、近代主義の破綻という視点に立つなら、彼我の文明は共通の閉塞情況に立ち至っているのです。

四、日本人が日本を取り戻す為に

（一）日本人が『日本』を取り戻すための条件

日本人が『日本』を取り戻すための条件という言い回しは、わかりにくいかもしれません。要するに、「現代の日本人が日本文明の歴史と成り立ち、その世界史的な意義を自覚すること」に他なりません。すでに述べているようにわが国の現実は、日本文明の存在そのものを認識しえていない知識層が少なくないからです。それゆえ、下記の項目に絞って取り組む必要があります。

〔1〕縄文文明を基底としながら、大陸からの輸入された文明と雑居、重層化、融合化することで成立した日本文明史への認識の合意形成です。

〔2〕そのためには、日本的なものに対する戦後の誤解、誤謬を払拭する必要があります。それは明治維新後につくられた「国体」はじめ「国民道徳」などの“天皇制イデオロギー”は、必ずしも日本文明の主流ではないことです。「明治」はむしろ国家的危機に際会した政府が、それを乗り切る為に伝統を破壊し、近代化を図った日本史上の一試作品と捉えるべきです。戦後の対立軸は周知のように、こうした“明治的なもの”への回帰（保守）と、それを阻止しようとするもの（革新）とに分かれました。これと、米ソの冷戦構造の国内的対立が、戦後の構図をつくったと言えます。いずれにせよ、日本近代における、明治的なものの行き詰まりが、無謀な戦争への道となり、敗戦をもたらしたのではないか、というのが私の解釈です。

これに関して一つの例を挙げるなら、江戸時代までは天皇は仏教徒だったのです。し

かし、明治政府は仏教を切り捨て、全国の神社を国家神道の下に置きました。しかし、神仏混合こそ、日本の伝統基盤であったのです。仏教を切ることで、日本は世界思想に無縁な、東アジアの狭いローカルな思想に自らを閉じ込めてしまったのです。

〔3〕戦後の民主化の成功は、それまでの明治以来の歴史的集積があったからです。アメリカの占領政策が必ずしも正鵠を得ていたからではありません。その意味で「日本民主主義の系譜」(例えば福沢諭吉、坂本竜馬から吉野作造、河合栄治郎に至る人物論でも良い)を英文で作成し、欧米とは異なるデモクラシーの存在を彼らに認知させるというのも、一方法です。海外の評価が、日本人の自覚を促す有効策であるからです。

〔4〕もっと重要なことは、日本文明を世界に発信するには、その土台つくりが不可欠であり、そのためには“戦後的なもの”の本質を改革する必要があるということです。

戦後的なものの本質にあるものを、私は「日本型個人主義」と呼んでいます。「日本型個人主義」とは、第二次敗戦後アメリカ占領軍によってもたらされた「アメリカン・デモクラシー」が、日本的風土で育てた亜流の個人主義を意味します。

個人主義は本来、国家主義に対峙する概念であります。敗戦後、国家の尊厳と利益のために国民の人権が犯されてきた過去の歴史と決別し、人間の尊厳性遵守を正義の基本概念とする国家に、日本は生まれ変わったのであります。しかし、国民自らが闘いとった人権思想でなく、さらにアメリカの国家戦略によって企図された民主化であったため、戦後の個人主義は多分に奇形的なものとならざるを得なかったのです。

それでも戦後数十年間は、戦前までの文化的、教育的な遺産がわが国の精神土壌に存在したため、過去の閉鎖的な桎梏(しっこく)から解き放たれた国民の精神活動は、国民経済の飛躍的発展をもたらして国力を強化しました。この時点では「日本型個人主義」はプラスに作用し、わが国は国際社会における地位を高めたのであります。しかし、それから六十年を経過し、過去の遺産の食い潰しが進んだ程度、「日本型個人主義」の負の要素が露わとなった。それが、日本の現在であります。

(二)「日本型個人主義」の特徴

先ほど「日本型個人主義」は欧米の亜流であり、奇形であると述べたが、それがなぜなのかを少しく吟味してみたいと思います。

第一には、神を持たないということです。欧米の個人主義は一神教の「Ｇｏｄ(神)」を持っている。神との契約関係にある個人が、市民社会を形成しているのですが、日本における個人主義は、人間としての尊厳性を根源的に支える何ものも持っていません。いわば、虚無主義であり、時間の経過と共に深刻化する問題であります。事実、戦後六十年、それがもたらす現象が随所に起きているではありませんか。

第二は、国家意識を忌避することです。欧米での個人主義は、国家は自らを守ってくれると共に、自らもまた国家を守るという双務関係を持っています。しかし、日本における個人は、国家を対立する存在と見る傾向にあります。これは、戦前の重たい国家体験が尾を引いた上に、

マルクス主義の影響をも受けたためでありましょう。また、官僚主導の国家運営への反発もあって、「国民」より「市民」の表現が好まれる傾向にあります。北朝鮮や中国ならいざ知らず、自由・人権を保障する国家の治安下にありながら、「国民」という言葉にためらいを覚えるのはそうした事情にあるからです。

第三は、上記の必然的結果として、自衛の意識が欠落していることです。欧米の個人主義は、前述したように国家との双務関係をもち、それなるがゆえに国防意識が強いわけです。またエリートほど、そのための軍務体験が不可欠とされます。しかし、わが国の個人主義には「国防の観念」はスッポリ抜け落ちています。

第四は、家庭・家族の連帯を育むシステムを持たないことです。「日本型個人主義」の致命的な欠陥の一つが、敗戦直後に“教育勅語”を廃止しながらも、これに代わる何らの道徳的な指針も定め得なかったことです。一神教の倫理観に代わるものが、東アジアにおける伝統的な家族道徳であったにもかかわらず、家族の絆を育てる教育よりも、個人の自由や権利を強調する教育を主流としてきました。したがって、世代を重ねるごとに、「個族」への悲惨な道を歩むことになったのです。

第五に、市民社会の原型としての家庭像がないことです。そこに無原則の平等主義が働いています。欧米の場合、神の前の平等が説かれ、これに基づいた日常の倫理規範が示されています。しかし、心理的社会主義が蔓延した日本では、家庭で誰が責任者なのか不明です。国家に例えるなら無政府状態。チームとするならリーダー不在です。これは男女の平等と父母の役割の問題が整理されず、放置されたままであるからです。“公”よりも“私”に走りやすいい現代の傾向は、そうした家庭の状況が育てているともいえます。日本の教育を崩壊させた元凶の一つを、そこに見出すことが出来ます。

第六は、歴史観がないことです。わが国の教育システムは、久しく唯物史観の影響下にあり、魂の欠落した道徳教育があるのみです。一般的に、郷土の偉人や土着の文化と結びついた教育が存在していません。その意味からすると、中国が孔子路線に舵を切った今こそ、日本の道徳教育もそれに合わせるべきです。中国との共通基盤ができてこそ、彼らの言う“喧嘩”、いわば活発な論争ができます。こうした足がかりが出来てこそ、近現代史の問題を、外交カードにする中国、韓国の動きを封じる手がかりが、得られるのではないでしょうか。

第七は、生きることが軽いことです。日本の個人主義は、経済的豊かさに伴う個人生活の肥大化が、推し進めた一面を持っています。ですから、極めてエゴスティックになりやすく、道徳観不在です。欧米のような、人間が神の子として位置づけられるキリスト教風土と異なり、わが国では人命の重さが強調されることはあっても、それが道徳意識を育てる土壌にはなっていません。神の愛に代わるところの親の愛、つまり子供を生み、育てる親の愛の重み、苦労の重み(恩の観念)こそ、人命の重みにつながっていくのですが、これに触れることはなぜかタブーのようです。戦後、自己の生を敬虔に意識するなんらの教育も存在せず、知能偏重の教育を主流としてきました。それに加え、恵まれた環境で軽く生きられる日本では、生きることの重みが子供へ体験的に教えられることがありません。

第八は、人間としての骨格が弱いことです。これまでの特徴の帰結と言えよう。パンセは「人

間は考える葦である」と述べたが、彼には信仰がありました。わが国の葦(個人)は根無し草に他なりません。それは角度を変えると、知的軟体動物とも言えます。辛うじて、この国土にある優れた文化的蓄積が有能な人材を生み出し、「日本型個人主義」の弊害をこれまでカバーしてきたというべきではないでしょうか。

(三) 何をなすべきか

では最後にこうした状況を踏まえ、「日本は何をなすべきか」ということになります。日本の再生は容易でありません。しかし、この国の潜在的な文化力を考えるなら、決して不可能ではないと考えています。私たちの基本的な指針は、先に上げた“世界に発信するための条件”を足場とすべきです。さらに、従来の保守と革新の対立という時代遅れの機軸に変わる、新たな革新の軸を作るべきであり、そのための理論武装を図るべきですい。その突破口の一つは、「明治と昭和の遺産」の見直しにあります。現在の官僚制度、中央集権体制、教育制度等時代遅れのものばかりです。

さらに世界に発信するための、日本文明の現代的意義に関する研究、あるいは日本民主主義の系譜に関する研究、もう一つは論語教育の研究なども突破口になると思います。

私は日本文明の研究家ではありません。しかし、この研究会の趣旨に賛同して、敢えて大風呂敷を広げた次第です。宜しくご検討を頂きたいと思います。

質疑応答

西井正臣 今日のお話には、景気循環のようなものがありまして、敗戦直後はアメリカニズムがはびこっていて、とにかくアメリカのものをしっかり入れなければいけない。ところがアメリカニズムが蔓延してくると、「これはどうも良くない」ということでヨーロッパを入れる。次にジャパン・アズ・ナンバーワンとおだてられていい気になる。ところがバブルの頃からおかしくなって「もう少し自信をもたなければいけないんじゃないか」ということで、今に至っているのだと思います。したがって、日本人の考え方、日本文明には波があると思います。その波の中で日本、あるいは日本人が外国に自己主張しようとする時が、歴史的に見ると非常に危険な時ではないかと思います。

「世界に発信する日本文明」と位置づけすることについては、少し躊躇があります。要するに、文明全体を発信しようとすると勢い付いてしまうわけです。終戦後われわれは敗戦国ですから、アメリカから押し付けられた感じはありましたが、ペリーが来て開国後、日本が欧米視察に出かけた時には、自ら学びにいきました。そこではどの国も「はいどうぞ、学びなさい」ということで、自分のところが全てだとは言わないわけです。もちろん日本文明にも良い面も悪い面もあります。実に細かいものを工業化でつくった部分や漫画やアニメ、服装やデザインなどはとても素晴らしく誇っていいと思います。しかし僕自身も三井金属からエッソへ入りサハリン開発の仕事をしましたが、資源開発の問題などは日本人には合わないものだと思います。したがって、発信についてはちょうど江戸期に浮世絵がフランスで受け入れられたように、それほど日本人がシャカ力にならなくても、これだけグローバルな時代ですから良いものは評価

されるべき時代だと思います。そういうところをしっかりと認識して磨いていった方がいいのではないかと思います。

それから、正しい個人主義について、西欧の場合は長い時間戦い抜いて血を流して確立してきたわけです。日本が個人主義といっても、せいぜい明治期ぐらいからですから、それほど血も流していないし、現在の政治を見ても、あれはとても個人主義を全うしている国家の姿とはいえません。だから反省すべきところは反省し、それから世界に出すものに関しては特に若い人を勇気づけることによって、自ずから出るものは出るという方向の方が宜しいのではないかと思います。

永池　全くおっしゃる通りです。ただ、日本人自身が日本を知らないですよね。今の若い人たちは日本への誇りどころか、日本への軽蔑とか「日本は悪いことをした国である」という意識が強いと思います。

私は敗戦の年に小学校に入ったのですが、全く戦後のデモクラシーの下で育ってきて、三十過ぎて初めて東洋的なものを見るようになりました。ですから基本的には今日もお話したように、自由、人権、議会主義、開かれた市場というものを基にしてきたわけですね。どこの国を見ても、例えばアメリカの政治を見ても意思が強いです。日本の場合はとくにそれが弱いんですね。日本の若者を見ても、彼らの中で自分への誇りを持っている人は極端に少ないです。中国、韓国に比べてもです。それから個人としての誇りも持てない、家の伝統というものも今はもうないですから家の誇りも持てない、国家民族としての誇りも持てない。何もないのが現状ですから、そういう意味では、世界へ発信するという形をとりながら内部的な啓発をしていくという意味になるのではないかと思います。

この発信という言葉は基本的には対話ですよね。だから僕は対話をしていって非があればそれを改めていけばいいですし、この場合の発信する姿勢を気を付けていけば、今おっしゃられたようなことは避けられるのではないかと思います。とくに日本人の場合は、異端を排除するところがあるんですよね。これが僕はいけないと思うんです。異端を抱えてそれを克服していくことが閉鎖性の持つ弊害を乗り越えていく生き方だと思います。その点で、今おっしゃられたことを我々はきちんと自戒しながら、世界との対話を進めていくことが必要だと思います。結局「世界にお役に立つことはないか」という姿勢で行く必要があるのではないかと思います。

泉　西井さんの今のお話は、「あまり発信発信と言ってシャカリキになってやる必要はないんじゃないの」ということですよね。今あるように発信という言葉よりも対話の方がいいと思います。こちらから自己主張して相手を説得して、日本こそ世界を救うんだ、地球を救うんだという傲慢さはよくないから、そうではなくて、むしろ色々な角度から相手から攻められた時にきちんと対応する、つまり対話をするということでしょう。何かあると、日本の官僚はドイツやフランスの例を引き合いに出して、それを基に政策をつくるということですよね。そこには、日本の歴史とか文化という日本の良さについてあまりにも認識が不足しているように思います。こちらの良さもあちらの良さもバランスよく持っていればいいんだけれど、そこを全然見ていない感じがします。だから何かあると西洋の良さを持ち出してくるけれど、それは日本の良さでもあり、日本の方がもっといいものを持っているケースも多分にありますよね。それが戦後

の教育に起因していることも大なので、その辺を見直さないといけませんね。

吹田　「日本はシャカリキになるので、その点を注意しなければならない」ということは、おっしゃる通りですよね。日本の歴史でシャカリキになって対外的に二回失敗してます。それは豊臣秀吉の朝鮮征伐の時と大東亜戦争の時です。大東亜戦争のときには八紘一宇というスローガンを掲げましたが、本当に独善主義だったと思います。それぞれの文化の価値を認めた別のやり方があったと思うのですが、シャカリキになって失敗したんですね。

逆に今はアメリカがシャカリキになり過ぎていますね。「世界を支配できるのは、俺達だけだ」とか「自由や民主主義を広めるのは、俺たちだ」ということで、こうした国が外へ出て行った場合には、失敗するケースが多いと思います。対外姿勢はどうあるべきかということは、本当に注意深くしていかなければいけないと思います。但し、先ほど泉さんがおっしゃったように、何かを言われた時に、これまで有耶無耶にしてきてしまいきちんと説明をしてこなかった。答えを出しているのはむしろ外国の研究者であるという事実は、本来おかしなことですよね。日本的な経営の在り方を考えてみようと最初に言い出したのは、アレグレットでアメリカの学者ですからね。日本の良い点を封建的なものとしていたのもおかしな話で、そういう点をきちんと明らかにしていかなければならないということです。

泉　聖書と論語、儒教とドラッカーの話が出ましたね。つまり論語の話をするのに聖書の言葉、ロジックを使うとか、日本の多神教の話をするのにギリシャ神話を使うとか、向こうの人と実際にやりとりをして非常に説得力を持ったという経験はおありですか。

永池　もともと論語を語っても、何年か前まで全然通じなかったんです。そこで結局聖書との絡みで説いた方が聞いてもらえるだろうということで、七、八年目に「論語と聖書」という本を国内で出したわけです。それがきっかけで中国の人民大学の孔子の学校で対談したわけです。儒教の専門家でもないのにです。「中庸の徳」というのはギリシャ哲学にもあります。儒教思想の中でも重要な部分です。それを取り上げて発表した時に、最終日の総括の中で、特に私の部分を評価してもらったのです。

去年ドラッカーをやったのは、経営の問題でドラッガーの言っていることと孔子の言っていることにはかなり通じる面があるので、それを取り上げました。

泉　トヨタの石坂氏が中国へ進出していく時の話をしてくれました。中国人をマネージするのに日本人だと馬鹿にしていて相手にしないので、アメリカ人をマネージャーにしてやったらすっかり治まったという話と似た部分がありますね。

永池　それは、一つには日本側にも責任があると思うんですね。言うべきことを言わないでしょ。それだと思うんですね。

西井　そのことは、難しい問題ですよね。僕はたまたまエクソンという会社にいて、あるところの責任者に任命されたわけですよ。僕は日本人だし新任なので、「僕は新任者だし、よくわからん。前任者の方針もあるだろうから諸君らそれでやってくれ。それで分からんことがあったら、俺に言ってくれ」とね。そうしたら、上司のボスに怒られて「君、それはない。新任だとはいえ自分の方針をきちんと打ち出さなければならない」というわけです。これはエクソン石油の経理部長になった時の話ですが、「俺の方針はこれでやる」と言ったら、絶対ついてこない

と思うんです。だから、「しっかり言え」とは言うけれども、これは実に難しい問題ですよ。

我々は人口密度の高い社会ですから、あまり自己主張をしない方が世の中上手くわたれるんです。向こうは中国にしてもアメリカにしても荒野の中で一人でやるわけだから、言わなければならないのです。おっしゃることはわかりますが、そこをどうやってやればいいのか難しいところです。だから、僕もアメリカ人に対する顔と中国に対する顔と、みんな使い分けています。自分でも恥ずかしいと思いながらも、ここへ行く時はこの顔で、ここへ行く時はこの服装でと使い分けていますよ。

泉　やっぱり、それでやっていたんですね。僕も前にあるところで「二刀流」の話をしたんです。対外的には言葉も英語を使わなければならないわけですよね。だけどやっぱり日本に帰ってきた時には、日本流に日本語でやらなければならない。今はグローバルに仕事をしようとすると、二刀流どころではなくて、何刀流も使わなければならないというのが、実際なのかもしれませんね。

永池　海外でずっと仕事で成功しているからということで、その人を日本に呼びつけて仕事をさせると上手くいかず、結局また海外へ戻ってしまうということをよくお聞きします。

小野寺　中国が国家政策として孔子学院というのをたくさん作っているようですが、そのことについて何かお話をして頂けませんか。

永池　中国の儒教の孔子学院の問題はおっしゃるとおりですね。但し、信じているかどうかは別ですけれども、国家としての概念化を常にやっているんです。人間も概念化できている人間は非常に強いんです。概念化されていない人は弱いんです。日本の弱さは概念化されていないことだと思います。国家としての機軸をきちんと作りあげていないから。

明治の時に一度作られましたがそれが壊れて、脳死状態のまま戦後来ていますから、その底辺として文明論の問題があるのかなという見方を僕はしているのです。中国で失われた儒教の精神が日本では生きているんです。だけれどもそれはきちんとした発言として浸透しているかというと、していませんよね。その点で今日のこういう研究会は意味を持つのかなと思いました。

岩崎　目の前に外人が何人かいて果たしてそこで主張できるか、提言できるかということだと思うんです。最近行われたサミットでも日本の総理大臣があんな体たらくで、「これじゃ、大変だな」という気がします。日本の良さを世界に広めることは必要であり、それは日本だけの国益ではなく世界のためにもなるのだから大いにやるべきだとは思うんですが、具体的にできるのか、やる準備をしているのか、お金をかける意味があるのかということを考えると、非常に悲観的になってしまいます。

永池　昔できなかった議論が今はあちこちで出来るようになっています。その中で、皆同じ事に気付き出して、同じような目線、同じような方向で考えるようにはなっています。しかし、それらは一本一本バラバラで、それをまとめないと力になりませんから、ネットワークしていく必要があります。

今回、たまたま上手く乗せられて身の程知らずのテーマで話をさせて頂いたんですけれども、僕は明治維新とか討幕に至ったプロセスにもそうした小さいものが集まって、大きなうねりに

なっていったのではないかと思います。教育、家庭にも出ている。そのことにみなが気づき出しました。我々が考えていることが我々の目の黒いうちに実るかどうかは別にしても、もう少し日本の文化力を信じてもよいのではないかと思います。

泉　僕も先ほどから聞いていて思うのですが、世界に発信する前に日本に発信しなければいけないなと思います。時々あちこちで話をする機会がありますが、この頃は今までと反応が違いますね。想像もつかないような子殺し親殺しの犯罪が多いし、あまりにも凶悪な犯罪が多過ぎますよね。学校にしても、親は先生に任せ先生は親に任せるという具合ですからね。かつては会社がその間を埋めていましたが、会社も競争だけになってしまっていて、以前の共同意識がなくなってきたと言えますね。そうすると、「一体どこで社会的な人間を教育していくの」ということで教育する場がなくなってきています。

家庭を見ても昔は床の間というのがあったけれども、今は床の間に鎮座しているのがテレビで、机の上はパソコンでしょ。この二つで情報がバンバン入ってきて、親の言うことも先生の言うことも聞かないで、そっちの方に流れてしまう、一種の情報過剰社会だと思います。人間が人間として育たないということが一番問題だと思います。地球環境や資源問題もあるけれども、その基は人間が人間として育たない状況にあるということをあちこちで感じ始めていると思います。それを一番感じていらっしゃるのが永池さんだと思うのですが、その辺はどうですか。

西井　口をはさんで恐縮ですが、今の時代が最低だというのは、僕は違うと思うんです。江戸時代でいえば文化文政の時代ではないかと思うのです。僕は毎朝バナナを食べるのですが、子供の頃にバナナはお客さんしか食べられませんでした。お客さんが食べると、「あの客はけちだ」と思ったものです。僕は戦災で焼かれて親と生き別れし、六か月ぐらいどうにか生きていたわけです。それから中学の時もウサギを飼って自活していましたが、その辺のことはもう美しき思い出になってしまいました。そういう苦しい時代を我々は生きてきて、子供には絶対にそういう思いをさせたくないという一心で一生懸命にやったわけです。ところが、子供はそれを知らないから、孫をますます甘やかしてしまっています。それが危機だとおっしゃればそうだけれども、いかに日本が恵まれているか、軍事費も出さなくてもいい、食糧自給率が三〇％だと言ってもこれだけ物が食べられて豊かな国はないと思いますね。

泉　それはね、物の面とか便利さの面では最高ですよ。だけど精神面とかモラルとか先程のような家庭の問題がある中で本当に若者が夢を持って日々充実して生きていけるのかというと、そうではないと思うのです。だから二つに分けて考えなければならない。ある意味では最高の時代だし、ある意味では最低の時代だと、こういうふうに解釈しなければいけないんじゃないかと思うのですね。

永池　さっき言ったことととまた逆の言い方をするのですが、私がもし若者だったら最高の時代ですよね。なぜかというと、それは世界を相手に仕事が出来るからです。日本人に対する信頼感、日本に対する信頼感、経済力という国力をバックにしてアイディアと発想があれば色々やれますよ。

昔は「故郷に錦を飾る」という言葉があって、田舎から東京へ出てきて成功したら「故郷に

錦を飾る」というローカルな夢だったけれども、今は違いますよね。世界を相手にやれるわけですから。ところが、そういう本来の我々にとっては最高の状態が若者に実感されないような意識づけの国になっているという点で最低だというんですね。

小野寺　それとの関連でいいですか。渡部昇一さんが最近「道徳教育の教科書をつくる会」を始めましたね。江戸時代の石田梅岩の心学がコアです。誰もが同じ心を持っていて、その心を磨くのが人生の目的だというのです。良いものは何でもとって自分も心を磨きなさい、というわけですね。神道というベースがあり、キリスト教もよし、仏教もよし、何でもかんでもいいものは取り入れて磨こうというわけです。海外のビジネスでも石田梅岩の商人道というのは認められ、影響を与えています。

永池　そうですね。西洋ではマックスウェーバーが西洋の勤労観の背景にはプロテスタントあったということを言っていますけれども、日本の場合はそれが石田梅岩であったわけですね。マックスウェーバーを出したというのは、常に西洋との関わりで説いた方が聞いてもらえるんですね。ところが日本のことを日本の人物だけで語ろうとすると、聞いてもらえないという現実があるわけです。渡部さんの扱いはいいけれども、そこのところがどうかなと思います。

吹田　例えば仏教のことを知ろうとすると外国人の書いたものの方が分かり易いんですね。日本人の書いたものは、本当に三十分ぐらいで眠くなってしまいます。我々の思考回路が完全に西洋的なものに変わってしまったんでしょうね。それがいいのか悪いのかはわかりません。ただ、私はそれをいい方に転換しようと思っていて、学生の教科書としてマックスウェーバーを読ませる前に宣長を読ませたらどうかという提案をしています。発想自体を最初から変えていかないといけないと思っております。

それから、個人主義はもっとも典型的な例です。間違った個人主義についてですが、戦後家族主義を排したことと関係があると思いますが、「じゃあ、あの家族制度に戻るんですか」というと、その点はもう一度再検討する必要があります。そこをバーク流の保守主義との関わりでみると、長子相続制というのを絶対守れと言っています。ヨーロッパの正当な保守主義はそうですからね。そして、資産を分割してはいけない。資産、財産があることが社会を安定させるという考えですから、バークの保守主義などをうっかり持ち出すと利用される可能性があります。そういう立場をしっかりと確立した上でやらないといけないと思います。

当初、泉さんにこのアイディアを持ち出された時に、こうした内容は本来日本の学術会議がやることではないかと言ったことがあるんですね。色々な流れや目が出て来ていることは事実ですが、それをいい意味でインテグレートする統合する大きな知的指導者、知恵者が日本にはいないんですね。そこが日本の弱さだと思います。京都の国際日本文化センターが一時その役割を果たすかなと思って期待したのですが、思うような成果を出していないですね。やっぱり民間の我々がやっていく以外にないのでしょうかね。

永池　誤解がないように言っておかなければなりませんが、タイトルにある「日本文明」という言葉は、この場に合わせて作ったもので、私自身はこの「日本文明」を使うのは初めてなんです。僕はスコーレというのはもともとギリシャ語ですから、「新生命主義」ということでやっていまして、その出発点に神道というのがあると思うんですね。それは体系化されたものでは

なく、我々の感性に残っているだけですから、それをもっと西洋的な論理で武装しようというのが「新生命主義」の私のテーマです。

貪欲収奪文明から最適循環文明へ
―直観的提言

泉　三郎

一、アメリカングローバリゼーション・現代文明の伝播とその危機的状況

昆虫学者のファーブルの言葉に「人間は進歩に進歩を重ねた挙句の果てに、いつか文明と名付けられるものの行き過ぎのために、自滅して倒れてしまうのではなかろうか」とあります。核兵器の出現から始まり、最近は地球温暖化、環境破壊、異常気象と空恐ろしいことが続発しています。そして、科学技術の進歩はいよいよ生命体にまで及び、驚くべきバイオテクノロジーの出現となりました。クローン動物、遺伝子組み換え植物、万能細胞の発見など、その技術はいよいよ神の領域に入ってきました。

そこで問題はモラルです。道徳であり価値観です。最先端の技術を何のために使うかが問題だからです。それが金と権力に結びついてしまい、私益や貪欲のために優先利用されると大変なことになります。また、たとえ人間の福祉、幸福のために使われたとしても、全生物、動物、植物の生態系や地球環境に悪影響を及ぼすかも知れません。ファーブルは、虫の感覚でそうした事態を直感し、人間があまりにものさばり過ぎ、文明なるものが行き過ぎることを恐れたのではないかと思います。

また、アレクシス・カレルというフランスの哲人医家はこういいました。「人間はもう現代の進歩についていくことはできないし、文明が進めば進むほど人間が退化していくから、このへんで一度、文明が果たして人間を幸福にしているのか、それとも不幸にしているのか、はっきり解明する必要がある」と。

事実、この三〇〇年ばかりの間の文明の進歩は、目を見張るものがあります。蒸気機関や電信の発明に始まった近代文明は、その後すごいスピードで進歩を重ね、そのために人間の生活は驚くほど豊かになり、便利になりました。日本もそうした意味での近代化を達成し、その恩恵に浴するのですが、それを欧米諸国が費やしたてきた時間の半分で追いつく形になり、あちこちで相当の無理を重ねざるを得ませんでした。

夏目漱石はそうした事態を見てこう書きました。「日本は遅れて近代化を始めて、西洋の半分で同じことをしなければならないから、どうしても上滑りに滑って涙をのんで開化をしなければならない」と。

第二次大戦後はそこへ画期的なコンピューターが加わりました。蒸気機関と機械の発明は、いわば人間の腕力、脚力であり、肉体労働の代わりをしてくれましたが、コンピューターは人間の脳の働きを代行するものでした。さらには人間の感覚の代わりをするセンサーの発明もあり、文明はまた飛躍的に進歩することになりました。そして、ジェット機やテレビやインターネットの出現は、地球を一つの村のような存在にしてしまいました。つまりイギリスに始まった産業革命は欧米諸国に伝播し、新大陸のアメリカで大きく育ち、そのアメリカ文明が全世界を覆うようになったわけです。とりわけ、一九八九年のベルリンの壁崩壊以降は、

それまでもう一つの世界を形成した社会主義国へもアメリカ的自由主義、市場主義が怒涛のように流れ込みました。これが現代のグローバリゼイションの状況です。

こうして皮肉なことに、人間の足は自動車のお陰で退歩し、人間の頭はコンピューターのお陰でいよいよ計算能力を劣化させました。文明が進めば進むほど、カレルのいうように人間の精神と肉体はいろいろな面で退化してきているのかもしれません。

二、現代文明の原理とは何か

では、こうした西洋発の近代文明の原理とはいったい何でしょうか。それを象徴するキーワードに次のようなものがあります。合理主義、技術主義、利益主義、効率主義、資本主義、市場主義などです。そして、その根源にあるものは、人間の利欲であり、豊さと利便であるといえましょう。文明は総じていえば道具です。それを何のために使うかといえば、人間の利益、欲望の充足のためです。それがいよいよ貪欲になってきたのが、近代の特徴です。そのために、エネルギー資源をどんどん使用します。地下資源の石炭や石油をどんどん収奪していくことになります。これらは何万年もかけて蓄積されてきた地球の宝ですが、それがこの一〇〇年ほどの間に加速的に失われていくわけです。

狩猟農耕文明の時代にも、エネルギーとして木材を使い、緑の土地を砂漠化してしまったことはありました。しかし、基本的にはフロンティアがあり未開発の資源があり、再生可能な範囲で、ある循環システムの中でマネージする知恵が働いて、我々の文明は続いてきたのです。そこではまだサイクルが可能であり、毎年循環的に生産ができました。

ところが、この工業の時代、エネルギー資源は一方的な収奪です。牛馬の力を利用し、水車や風車で仕事をしていた時代には、再生循環が可能でした。しかし、化石燃料の場合には、資源は枯渇するばかりで、それに依存する限り持続可能ではないのです。しかも、この膨大な消費は、一方では膨大な廃棄物を生み、環境汚染に繋がり大問題になってきたのです。

それに加えて、最近とりわけ問題になってきたのがマネーの問題です。かつてイギリスが世界を支配していた時代には、マネーは金本位制の下でゴールドとリンクしていました。ある種の制約があり歯止めがついていたのです。ところがアメリカの主導する時代になり、とりわけニクソンショック以来、アメリカのドルは垂れ流し状態になってしまいました。その上、先物取引による投機マネーが参入し、信用取引が厖大化しました。さらには、細心の情報技術と結びついて金融工学を生み、またたくまに詐欺まがいの取引を全世界に蔓延させることになりました。

サブプライム問題はまさにその先端的な例でありましょう。返済能力のない人に無理やり金を貸して、高額の住宅を買わせるわけです。だから結果は見えていると思うのですが、そのようなことを信用第一といわれた金融機関までが堂々とやってしまったのです。それから、大きな問題は、巨額の投機資金が石油や食糧になだれ込んでいることです。石油は産業のコメであり、食糧は申すまでもなく人間存在の基本財です。それは空気や水のように公共財に近いものです。こうした基本財を投機の対象にすることは元来、罪であり、してはならないことでした。

それが大々的に大ぴらに行われているのが現代の世界の実態です。最近では金儲けのためなら「トウモロコシを油にしてしまえ」ということさえ出てきました。それは産業のために、人間や家畜の食料を奪うことを意味します。

こうした貪欲な拝金主義者のお陰で、一方に物凄い金持ちを生み、他方で膨大な貧困層を生んだのです。ここに猛烈な富の偏在が起きて、それが各種の犯罪、そして暴動、反乱、テロの温床になっているのです。こうした現代文明を動かす基本原理は何か、いきつくところ、それは貪欲な拝金主義、経済優先主義、欲望追求主義ということになりましょう。

三、日本における西洋的近代化の思想的水脈

では、この近代文明が始まったのはいつごろかというと、日本では幕末維新期から、以来一四〇年ばかりのことです。江戸時代の日本は農業を中心とした循環的な、ある意味でバランスのとれた社会でした。小さな島国で三〇〇〇万の人口をずっと養うことができました。しかも、幕末から明治初期に海外から来た欧米人がしきりに感心したように、日本人は平和で自足的な生活を享受していました。欧米人の目にはちょっと見ると、貧しいように見えたけれども、どこにも笑顔のたえない、何かそれなりに楽し気に満足している日本人の姿を見ています。そこには美しい自然に恵まれ、花鳥風月を楽しむ民がおりました。

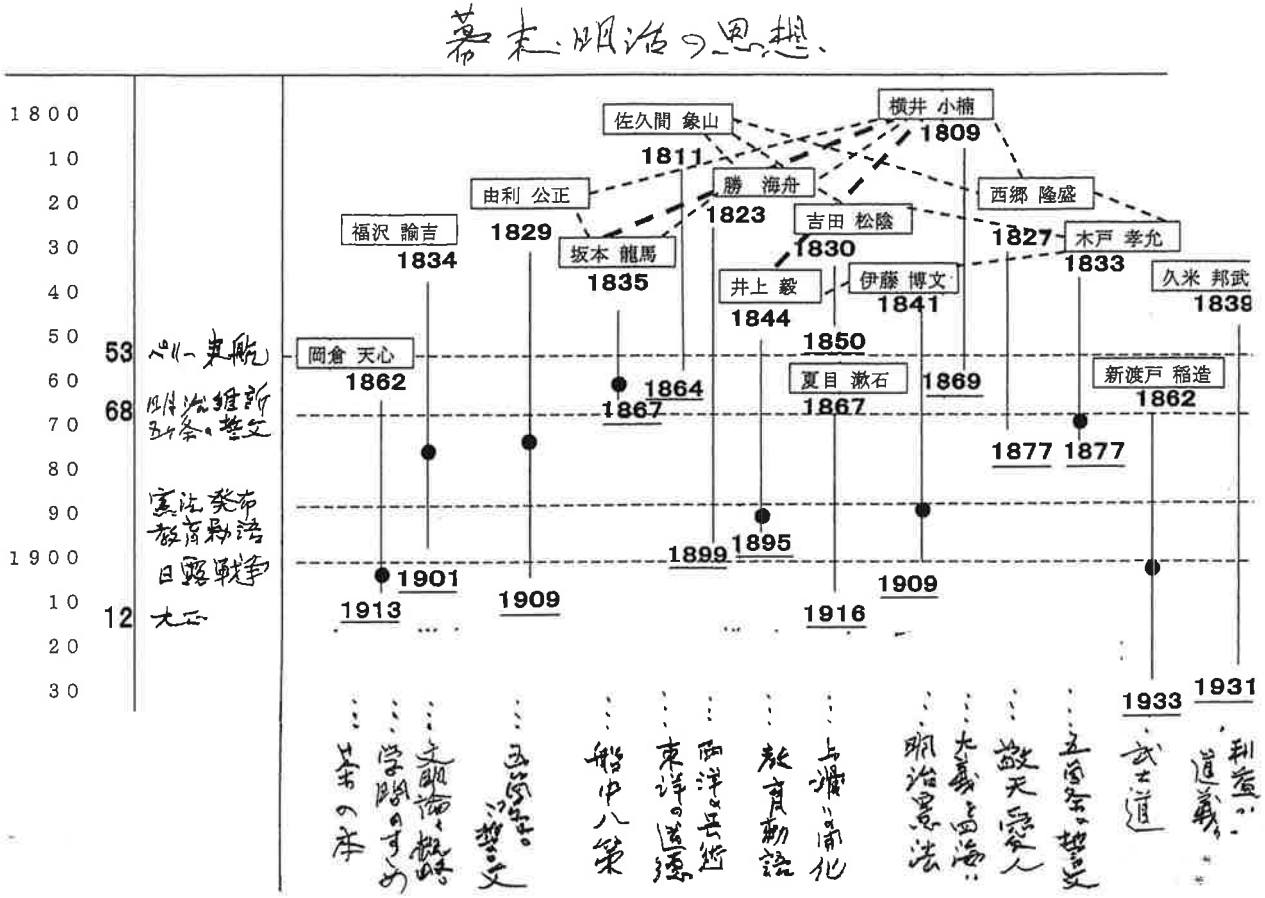
幕末の日本の先覚者は、西洋文明を見てこう感じました。西洋文明はすごい、科学や技術、法律などの学問はすごく進んでいる。こうした外面的な文明というものは取り入れなくてはならない。しかし、人間の内面にある文化的なもの、道徳や礼節、伝統文化や価値観はむしろ日本の方が優れている。だからこれは保守しなくてはならない、と。

そこで佐久間象山は、「東洋の道徳、西洋の芸術」と言いました。ここで芸術と言っているのは技術のことです。当時は技術と芸術というのが未分化で、逆に言えば技術の中に芸術も含まれていたと思います。象山は、東洋の道徳は西洋より進んでいて、西洋の技術は東洋よりはるかに進んでいる。ですから、これを両方、良いとこ取りで摂取しようとします。この考えが後の日本のスローガンになった「和魂洋才」へつながっていくのです。

それからもう一人の先覚者に横井小楠がいます。小楠はその著「国是三論」で、日本の進むべき道として三つのことを言いました。「富国」と「強兵」と「士道」です。士道というのは、武士道のことです。武をとって士道、つまりエリートのあるべき姿で政治や行政に携わるものは公のために働く人材、いいかえれば君子、つまり士道でなければならないということです。したがって、明治のキャッチフレーズともされる「富国強兵」や「殖産興業」という言葉は、このあたりから出ているのです。

この思想を現実に政治の場で取り上げ実現していった人達が、幕末では勝海舟、坂本竜馬であり、明治になってからは木戸孝允や大久保利通、大隈重信、井上馨、渋沢栄一らということになりましょう。それからその後の近代日本を考えると、最も重要な人物は伊藤博文です。明治日本の基本になったのがやはり「明治憲法」と「教育勅語」だと思います。これを作った中心人物は誰かといえば、伊藤博文であり、その懐刀は井上毅でした。その伊藤は吉田松陰の弟

子であり、松陰の先生は象山です。そして井上毅の師はまさしく横井小楠でした。つまり、ここにも象山と小楠の思想が生きているのです。しかし、象山も小楠もその先見性のために、明治の新政をみることもなく海外を見ることもなく暗殺されてしまいます。



それに対して幕末から維新にかけて世界を見て歩き、その目で欧米文明をつぶさに見聞し啓蒙の書を著した人物が二人います。福沢諭吉と久米邦武です。福沢は幕末にアメリカへ二度、ヨーロッパに一度旅をしています。久米は明治四年から六年にかけて岩倉使節団に随行して米欧十二ヵ国を回覧見聞しました。福沢はそれを基に「西洋事情」や「学問のすすめ」や「文明論之概略」を書き、久米は「米欧回覧実記」全五巻を著しました。

その久米はこう言っています。「西洋は利欲をとことん追求する。西洋の政治は利益保護を目

的とする、いわば『町人国家』である」と。サムライの心情からすると、西洋は商人国家でお金を一番大事にしている政治だと映ったのです。では日本はどうかというと、徳川日本は儒教国家ですから政治の理想は聖人政治です、中国の古代にあったという堯舜三代の政治を理想とする、いわゆる「徳治」です。つまり、利益が目的ではなく、重要なのは道義であるという考えです。利益は道義からすると、次元が低いのです。久米はどちらがいいとか悪いとか言わず、江戸時代の政治というのは金銭や商業を軽視してきた感があるとし、そうした反省をもとに、これからは西洋の学問や技術を摂取し、経済も重視していかなければという考えです。

それを明快に唱えたのは福沢諭吉です。福沢の場合には、「西洋文明を目的とすべし、利益を追求すべし」とはっきり言っています。慶應義塾を創って、学生たちには「町人になれ、商売をやれ、もっと利益を追求せよ」とさかんに鼓吹しました。福沢は後に拝金教の教祖と呼ばれてしまったぐらいですから、西洋文明に学ぶべきだと盛んに主張しました。しかし、実は福沢も江戸時代に教育を受け、儒教的な教養、道義観は完全に自分の体の中に入っていました。それが身についていたから福沢の場合は、いくら西洋化を説き利益を追求せよといってもバランスがとれていたと思います。江戸時代、武士はとくに金銭を軽んじていましたから、逆発想で「もっとお金を大事にしなさい」と、戦略的に主張したのだと思います。

それに引き替え、久米の場合は、政治家ではなく啓蒙家でもなく、地味な学者気質ですから、西洋と東洋を公平に比べて客観的に叙述しています。久米は後に歴史学者になりますが、そういう意味で、フェアに東西文明を比較考量しています。

それからずっと時代を下ると、岡倉天心、新渡戸稲造、夏目漱石が出てきます。天心は「茶の本」を書き、新渡戸は「武士道」を書き、漱石は「個人主義」について疑問を抱いて晩年には「則天去私」と言い、「天に則り、私を去る」という東洋的な思想に到達しています。つまり、象山の「東洋の道徳、西洋の芸術」、小楠の「儒教的倫理」「士道」が久米や福沢に流れ込み、さらには新渡戸や天心にも伏流して日本人の精神の根幹をなしていたのです。こうして第二次大戦の敗北までは、日本人は利便より道義を上位におく「和魂」を持ち続けたのだと思います。

ところが、太平洋戦争の徹底的な敗北とアメリカ軍の占領によって、日本人は虚脱状態に陥り、自国の歴史に自信を失ってしまいました。そして米国主導の「昭和憲法」と「教育基本法」を受け入れ、いわゆる「平和」と「民主主義」を国是とし、アメリカ的な個人主義やライフスタイルをモデルにしたのです。ただ、アメリカにはアメリカ特有の風土と歴史があり、その精神的支柱には自主独立とキリスト教がありました。しかし、日本に導入された個人主義にはその背景が欠落しており、自主独立の気風は移植されたとはいえません。徳川以来のお上依存の体質は官僚依存の形で温存されてしまい、「論語」に象徴される儒教的モラルは忘れ去られ、その結果、明治以来の「和魂」は風化して「無魂」に転じてしまったのです。そして拝金教と科学教とわがまま個人主義が、日本人の精神を支配することになったといえましょう。

四、文明とは何か、政治の目的とするものは何か

問題は、文明の目的とは何か、政治の目指すべきところは何かということです。ただ、ここ

で文明の定義を明確にしておく必要があります。最近の理解では文明と文化を対置して捉え、文明を外面的なもの、ハードな面、移転が容易で可能なものとし、文化を内面的なもの、ソフトな面、移転がなかなか難しいものという捉え方をしています。しかし、明治初年の福沢や久米は、文明を今日流の文明と文化の総体と捉えており、人為人工の総称として使っています。私もここでは広い意味の文明を意味したいと思います。

さて、福沢は「文明とは衣食を豊かにし、人品を高尚にすることなり」と言っています。「衣食を豊かにする」というのは物質の豊さです。経済的な発展、所得の向上、富裕化といってもいいでしょう。しかし文明はそれだけではない。もう一つ「人品を高尚にすること」だと言っています。また、福沢は「文明論之概略」の中で、文明は衆心発達の議論であるとし、文明は精神の発達であるとも言っています。つまり物心双方の発達、それも一部の人ではなく、広く国民一般つまり民度の向上こそが文明だという考えです。いくら衣食住ばかりが豊かになっても、肝心な人間が良くなければ仕方がない、倫理、道徳、人格の向上が伴わなくてはならないといっているのです。

一方、久米邦武は「米欧回覧実記」の中で、政治の目標とすべきことについて、次のようにいっています。

「政治ノ務ムルハ、国中ノ人民、ミナ生業ニ勉励シ、自主ヲ遂ケ、交際ニ礼アリ、信アリテ、百需ノ利ヲ開キ、外ハ国威ヲ屈セス、内ハ国安ヲ保シ、太平ノ境ニ進ムコソ務ムヘキ本領ナリ」と。

これは、政治の要締を極めて簡潔に表現していると思います。とくに「みな生業に勉励し、自主を遂げ」というのは、いい言葉だと思います。みな主体性を持って職業に勤しむということであり、国民一人一人が生き甲斐をもって生きられることを目指せということです。人々を、とくに若者たちを失業状態におくことは、政治としては下の下ということでありましょう。そして「百需の利」というのは、経済であらゆる需要に応じるということです。外交は国威を屈せずきちんと独立し、内に対しては国安、治安を守り、世界平和へ向かうということです。大事なことは、この二行にすべて入っています。

これを見ると、福沢や久米は明治の初めに「個人はどう生きるべきか」、「国はどうあるべきか、政治は何をしなければならないか」について、明快な答えを出していたことがわかります。

五、貪欲収奪文明から最適循環文明へ

さて、現代の文明の問題点は何でしょうか。

それはその原理、思想、価値観にあると思います。文明と文化に分ける用語法に従えば、文明は道具であると思います。文明の発達は道具の進歩であり、動力を伴ったものや頭脳の働きを持ったものさえ出現しました。これをどのように使いこなすかが人類の知恵です。目的を間違えれば、殺人道具にもなり、精神を麻痺させ、人間を野蛮化する道具にもなります。善用すれば人間に計り知れない利便をもたらし幸福にしてくれます。その善用・悪用の岐路は人間の

知恵にあり、行動を律する原理・原則、思想、価値観にあります。西洋文明の思想、とりわけアメリカ文明の思想は、「もっと豊かに、もっと便利に」という「モアモアの思想」です。フロンティアが広大で、パイオニア・スピリットの強いアメリカだからこそ、これまでは可能であった思想です。それは、欲望をとことん追求する思想であり、他者より自己を中心に行動する考えです。自然の摂理より人間の知性を重視し、キリスト教的一神教の考えから「我こそ正義なり」という傲慢な思想です。貪欲に強欲に生きていく思想です。

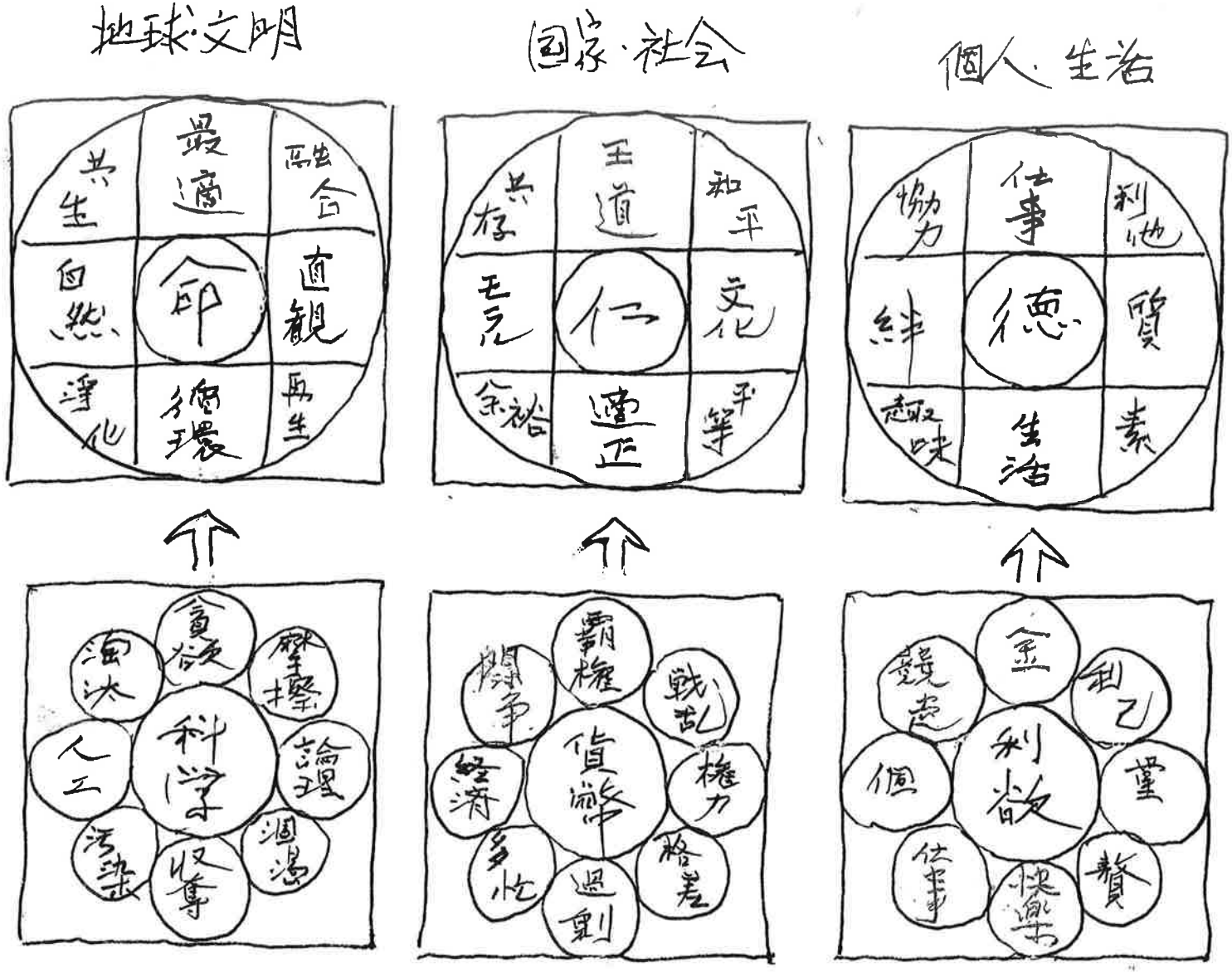
しかし、いまやその限界がはっきりしてきました。広大と思われたアメリカ大陸はむろん、地球そのものが限界に達しました。「宇宙船地球号」はこれ以上の資源収奪や環境破壊にたえきれなくなってきました。そして人間の欲望充足にも限界があり、「過ぎたるはなお及ばざるが如し」で、何事にも適量というものがある、「ほどほど」がいいのだと気づかざるを得ない状況になってきたといえます。栄養も過剰になればメタボ現象を起こして諸病の原因になることは、その身近な一例です。

そこでいよいよ日本の出番です。東西両文明のエキスを摂取した日本文明の出番です。その思想のコアにあるのは日本の思想です。日本には古来の神道があり、そのうえに仏教が習合し、さらには儒教を取り込んで、自然と人間を包含する三教混合ともいうべき日本独特の思想があります。それは多種多様な思想を和合し、ハーモナイズさせる日本固有の力です。それは生活哲学ともいうべきもので、一言でいえば最適の哲学、「ほどほど」の思想です。量でいえば「腹八分目」、「良い加減」の「適量」、質で言えば「適性」「ジャストフィット」、そしてタイミングでいえば「適時」「ジャストインタイム」ということになります。

今日の文明とくに日本社会は、利便も物も情報もすべて過剰です。その代りに精神やモラルが過少になっています。富の配分でいえば、日本はまだマイルドですが、グローバルにみて一部の金持ち階級には過剰であり、膨大な貧しい層には過少です。望ましいのは最適配分であり、適量であり、適性、適時であります。「知足」という言葉もありますが、ここでは敢えて「最適」を使っています。より具体的で明快だと思うからです。

そしてもう一つのキーワードが「循環」です。自然界はすべて曲線であり、円であり、サイクルしているといえます。人工的なものが直線であり、直線はいつか終りがあるのです。経済も産業も、サイクルできるのが望ましいのです。エネルギーも循環可能なもの、水力や風力、太陽光や波動に注目が集まっています。それは無尽蔵であり、その開発が期待されるところです。

「貪欲から最適へ」は、過剰・過少から「ほどほど」へ、お湯の加減でいえば「よい加減」です。「収奪から循環へ」は、森林でも魚貝でも伐り過ぎ獲り過ぎないことです。エネルギー資源も鉱物資源も取り過ぎずリサイクルをはかることです。



右の図「まんだら」をご覧ください。横軸に人間生活の面を、縦軸に理想と現実を描いてあります。それは、俗界と聖界に対応しています。下段のコアにある「利欲」「貨幣」「科学」、これが現代においては目的そのものになっていることを示しています。これらは本来、手段です。それを上段の本来の目的に置きかえることが肝要だと思うのです。つまり「徳」「仁」「命」です。この図はまだ不備な点がいろいろあるかと思いますが、個人、社会、地球という三つの側面に照らして、絵図化してみたものです。

私たちはある意味で素晴らしい時代に生きているのです。これまで先人が築いてきた豊かな文明の遺産を継承して、その恩恵にたっぷり与っているからです。この文明をうまく使いこなせば、人間は素晴らしい生活をエンジョイできるのです。より多く生産するより、より適正に配分することを優先し、文明の果実をさらに増やすより、今ある果実を十分に賞味することを考えるべきだと思います。過大な富の偏在を是正し、貧しくて食べるものにも困る層をなくしていき、それぞれの国家や地域の特性を認めて共生をはかる思想を持てば、自ずから平和が生まれ、安穏な日々が送れると期待されます。いずれにしろ、いま最も大事なことは、世界の行く末について明確な方向を示し、文明を主人の座から引き下ろして道具の位置に置き直すことではないでしょうか。そして東西文明の良いところを融合して、地球時代の新しい文明の壮大なビジョンを描くことではないでしょうか。

そして、それを「最適循環文明」と名づけてはどうかというのが私の提案です。

質疑応答

永池　西洋文明のルネッサンスというのは、「神からの人間の解放」でした。そしてその時点においては人間の理性に対する信仰に近い自信というか、信頼関係がありました。しかし現実の歴史は、人間の「欲望の解放」であったのです。日本が今直面している問題は、色々あると思うのですけれども、その「欲望の解放」という現代文明が突き当たっている矛盾そのものではないでしょうか。

日本は本来非常に優れた文明を持っています。縄文以来からの美的センスや宇宙観です。西洋文明というのは、神と人間と自然を峻別していますが、日本人の感性というのは、昔から神と人間と自然が繋がっている。常に人間は関係性の中で繋がっているという意識の中で生きてきたわけです。これは明らかに一神教の文明観とは違います。

私はその延長で、現代文明がもし人間中心の文明であるとすれば、これからの文明は、宇宙もしくは命（いのち）中心の文明にしなければいけないし、その解決はむしろ我々の文明の中にあると考えています。それはナショナリスティックな日本固有のということではなくて、かつてギリシャにもありましたし、キリスト教に征服される以前のヨーロッパにもあったことです。そういう面で、我々が戦後自信を失った日本文明が、実際には縄文、弥生、そしてその後中国から輸入された儒教、仏教等々一見雑多に見えながら融合し、揺らぎのなかにも育っていったのが、この島だと思うのです。ところが日本人自身がそれを知らない。その認識がない。それは決して古いものではなく、現代文明の矛盾を乗り越えるヒントになる思想だと思うのです。

泉　永池さんのお考えは、時間的にも空間的にもスケールの大きい、物差しの目盛が長いんですね。時間的には古代まで遡るし、空間的には地球を超えて宇宙的な見方をする。この点がすごく啓発されます。

吹田　まず、配られた二枚の参考資料の手書きの図は非常にユニークだと思います。それから永池氏がおっしゃったことなんですけれども、戦後日本は、敗戦をアングロサクソン文明（ア

メリカ文明）の受容として受け止めてしまったんですね。戦争というのは、力と力の対決で勝者と敗者があるというバトルの話であったわけですけれども、それをアメリカ文明の受容という形で受け止めてしまったんです。そこには、実に巧妙な戦後政策があったと思います。敗戦と文明受容とを峻別してこなかったので、泉さんがおっしゃったように、日本はアメリカ以上にアメリカであり、ヨーロッパ以上に近代になってしまったのではないでしょうか。

泉　あの頃のアメリカ文明は光輝いて見えましたからね。それに一時期のアメリカ文明はまだ良かった。だからコロリと参っちゃった、憧れの対象になってしまったということではないですか。

永池　そういう部分はあったと思うんです。けれども、それまでの欧米諸国からすれば、そういう軍事大国、何をしでかすか分からない国を再び立ち上がらせないようにしなくては、と考えたんです。その政策の上に日本人は乗っかっていたということではないですか。

泉　ローマとカルタゴみたいに。徹底的にやらなきゃということですかね。パールハーバーの奇襲や神風特攻隊を見ると、アメリカとしても恐怖心が強かったでしょうね。

吹田　徹底的にやられて分割までされてしまったドイツの例と比べると、例えば憲法をつくる時にも、ドイツ人は平和条約を結んだ後に、憲法は自分たちでつくっています。こう考えると、アメリカの方が実に巧妙な政策をやったのかもしれませんが、日本に何か弱さはなかったのでしょうかね。

永池　そう、不可解な国ということでね。非キリスト教国、これは仏像を崇めること、天皇という人間を神に崇めること、こんな野蛮な国はないということなのでしょう。

吹田　外国人が日本に来て驚くのは、一回の戦争でこんなに参ってしまった国はないということです。このことを踏まえて言いたいことは、これだけ西洋文明の波が押し寄せて来るのに対し、「いや、我々にはこういう道があるんだ」と言うためには、物凄いエネルギーが必要です。アンチテーゼをたて、現実的に実体化していくためには、どうしたらいいのかということです。江戸時代は国を閉ざすことによって、成熟した社会を作り上げてきましたが、今現在の二一世紀文明において、第二の鎖国ができるかといったら無理でしょうね。オープン・ソサエティー、開かれた文明社会の中でアンチテーゼの思想を打ち出し実体化していくにはどうしたらいいかという空前絶後の難題に日本は直面していると思います。そこのところを誰も明確に打ち出していないから、安倍首相が「美しい国」というような情緒的なあいまいな表現でごまかしてしまったのです。ここが明らかにされないから、バックボーンのない国になってしまっているのです。ここのところを頑張ってエスタブリッシュするにはどうしたらいいかということが重要だと思います。

泉　まことにおっしゃる通りです。誰がその空前の難題に真正面から真剣に取り組んでいくかですね。

藤原　先ほどの敗戦の時のお話の中で忘れてはいけないことがあると思うんです。その一つは、ソ連の世界的な戦略の中に日本は組み込まれていたということです。戦後、シベリアに六〇万人といわれる人達が強制的に連れて行かれて、六万人か七万人戻ってこなかった。しかも、帰

国した人のなかに数多くのブレインウォッシュされた人達がいたということです。

共産党の歴史をお読みになるとわかりますが、ソ連はとんでもないことをやっていたわけです。ソ連とアメリカとで何とか日本を自分たちの側に入れようとした策略が物凄くありました。それに気がつかない日本人が、ノーテンキだったんですね。進歩的であるマルキストと言い、彼らをインテリだと思っていたわけですよ。最近になってやっと、ソ連の実態が分かってきたから「なんだ、あんな国だったのか」というのですが。

泉　それについて思い起こすのは、アメリカとソ連の終戦時の対応のちがいです。私の長兄はフィリピンに、次兄は朝鮮にいました。長兄はアメリカ軍の捕虜になり、丸々と肥って帰国しました。次兄はソ連軍に抑留されて満州に連れて行かれ、強制労働させられました。ソ連に比べてアメリカがいかに寛大であったかの例ですが、日本人は進駐軍の振る舞いや映画や音楽を通じて入ってくるアメリカンライフの影響を強く受けて、アメリカ大好き人間になっちゃったんですね。

森本　しかし、ここまでくると認識も変わってきますよね。私はたまたま去年アメリカへ行き、ウォールマートや色々見まして、「何でここまで物は溢れ、売らなきゃいけないのか」と思いました。消費も何も至れりつくせりの経済で、毎日、大量の商品を生産し消費しないともたない経済になりきってしまっているのです。それでさらに、ＦＥＤＥＸなど速配するために飛行機を六〇〇機も飛ばしているんです。そこまでスピードがなければ競争に勝てない社会なってしまっていて、少しでも油断をすると、すぐ買収されてしまう訳です。なんでそこまでやるの？という感じです。

そこへきて、今回のサブプライム問題が起こったわけです。これでアメリカ自身も世界も経済システムがこのままでいいのかを考えざるをえなくなりましたね。そこへまたオバマさんが出てきて、これも非常にいいタイミングではないかと思います。これは正にアメリカが立ち止まって考える機会で、このチャンスを逃すと自壊の道を辿ってしまうのではないかと思うくらいです。

泉　同感ですね。現代文明の大パラドックスですね。まさに「モアモア文明」の矛盾です。オバマの登場には期待したいところです。

森本　それともう一つ思い出したのは、福沢諭吉ですけれど、配布された年表を見てみますと一九一〇年に亡くなっているのですね。福沢は、二〇世紀を迎えるにあたり慶応大学の学生を集めて何かイベントをやろうとした。その時に、模造紙に今の日本の悪いと思うことを学生に書き出させて、それを壁一面に貼り、鉄砲でその模造紙をぶち破って社会を変革しようとしました。因習や悪習をぶち破り、二〇世紀を迎えようとしたわけです。こういう話を聞いたことがあって、当時の福沢も「チェンジ」を志したのではないかなと思います。

多田　その「チェンジ」で思い出したのですが、二一世紀を迎える二〇〇一年一月一日の日付で、泉さんが「ちぇんじ」という政治小説を書いたんですね。それは私家版だったので、一部の人しか見ていないと思いますが、その時、私は直ぐ読んで物凄く感銘を受けたのを覚えているんです。その中に、今日発表されたようなことが確か書いてあったと思います。でも、読み

終えて感じたのは、そうかもしれないけれど、いかにも現実離れがしていて、「こんなことをいったって、どうやったらいいの」という疑問でした。

私はその時には零細企業を三〇年やっていた真っ只中なので、「欲望を抑えろ、足るを知れ」と言われても、社員に給料を払って競争に打ち勝って家賃を払っていくためにはやらざるを得ないんですよね。だから忙しさに紛れて忘れてしまいました。

あれから八年経ちますが、さんざん揉まれてきて、自分でも段々「これはおかしいのではないか」と思うようになり、仕事をするのもちっとも楽しくなくなり、それで去年の一〇月に全部仕事を辞めてしまいました。今私は、非常にシンプルなスローライフを楽しみながら、何かできないかということで、赤ちゃんのおもりをボランティアでするようになったんです。これが非常に楽しくて、おしっこかけられたり色々するのですが、あの赤ちゃんの顔を見ているだけで自分の魂が洗われるようで、とても幸せな気分になれるのです。

藤田　先ほどのコミンテルンやマルキストの話など本当に恐ろしいことです。少し勉強すればするほど戦後日本の教育問題をはじめ、あそこまで徹底的に洗脳されたのかと思うわけです。私はよく仕事柄、中国やインドに参りますが、インドでは非常に日本人を尊敬していまして、二〇〇五年だったと思いますが、「日露戦争に日本が勝ってくれたお陰で、カラードの我々が白に勝てることをあなた方は実証したのです。あれほどの強国を打ち破ってくれたが故に、ガンジーもネルーも必ず我々は英国から独立できるという確信を持った」と市井の人が平気で言うんですよね。日本人でここまで誇りを持っている人はいるのかな、という気がします。

渡辺　断片的なことしかお話できないのですが、私も今後の方向というのは泉さんのお話のようになるのではないかなと思います。せっかく日本も明治時代にあれだけの立派な方が一生懸命に国を作ってこられたわけですのに、キッシンジャーに「背骨のない国民」なんて言われるような国になってしまったことは非常に残念だと思います。周囲を見渡しても、人間の品が落ち、器量が非常に小さくなってしまっているのではないかと思います。

国もそうですが、企業、家庭の組織でももっと経営力を高めていかなければいけないと思います。それには、経営力のある人材を育成していくようにしていかないと駄目で、痛い目にあってもへこたれない、凄く調子がよくても慢心しない、そういう人づくりを考えていかないと、良い方向には進んでいかないように思います。もっと人づくりということを考えていただきたいと思います。

小松　泉先生が作られた図ですが、この「まんだら」は非常に分かり易く整理されていること、これまでの社会イメージを抜本的に変えるかのように、非常に画期的に感じました。これまでの社会のイメージを図で表すと大体ピラミッド型だと思います。頂点には社会のリーダーがいて、下部からの競争に勝った者のみが上部に上ることができるという競争と階層が当たり前のような社会構造であったのではないかと思います。ところがこの「まんだら」のように円として社会をイメージしてみると、リーダーは中心に位置し、人間が天分によって中心と周辺に棲み分けられることで、そこでは競争や階級といった構図でなくむしろ循環を意味するものに変わっていることに大変な驚きを感じています。とても素晴らしい図だと思いますし、本当にこ

うした社会に近づくよう努めなければなりません。

また提言とされている「美適循環」というキャッチコピーですが、西洋文明の良さである「利」と日本の良さである「美」と「ほどほどの」の精神とを織り交ぜたもので、非常に面白いと思いました。

納家　日本は、主張をあまりしないで揺らぎながらもここまできたと思います。それで結果的には立派な国になっていますから、このままで良いのではないかと思うのですが、どうなのでしょうか。アメリカなどは主義主張を繰り返していますけれども、それは争いを深めるだけで、主義主張のない国の方がかえって上手くいっているように思えるのです。

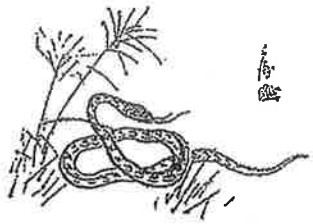
近藤　納家さんのお話と同じようなことを考えていたんですが、泉さんの「まんだら」の絵を見ても、優しく平和的で鋭い部分が何もありませんよね。これを国の方針として掲げていくことが望ましいのではないかと思います。

西洋医学と東洋医学の比較
―医薬品化研究・医学史からの提言

西井　易穂

一、西洋医学と東洋医学

西洋では蛇は医薬の象徴であり、ライオンは征服の象徴です。それに対して東洋の象徴は龍であり、それは夢を意味しています。そして東西両洋の医薬の考え方の根本には、こうした思想の違いがあるように思います。西洋には自然を征服しようという考えがありますが、東洋医学の思想には自然を征服するという考えはありません。そこが基本的な違いだと思います。



西洋思想

中国思想

同じことは東洋の「未病」という考えにも表れています。「未病」とはまだ発病していないけれどその兆候がある状態をいい、それを治療する、未然に発病を避ける、それが名医の条件とされています。ところが西洋では、発病してからが問題とされ、未病という考えはないのです。ですから西洋医学が主流の近代医学では病気になってから治療する訳で、その前の段階では治療されないのです。そして西洋医学では、悪いところを取る、悪いところを治すのが基本です。特に現代の主流の西洋医学ではまず検査をして異常値が出たら治療にかかる。東洋ではまだ病になっていない段階から、ちょっとした自覚症状や診察で異常をみとめると治療にかかる、養生をする。そうした違いがあります。

しかし、歴史をさかのぼると、西洋医学も東洋医学もあまり変わりはありません。西洋医学の祖といわれるヒポクラテスは「医者の仕事は自然治癒力に手を貸すこと」と言っていますし、中国では紀元前一～二世紀に医療については「黄帝内経」という書物が著され、薬物については「神農本草経」が出版されていて、やはり自然治癒力を重視しています。　その後、科学技術が進歩するにしたがい、西洋では病因の探索と追求・分析に目がいきました。解剖学に突破口を見いだし、外科手術に信じら

れないほどの成果を挙げました。続いてパスツール、コッホなどの努力により細菌学に基づく疫病の治療実績が上がるにつれ、不動の地位を占めることになりました。

一方、漢方医学は、全身の観察とむしろ哲学的な医療を追求しました。陰陽の思想から鍼灸治療が生まれ、気功や薬草による治療が行われました。薬品についても、ともに動植を起源として西洋では原因物資を徹底的に分析・精製して単一物質にして薬を開発しました。漢方では生薬をそのまま複合的に使うことで治療効果を上げました。

医学の父、ヒポクラテス

二、医薬認定基準の違い

私は長年にわたり創薬研究に携わり、ビタミンD(アルファロールという)の開発と薬品化に成功し、いま、透析、骨粗鬆症の医薬として、わが国で毎日百万人が使用しています。しかし、薬品の認定基準と考え方の違いから、国際的に受け入れられなかった時代があります。ここにも西洋と東洋の考え方の違いがあり、私はそれに敢然と戦いを挑み、実に十五年にわたり論戦をしてなんとか認めさせることができました。アルファロールの改良新薬として一九九一年に提案しました。ED-七は二〇〇八年末、国際的に通用するプロトミールで二重盲験が実施され、その有用性は確定しました。私は海外留学経験もなく英語もろくにしゃべれない状態でしたが、なにがなんでも戦わねばと下手な英語で国際会議へ出て懸命に戦いました。

その経験から申し上げるのですが、透析用の薬、オキサロールの場合も四面楚歌の中スラトポルスキーの支援を得て、その開発研究では辛い思いをしました。それは新薬の認定基準に西洋では「二重盲験」という方式をとることが必須です。西洋の関係者は、これを金科玉条のように思っているのです。これが私にいわせればおかしいのです。一見、科学的にみえますが、一方、これほど非倫理的な臨床試験はありません。私の専門領域である骨粗鬆症の世界では、有用性未確定の候補新薬を一〇〇〇例の患者に、そして偽の薬品を一〇〇〇例の患者に、それも五年間の臨床試験を経て、その結果でやっと判断する。

最新の科学的評価法で効果がはっきり出るものです。日本では、三〇例か五〇例で二年間で有効性が評価され、それでよしとされてきました。彼らは科学的方法を重視しすぎで、統計学に依存しすぎます。

日本の医薬は明治期になって、西洋の医療技術のめざましい進歩に眩惑され、すっかり西洋一辺倒になってしまいました。明治一六年に長与専齋による医制七六カ条がその転換点でした。長与は岩倉使節団に随行した一人で、日本の医療制度、医療教育、衛生制度を近代化した人物です。以来、東洋医学や漢方は片隅にやられて、漢方には医師免許も与えられない状況になりました。それが今日まで続いてきたのです。

三、部分と全体、平均的治療と個別的治療

東洋医学というのは、中国、インド、アラブの伝統医学を総称しての呼称です。それは基本的に自然治癒力を大事にします。ですから長期的です、そして身体全体を診る。ところが西洋医学は部分を診る、病巣だけを診る、短期的で緊急対応であり、科学的ということから過度に統計に依存しています。

西洋医学はある意味で素晴らしいのですが、ここに問題があります。部分的、短期的、平均的なのです。つまり、ゆっくりとした自然治癒力を軽視し、全体のつながり各臓器や気の働きを無視する傾向があります。そして統計や推計学で、治療が平均的になり、個別的なものにならない。個体はそれぞれ個性を持っているのに、それを無視して一律の治療をしてしまうのです。

「人を見ず、病を診る」といいますが、最近では、聴診器をあてず顔色もみず、計器や数値ばかりにこだわる医者が多いことはご承知の通りです。初めて来院した患者を診るのに、表情、雰囲気、歩く姿勢、目つきやしぐさの特徴など、患者の全体像をしっかり観察することから治療を始めるのを「望診」といいます。それから、「脈診」、「蝕診」に入ります。西洋医学でも、「視診」という考えがありますが、現実にはほとんど無視されているようです。

いま、遺伝子医療ということが言われ出しました。個人個人の遺伝子背景がわかってくると、それに併せて個別の医療が出来る可能性が大きくなってきます。これに期待する処は大ですが、しかしまだ緒についたばかりで、実際に適応されるのはだいぶん先でしょう、これからです。医薬品についても遺伝子判断でもっともふさわしい薬と量が決まる可能性があります。

四、気の威力、漢方的治療の力

中国では医療を前提として発達した気を操る技術に「気功」があります。

「気功でいう三要素は、調身、調心、調息」です。この三調に睡眠と飲食の節制が必要であると天台大師智＊(ちぎ)は説きました。実は私自身も気功を受けたことがあります。上顎と下顎が激しく振動し、自分の意志でそれを止めることは出来ませんでした。そしてある会合でその「気功」の効果を目の当たりにしてびっくりしたことがあります。日本医史学会で気功で有名な西野皓三氏が、会の理事長である酒井シズ先生を壁際までぶっ飛ばす光景を目撃したからです。恐るべきエネルギーでした。

西野氏は気の照射により骨、ガン細胞の分離、ミトコンドリアへの影響を実証し、その論文を国際誌に投稿しています。気や気功の効力を科学的に解明することが、物理学、生理学、医薬学の方面からいま始まっています。

中国では赤外線測定である程度の実証が得られ始めました。日本でも私と共同研究していた東北大学電通研の稲葉文男教授が、訓練された気功師から光量子が発射されることを実測しました。稲葉教授と私は「もし、光量子を発する機構が存在し、それを受け止める受容体が細胞組織中に奏効器が発見されれば、これが最速の生物情報伝達機構になるはずです」と興奮気味に話をしました。これが実現できれば、まさにノーベル賞ものですね。

さて、一般に東洋医学や漢方で問題になるのは、普遍性の欠如ということです。効く人には効く、

時には効くんですが、誰にでもいつでも効くということにはならない。実際薬草の調合なども、人によって違えなくてはいけない、その調合が難しいのです。中国でも文化大革命の時に漢方を大いに宣伝したのですが、普遍性がないということでしぼんじゃいました。華岡青州の場合もそうでしたね。ある場合には麻酔がかかるが、ある場合にはかからない、そこが困るところです。そういえば。薬草だって調合だって実に微妙なものです。ワインのソムリエのことを連想しますが、ワインの産地、何年ものであることが識別力をもっていないと鑑定できない、微妙にちがうんですね。漢方医としても超高度の技術が必要になるのでしょう。

五、サプリメントは立派な薬である

さて、最近話題のサプリメントですが、あれは立派な薬です。未開発地域に持っていけば、大変貴重がられます。実際によく効きますからね。日本ではサプリメントといって医薬扱いにはならないですが、例えば九州で脚気になった若者がいる、ラーメンばかり食べていたからですが、ビタミンB1を投与したらすぐ直っちゃった。ある共稼ぎ夫婦がおかしくなった、よく調べたら二重まぶたになっていてそれで紫外線が不足してくる病になってしまったのです。バーテンダー病というのもあり、昼間寝ている、陽に当たらないから、くる病になってしまいます。それらは、ビタミンDであっという間に治ってしまうのです。

ただ、サプリメントにも安定性に問題があります。時間が過ぎると劣化するケースがあります。二年したら、複合剤だから一緒に入れたのが化学変化を起こしてしまう。そういうことは野放しの状況だから、よく気をつけないといけません。

六、期待される西洋医学と東洋医学の融和

西洋医学と東洋医学はそれぞれに独自の良さを持っています。私は本来、両者は融合され、バランスのとれた医療が施行されるべきものと考えています。推計を背景にした平均的治療から、個別治療への発展が強く望まれる次第です。遺伝子診断技術の進歩によるテーラーメード医療、オーダーメイド医療が期待されます。そして最先端医学解明志向から脱却し、医の倫理を意識した患者優先の治療が望まれるところです。

私はあるところで、日本人の精神構造と欧米人の精神構造の違いについて私見を述べ、新薬創造のために提言したことがあります。基本的に日本人は自然と融和する精神構造であり、欧米人は自然を征服する精神構造から成り立っています。また、欧米の言語はすべてI(アイ)から始まる自己中心主義であるのに対して、日本語ではこのようなことはなく、「私」が表に出ないで、主語がしばしば省略されます。相手への思いやり、信頼が底流にあるのです。このような生活哲学が基本的に異なる上に社会構造も異なる中で、西洋型の契約に基づくインフォームド・コンセントが強要されている現実に大きな間違いがあると思います。そのため日本ではそうした先端的な科学や技術はあるにもかかわらず、独創的な新薬が生まれる可能性が極めて少なくなっています。これを打開するには、欧米風の法によるのではなく、日本の事情に適合した法改正が必要であろうと思います。すでに中国では中国独自の法整備の動きがあると伝えられております。日本はいつまでも欧米基準に追随しているのではなく、こうしたことについても果敢にイニシアティブをとるべきだと思います。

そして最後に医薬の倫理について、緒方洪庵の思想を伝える「扶氏医戒之略」を紹介したいと思います。

「医の世に生活するは人のためのみ、おのれがためにあらずということをその業の本旨とす。安逸を思わず、名利を顧みず、唯おのれをすてて人を救わんことを希うべし。人の生命を保全し、人の疾病を複治し、人の患苦を寛解するの外他事あるものにあらず。」

これは同時期、長崎にやってきて西洋医療を教え「自由診療」を行ったポンペの次の言葉とも通じるものがあります。医の倫理に東西両洋に差などないということです。

「医師にとって、ただ病人があるだけである。患者がどういう階級に属し、どれほどの富をもち、あるいは持たないか、ということは関係ない」。ということです。

質疑応答

納家　今は気功についてだれも分かっていないけれど、ガリレオの時代に地球が丸いのが分からなかったことやエジソンが考える前に電気というのが誰もわからなかったことが今では当たり前になっているように、気功の「気」は常識になるというのを本で読みまして、「こういうことは分かる人にやっていただかないと」と思っているのです。気功から出る色々なことはありますよね。

西井易穂　そう思います。それもとっかかりは、光量子です。こういう新しい学問がもっと進んでこないとわかりません。光量子を受け止める細胞がどうなのか、光量子を発するとどういう行動に繋がるかです。私も最近その現象を見たのですが、気をかけた時に受けた人は壁際まで吹っ飛びました。それはおそらく光量子が深く伝わるからで、そういう生物伝達機能というのは、今の学問の世界では誰も言っていません。稲葉先生がやっとそこの近くまで学問的に近づけてきたというだけで、実証されたわけではありません。でも二一世紀になって、そういう学問が進んでいますので、どんどん明らかになって、そのうち常識になると思います。ここには赤外線の問題も入っています。それとの連動など今では全くブラックボックスです。現象的には「気」はあれだけのエネルギーを発するわけですから、必ずそこには何かがあるはずです。

納家　西野先生のところに少し通っていましたので、気の心は分かります。あれだけ何もないところからエネルギーが出るわけですから不思議です。同じ反応は誰もしません、みな違うわけで、「気功の力は凄いな」と思いますし、実際に癌が治っていらっしゃる方もいるんですよね。

西井　西野先生の癌細胞のミトコンドリアに対する影響は、凄いことだと思います。

泉　今の話との関連ですけれども、気の力を科学的に測定しなければいけないという話で、それは日本が一番進んでいるんですか。例えば中国、インドはどういうことになっているんですか。インドにもヨーガをはじめ、いろいろなものがありますけれども。

西井　中国では随分研究をしております。赤外線の方が進んでいます。

泉　それは、国際的に交流をするようなところまでは、進んでいないのですか。

西井　一般に知られる程度にはなっていませんけれども、研究者同士では交流していると思います。それを組織化しないといけないですね。それには、「未病」がもっとも力を持つと思います。

泉　遺伝子の方はこれからということでしょうかね。

西井　そうです、これからです。今はデーターを集めている段階です。だからできるだけ多くの人が採血をやって欲しいですね。そうすると、今色々な解析方法があるので、色々なものを測定できますから。ほとんどのホルモンの遺伝子がわかっていると思います。採血データーさえあれば、その個人のデーターをコンピューターに入れて解析するのですが、そこの秘密保持の問題をどうするかというのは、別の大きな課題となっています。

西井正臣　医療のための遺伝子測定というのは、簡単なのでしょうか。ＢＭＶしようとするのは、簡単なのでしょうか。

西井　簡単です。例えば唾液で長距離マラソンの体質か、短距離マラソンの体質かなど簡単に決定できるようになっています。それは唾液の検査で一八〇〇〇円でやっています。

泉　遺伝子測定ができると、子供の時にこの子はどういうものに向いているかということもわかるんですか。一種の職業適性ですよね。

西井　わかります。だから個人の秘密事項の倫理規定をどうするかということを早くやらないと、かなりのところまで医学は進んでいます。

川上　私は遺伝子の調査に貢献をしている一人ですが、四年位前から神経性の菌が出ていまして、一応肺がんでないということがわかった段階で、主治医が遺伝子のデーターを集めたいのでと依頼されました。大変な経過を経なければいけないので、日本では患者さんもお医者さんも止めてしまうらしいですね。そこで私はその貢献者になっているのですが、今は病院に行って無料でそのための採血をしてくれます。

西井　ただ本人へのフィードバックがないのですね。超極秘の中で保管されていますが、まだ集積過程で何が言えるか分からないのですね。病気の場合は特にです。

川上　神経の菌に対する治療薬がまだ発見されていないらしくて、対策の治療薬を私に処方すると必ず副作用が出るものですから、治療としては何もしないで、三ヶ月おきに採血だけします。

西井　今の現実の世界で役に立っているかといったら、ほとんどゼロに近くで、先程ビタミンＤのデーターを出しましたが、それは最初のデーターだったんです。現在ではほとんどまだの領域が多いですけれども、骨の領域でしたらやってくれます。それぞれの専門領域で色々なケースがありますけれども、今はジェネラルではなく、一切アンダーグラウンドでやっています。しかし協力してくれる患者がいないとデーターの集積にならないのです。データーが集積されないと、なにが言えるかという結論が出てこないのです。骨の領域は一番早かったものですから、かなり成功しています。

泉　先程、薬の分野で一五年も論争していたとありましたが、日本と欧米の考え方、特に倫理の面での違いはありますか。

西井　全く違います。日本の場合は「和」の世界、「侘び」「さび」「融和」の考え方で、西洋は「攻め」の考えです。一つのデーターの分析の仕方、論争においても全然違います。特にアルファロールの研究の時に感じました。私たちは「安全性」を非常に重視しているのに対し、彼らはあまり「安全性」は考えません。局所の病気が治れば良いのです。全体を見ずに個を見て治療するのです。癌などは、癌の病巣を治すのは彼らは得意ですが、全体像としてどうなっているかということには、あまり意識がありません。手術の時も全体のバランスは考えません。したがって、何か事故が起きた時には弁護士同士の

闘いであって、医者の闘いではないのです。日本ではある程度、医者が責任を持ちます。本当は、医師との信頼関係こそがインフォームドコンセントなのです。

泉　レジュメにありますヘルシンキ宣言の内容をもう少し説明してもらえますか。

西井　私もここにある内容を理解する程度のことです。ここにある最後のところの臨床事典の注意事項が第一、第二、第三とありますが、色々な国で解釈されています。ヘルシンキ宣言が最初のスタートになって、今は各国で行っているのです。

藤田　医療についてお聞きしたいのですが、十数年前に若手の医師とめぐり合って、その医師は「未病」について私にこう言います。「あなたは生活習慣病について治しなさい。太りすぎ、酒などです。年に一、二回最低限の習慣病に対するテストは行います。後は日々の生活の中で自分で何かおかしいなと感じたら、それを正確に口に出して言いなさい」と。今日のお話を伺っていて「未病」ということには、こういう意識が必要なのかなと思いました。

西井　必要ですね。とくにがんセンターの話が出ましたけれども、非常に大きな日本の学問の流れの葛藤がありまして、免疫に対するバイオロジカル・レスポンスモディファイヤーという考えと、科学療法との闘いがあります。がんセンターと阪大、東大系の闘いがあります。これに対してはがんセンターをはじめとするアメリカ流の科学療法がとられているため、そこには日本ではバイオロジカル・ディスポンスモディファイヤーという療法がとられていて、これを早く解明しなければいけないと一行の前に挿入「アメリカ癌研究所報告の中に」追加文があります。これに相当するのは、丸山ワクチンと中外のピシバニールに繋がる新規融合体です。山村祐一はそれを一生懸命に製品化しようとしていたけれども、亡くなってしまったのです。その大立雄者が亡くなってしまったから、がんセンターの考えが日本で全面に打ち出されたんですね。それに対抗する考えが追い出されたのは良くわかります。それは、自己免疫に対する考えであって、東洋医学の精神に繋がっているものですね。

浜池　私は仕事の関係でインドの方とご一緒する機会があるのですが、「ドラッグ・ラグ」という言葉が言われ、日本とアメリカでは薬を作るのに時間がかかりすぎているとお聞きしたのですが、その点はモラルとの関係においてどのようなことなのでしょうか。

西井　どうしても日本の方が遅すぎます。厚生労働省の姿勢が後追い後追いで遅いです。日本は総て一〇〇点満点の審査の中でやっていきますから、一つのことに四、五年かかります。やっと最近、それを二、三年に縮める努力が始まっていますけれども、明らかに日本は遅いです。それとあまりにもくだらないことを言い過ぎるのです。ある目的のために最低限必要なことが揃えば審議にかけましょうという姿勢がなくて、全項目をクリアしないと審議にかけてくれない。その意味では海外の方が、極めて順応性が高いです。日本で新薬開発が不可能になったのは、インフォームドコンセントの問題で、基礎研究はできても臨床実験で、その証明するに足る患者数が集まらず、トップクラスの先生方でも不可能な状況です。海外の患者を使おうとすると、今度は「人種」差別問題が浮上してきます。だから、現在は海外企業と手を結んで、M&Aで進めています。

西井正臣　。明治のときに西洋医学が導入されて日本の医学水準は上がりましたね。ところが法律が新薬の創出については足かせになっています。しかしその時に、法律がなくてよいのかというと、そうもいきません。したがって法と医学の関係はどういう関係になるのでしょうか。

西井　難しい問題ですけれども、何処まで実証されたものを採用するかということです。いんちきをやることに関しては別個に対応せざるを得ません。法として規定していくのに、それぞれの専門学会が打ち出す最先端の評価基準をクリアにしていかないと、もっと初期の段階から新薬として政府が認め、但し条件と限界の提案がないといけないのです。ところが、こうしたことをやろうとすると一〇〇年二〇〇年戦争です。それを念頭に入れて、今日の提言は取り入れて行かないといけないのです。

小野　漢方でも西野先生のように効くところは物凄く効果的なわけですよね。今の西洋医学は人を見ずに、とにかくピンポイントで治療していくという方法です。検査ばかりで顔すら見ない感じです。一〇〇年二〇〇年もかけて論争をしていては我々はもう死んでいる訳ですから、それを早めるためには、今の医科大学の教養の中で東洋医学と西洋医学の両方を教えるということはないのですか。

西井　今、それを日本でもやっておりますが、外国に比べると特にドイツ等と比べると一〇年遅れです。ドイツなどはアクティブに取りあげていて、教育の問題を指摘しています。

小野　研究会ばかりを行っていても、一〇年経てば皆、医者になるわけですから実践で教育しないと駄目だと思います。

西井　日本でもそうした教育を行っていますが、遅れているのです。

日本美術からの世界への発信

塚田　晴可

一、美との出会い

父が日本画を扱う美術商でしたから、物心つくころから自然に美の世界になじんでいました。最初は洋画に興味をもって小学生のときに油絵の道具を買ってもらったことがあります。でもいつしか日本画に惹かれて画家を志し、父の関係で山本丘人、小倉遊亀、奥村土牛といった先生方との知遇を得たりもしました。その時は、不孫にも子供心に「将来日本の美術界を背負って立つぞ」という思いがありました。やがて村上華岳の絵に巡り会い、心酔しましたが、その才能に圧倒されてしまい、自らの画才に限界を感じたのです。しかしその後写真、建築へと興味が広がっていきましたが、どの分野にもすごい人がいて、とてもかなわないと思いました。写真では土門拳や木村伊兵衛、建築では吉田五十八や吉村順三などです。やっぱりこのレベルには届かないと感じて、それではとにかく世界の美術を見ようと旅に出ました。エジプト、ギリシャに始まり、ヨーロッパ、アメリカ、中近東・・・いろいろなものを見ました。

二、美の細分化と統合

それぞれの国・文化にいいものがあり、美には「境」なんかないんだと思いました。でも、そこで気づくんです。「どうしてこんなに細分化しちゃったんだろう」と。美術の世界でも、建築は建築、彫刻は彫刻、絵画は絵画で衣食住から離れてしまっています。けれども、本来はそういうものではありません。今よりも、古い古代の文化の方が何らかの共通項もあり、もっと生き生きとしていたというのを美術を通して感じたんですね。とくに中学生の頃に見て感動した日本の美がいかに素晴らしかったか。もう一度日本を見直そうと思い、帰国後、京都や奈良の寺社、美術を見て歩きました。そして日本がすごい国だということを改めて感じたのです。

というのは、エジプトやギリシャの美も素晴らしいけれど、いつからか途切れてしまっている、ところが日本は連綿と続いているのです。その背景には、日本の美は人々の暮らしと深く結び付いてきたことがあります。そんな国は他にイタリアくらいしかありません。縄文に始まり、平安、鎌倉、桃山、江戸、それぞれの時代にいいものがあり、美が続いていて、しかも生活の中から見出されている。これはすごいと思いました。

そこで、自分の立場として「もう一度原点に戻って、統合しよう」と、バラバラになったものを再度生活の中に生かそう」と強い思いに至りました。それから、ある高名な美術商に弟子入りして日本美術を学びました。修業中は白隠の書や魯山人の陶芸に出合い、美の真髄を吸収していきました。そこから、だんだんジャンルを広げて国や時代に関係なくさまざまな美を渉猟しました。そして、自分は作り手ではなく美しいものを扱うギャラリストになろうと思い、独立して自分のギャラリーを開店したのです。

現代についていえば、例えば素晴らしく美しいとても良い空間があるのに、それにそぐわないお軸があったり、彫刻があったり、お花があったり、本当にバラバラです。そこでオーケストラのように個々バラバラの音楽をみんながやっているのではなくて、やっぱりみんなが一つ

の和音で一＋一＋一というのが一〇〇人いても一〇〇ではなくて二〇〇になるような和音を作ってみたいなという思いがあります。幅広く、その分浅くはなると思いますけれども、一つのジャンルを超えて見てきたつもりです。

三、芸術とは

その中で思ったことは、単なる「モノ」と「芸術」といわれるものは、いったいどう違うのかということです。これは僕の場合、魯山人を三〇年間で三〇〇〇点位扱ってきましたので、それを例にお話します。魯山人という人はある一定以上の水準がありますけれども、じゃあ魯山人が作ったから全部芸術なのかといったら、そうではないんですね。やっぱり何十点点に一点位しか芸術といえるものはない。それは魯山人がどこまで作ったのかといえる部分とはあまり関係がなくて、職人さんが作っても芸術はあるし、魯山人が全部手がけても駄目なものは駄目ということです。ただ確率的には魯山人が手がけた部分が多ければ多いほど、いいものであり、芸術が生まれる可能性が高いということは言えますけれども。

僕がその中で考えたのは、ある一定以上の技術はもちろん必要ですけれども、その技術だけではどんなに技術が精緻で時間がかかっていても、芸術にはなりません。それプラスやっぱり魯山人の魂、質の良い魂のあるものが、時間と空間というふるいにかけられ芸術になるのです。つまり一定の技術水準以上の魂の質量、例えば魯山人がものに込めた魂の質量、これがある一定の技術水準を超えたときに、初めて芸術となるわけです。だから一点一点感性で計らないと、いくら知識で計っても、それは芸術とはいえないんですね。それは感性で計るしかない。その感性、すなわち五感を育てた上での第六感とか直感というもので計る以外には計れないのです。

四、神道の中の大自然

では、どうしたらそれを育てることができるか、という問題になってくるわけですが、日本人は自然観とか宗教観を交ぜて考えられる特性にあると思います。そこでは、まず大自然というのが絶対的存在であり、人間は大自然の中の一部の生物にすぎないという考えです。偶然にも人間は、少しどこかが他の生物より進んでいるということは否めないですが。僕は神道の良さはそこから始まっていると思います。だから、人間が特別な存在ではない。大自然の中の宇宙の中の一生物であって、大自然が正常であって初めて、我々も平和であり幸せになれるものと思います。でも、それだけではあまりにも抽象的で掴みにくいので、実際に仏教だったり、儒教だったり、「いかに生きるべきか」に対して具体的な知恵を提示しているわけです。その両方があって僕は完全な宗教だと思うんですね。したがって、日本人は宗教心がないというのは違うように思います。だからそれほど意識しなくても直感的に捉えることでこれまで良い方向に向かってきたのだと思います。

五、茶の湯との出会い

一方、ギャラリストとして美を追求する傍ら、美術倶楽部で茶道を習い始めましたが、まだ開眼するまでには至りませんでした。あるとき、林屋晴三先生に茶を点てて頂く機会があり、

茶の湯の真の魅力を知ったのです。林屋先生は宇治のお茶屋さんのお生まれで、茶の湯と陶磁器の世界の第一人者です。その林屋先生のお点前で一服、しかも名碗で頂きました。そのときのお姿、立ち居振る舞いに心が震え、茶の湯の師はこの方だと心に決めました。

今まで数多くの茶碗でお茶を飲んできましたが、本当にいい茶碗というのは何度飲んでもいい、その都度違う味わいがありますね。人間でもそうでしょう。本当に素晴らしい人に会うと、何回でも会いたくなる。茶碗でもそうです。値段が高い安いではなく、なにか魂が籠っている。たとえば、長次郎や光悦の茶碗でいただくと、これはもうしみじみ愛おしい。手にとってみないと、名碗の本当のよさはわかりません。

いいものは、大事にすれば一生どころか孫子の代まで使えますし、たとえ傷がついても金繕いすれば使えます。だから美術品というのは短期経済のソロバンではかるものではないのです。

六、利休のすごさ

お茶に接していると、やはり利休はすごいと思い至るんです。利休の何がすごいかというと、一つには、それまでの文化、美術をしっかり身につけた上で、革新を行ったということですね。

二つ目のすごさは、見立てです。それまで唐物中心（中国至上主義）だった茶の湯の道具に、和物（日本のもの）、見立てものを取り入れた。たとえば茶杓を竹でつくる、魚籠を花入れにする。そして長次郎という瓦職人を指導して、茶碗をつくらせた。ここに日本人の美における自由さがあります。

三つ目のすごさは、すべてを小さく、密度を濃くしたことです。茶室についても、一客一亭という考えから二畳の空間にまで凝縮し、量ではなく質に重きをおいたのです。長次郎の黒茶碗をみると、あの小さな碗のなかに宇宙がある。小さな茶室、茶碗の中に小宇宙をつくりあげることができたのですね。

四つ目は利休が人を育てたことです。長次郎も、茶杓師の甫竹もそう、そして多くの門人たち・・・細川三齋、古田織部、山上宗二はじめ利休七哲というくらい門人がいた、それが日本独特の文化である「茶の湯」を後世に伝え今日にまで及んでいるのです。

七、戦後の日本、短期的経済優先主義

ところが戦後、それまでの戦前のことが全部否定されてしまい、一度に短期的経済優先の論理に走ってしまった。それで、こんなに不思議な日本になってしまったのではないでしょうか。ここで、もう一回原点に回帰して、日本人の元来持っているそういう感性とか、思想を見直して行けば、自ずからいいものが生まれると思います。しかし残念ながら、今のところこの短期的経済優先の論理の方が上回っているから駄目ですけれども。芽はもう出てきていると思うんですね。例えばこういう研究会が開かれる事自体がそうですし、僕の周囲でもあちこちからこういう芽が出てきています。いろいろ垣根も取り払われてきました。音楽の分野においても、例えばクラシックとかジャズとかといった垣根が取り払われて、「良いものは良いんだ」と認めるようにもなりました。美術もそうです。ありとあらゆるところでそうなりつつあると思います。ただ、本流にはなっていませんよね。まだホントに芽が出て枝が少し出たばかりです。こ

れを本流にできるか否かが今後の鍵であり、問われていることでもあります。

こういう集まりがどんどん色々なところで出てくることが、大切ですね。それらが集まってだんだん大きな流れになって本流になっていかないと、おそらく地球は破滅します。それはもうギリギリの時間なのかもしれませんね。例えば温暖化の問題を一つ見てみても、かなり切迫してるわけです。それにもかかわらず、このことは直感がある人にしか計れていないと思います。科学も物理もありとあらゆる側面において、直感を使って見直し再生していかないと、取り返しのつかない状態になります。もしかすると、もう取り返しがつかないかもしれません。でも本気でやれば、何か良い方向へ行くはずです。

八、量から質へ、美しいものへ転換

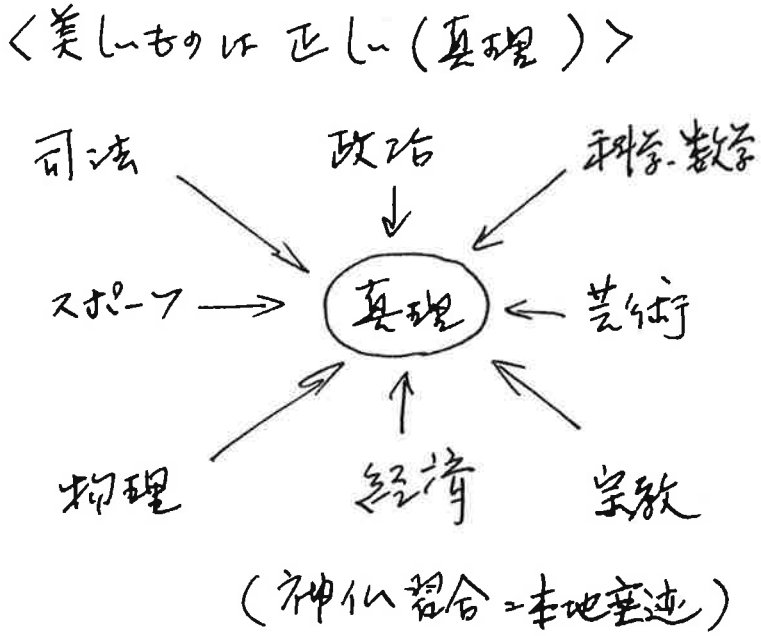
私もあちこち講演の機会がありますが、こういうことをお話させて頂くと、みんなそれぞれが「何かやりましょう」「目先できることからやりましょう」というという人が多いんですね。「ベストは出来ないかもしれないけれども、ベターなことをしていかないと駄目じゃないですか」と。

美術でも、一〇個つまらない物を持つよりは一個良いものを持って、それを大切に壊れても大事にしていくという精神が必要です。もう「量の時代ではなくて、質の時代」です。建築も大きい家に住むという時代ではなくて、小さくて質の高い家に住むことが必要です。全てにおいて「量より質」だと思います。これは日本人は得意なはずなんです。小さく小さくしていって高度なもの。それが物凄い得意なんですよ。それがもしかしたら、地球を作るキーワードになるかもしれないです。エネルギーも少なくて済むかもしれない。それでいて幸せでなくてはいけないわけです。

九、日本の美、そして世界への発信

さて、それでは日本の美の特色は何か、そのキーワードは何かといえば、私はこう思います。一つは自然を敬うことです。いうなれば神道ですよね。神道は、戦争の時に利用されたために誤解されや「すいですが。でも、本当は自然を畏敬することを旨とする、世界に普遍的な教えです。美の感性を養うには、自然の中にいることが一番です。山、渓流、木々、花鳥風月・・・その中に美を感じる、それが日本人の美意識の源泉です。

二つ目は仏教と神道の融合です、神仏習合ですね。もともと神道のご神体は、具体的な姿を持たず、三種の神器（勾玉、



剣、鏡）もしくは自然そのものでした。それが仏教伝来により仏像の影響を受け、神像が生まれたのです。特に、蔵王権現は、神仏習合の思想を体現したものです。ここにも、よいものがあれば取り入れる、日本人の美意識の柔軟さがあらわれています。

三つ目は平仮名の美、しなやかさの美です。漢字の強さに比べ、平仮名の優しさ、やわらかさは日本のオリジナルです。そこから源氏物語も、古今集も生まれました。そして、神仏習合と同じように漢字と仮名を併用したことも、日本のすごいところです。

四つ目は引き算の美学です。まず、量があってそこから引いていく、削ぎ落としていく美です。絵画でも書でも余白を大事にする。たとえば長谷川等伯の松林図は、余白が非常に生きていますね。美術以外でも、日本人はスケールを小さくしていくこと、小さくて高性能のものを作るのが得意ですね。

これからは、拡大発展の時代ではなく、限られた資源を大切に、各自が身の丈に合った生き方をしていかねばならない時代です。

それにはまず、自らの感性、直感力を養うことから始めなくてはならない。そのためには、やはり自然に学ぶことです。日本独自の神道的な美意識、自然界の至るところに神がおわしますという心を、全世界の人々と分かち合えれば、少しづつでも世界を変えることができるではないでしょうか。

質疑応答

藤原ヒロミ　日本の美を発信する場合に具体的に何からどうすべきですか。

塚田　いま、世界の興味は日本に向かっています。とくに日本の食の文化に注目しています。たとえばロシアでも寿司が物凄くはやっている、マクドナルドより店が多いと聞いています。日本の食は美味しい、ヘルシーだというので人気があるそうです。しかし、外国にあるのはまがいものが多いし、看板は日本料理でも韓国人や中国人がやっている。お粗末なのが少なくない。だからもっといいもの、本格的なものをこれから出していくべきです。　それから、日本に来る外国人をみていると、日本のことをとてもよく知っている人が増えてきています。料理のよさや食器のよさもわかってきています。だから、いま日本の食を文化として広げるチャンスだと思います。食からもっと発信してはどうでしょうか。

吹田　いまの日本の文化発信は、茶の湯にしても能にしても デイレッタントには興味が持たれるが、特殊な層に限定されていてそれ以上の広がりが期待できないのではないでしょうか。　その点、マンガやアニメは大衆的な影響力があるといわれますが、その点はどうなのでしょうか。

塚田　私も白土三平のファンだったしマンガもある程度理解できます。しかし最近の宮崎駿をはじめ、それほどの力があるものかという感じがします。方法としては、もっと内容のあるもの、本格的なものを伝えてきたいです。先頃の洞爺湖サミットでお茶を披露しましたが、あんなお粗末なやり方ではやらない方がいいとし、とてもがっかりしました。どうせなら本物を伝えたい、それには時間もかかるし手間もかかります。しかし、いいもの、本物はそうイージーには簡便にはいかないのです。

藤原　それに関連して平仮名の美しさのことですが、意味もわからないのにそれが果たして伝わるかどうか疑問があるのですが、その辺はどうですか。

塚田　それは絵として見るのがいいと思います。最初は字の意味にあまりこだわらないでいいのではないでしょうか。日本人も西洋のものを意味がわからなくてもかっこいいと思うことがあるでしょう。理屈でなくて、感性に訴える、そこが美の特徴です。発しているオーラを感じてもらうことが大切です。

　さらにいえば、本当にナショナルなものは、実はインターナショナルなんじゃないですか。それ故、かつての外交官は文武両道であったし、美術もわかり、文学も論じ、スポーツもやりました。しかし、今の人は政治家、外交官、官僚、リーダーの層にそうした素養がない人が多いです。感性がない、文化力がない、それが問題だと思います。

泉　美術は感性に訴えるだけに言語の障害を乗り越えていく利点がありますね。その意味で、映画、音楽、芝居、スポーツなどの有効性があると思うのですが如何でしょう。

塚田　そうです、たとえばスポーツですが、イチローなど、松井もそうですが、自らの身体で表現して発信しています。音楽、絵画、映像、ファッション、それぞれの分野でありとあらゆるジャンルで、日本人が自ら表現していくことに大いなる効果があると思います。

吹田　パリで日本画展があった時に、梅原龍三郎、富岡鉄齋、狩野芳崖らが出品されました。そこで人気の高かったのは、芳崖、鉄齋で、梅原は全然評価されていなかった。やはり、あちらの人の眼ではそうした評価なのでしょうかね。

塚田　そうですね、そのとき梅原の何を展示されていたのかわかりませんが、「北京秋天」ですとまた評価が違っていたかも知れません。しかし梅原の絵は概してヨーロッパの人にはルノアールの匂いがするようです。なんか亜流とみられてしまう。その点、鉄齋にしても芳崖にしても、日本のあるいは東洋のという意味で分かりやすいです。またエキゾチックに憧れる気持ちもあります。たとえば熊谷守一などを持っていくとよかったかもしれませんね。あとは香月泰男とかね。もっとも鉄齋にしても、いいものとよくないものがあります。鉄齋のすごいのは八十五過ぎてからがいいところです。有名な画家でも全部がいいわけじゃありません。いいものはそんなにないのが普通です。それは人によってですが、ミドル時代のものがいい人もいるし、晩年のものがいい人もいる。やはりその人が一番、妥協を許さずに一生懸命やっていた時代のもの、そこには魂があります、訴えかけるものがあります。

　やっぱり神様は失敗は許してくれるけれど、おごったり、手を抜いたりするともう助けないんですね。売ることを考える、金にすることを考える、そうするとたんに駄目になります。それは「悪魔のささやき」ですね、あくまでも描きたいものを描く、それが徹底してこないと力が失われてしまいます。私はそうした例をいやというほど見ています。

吹田　欧州では、国家戦略として、外交官に遊び人を配しています。遊び人というと語弊がありますが、要するに文化人ですね。フランスの大使、クローデルなんかそうですね。軍事戦略や経済戦略と並んで文化戦略が必要でしょう。おおげさにいえば文化力をもつ政治家、外交官が国の生き死に関わることだってあります。

塚田　昔はそういう人が日本にもいたんですね。真の意味でのエリートがね。外国のこともわ

かっていたし、むろん日本のこともわかっている、スポーツもできるし芸術も理解している、そういう一流の人物がいました。そういう人物が政治家、とくに外交官にはいたんでしょうね。それが最近は勉強ばかりしていて、知識ばかりで感性がない、遊びも知らない、文化的素養もない、外交官試験を受けてそれで満足しているようなのが多いです。発信するといっても結局その人自身の人間力、文化力に依りますからね。

泉　外国の人と接していて、美について語る時に日本人の語り方、つまり我々はどうしても抽象的で感性な部分が多いわけですが、美でさえ向こうの人は論理的に語りますか。

塚田　その傾向はあります。しかし、「本当の目利きだな」と思う人達には、恐るべき共通項があります。そこでは、言葉はいりません。これは自分の経験ですけれども、僕は三年前に家内を亡くしました。そうしたら知り合いのベルギーの学者が、それを聞いて『パラオの唇』という図録を送ってきてくれました。それは、世界中のエジプトの名品の唇だけをとったものなんですね。これは、本当に僕が写真家だったら絶対にやりたかった仕事ですね。それが目の前に出てきてしまったのです。僕に対する慰めなんでしょうね。写真も見事でしたが、グラフィックのレイアウトに余白が豊富にあって、その余白の美までもが、計算されているのです。そんなに長い時間一緒にいたわけでもないのに、お互いに自信のあるものを見せ合ったりする中で、それが琴線に触れ共感するんですね。

お茶はそういう世界です。自分が掛けた軸を気に入って下さる人に出会えた時には、「一生の友」という感じでしょうね。だから、音楽とか美術とかの「美」というのは、完全に時空を超えられると思っています。

泉　それからもう一つ。ご著書『美神の邂逅』の中に「崇高な微笑」というページがありますね。これは仏教がガンダーラに移って、そこで彫刻ができた末の姿ですよね。そこに西洋と東洋との合体が見られ、とくに写真のこのスマイルが物凄く東洋的なんですね。これが東西統合のスタイルで、こういう方向で進むことが大切だと思うのですが、これについても少し説明してください。

塚田　アレクサンダーが東方に遠征して来た時に、軍隊がたじろいで、アフガニスタン、パキスタンのガンダーラ地方に長い間滞在していたんですね。その間、地元の人と結構交流が深くなり、中には、結婚してしまう人も多かったらしいです。それまで、仏教の姿は何もなかったんですけれども、ギリシャ文明の影響によって仏像が出てきたんですね。だから、最初は非常にギリシャ的です。ところがギリシャの持っている元々の良さと東洋の良さが、実によい交ざり方をして、何とも清らかで美しいものができたのです。それが、この像です。

これは本当に世界を救うキーワードになるかもしれないです。決して二律背反なものではなくて、溶け合えるものだと思います。その仏教があっという間に、中国、朝鮮を経て日本に入ってきたわけです。それも日本においては、神道と決して二律背反なものではなかったと思います。

聖徳太子が仏教を入れた時期というのは、かなり神道が腐敗していて、神官になれば租税は免れるとか、神官を利用した悪い奴らが起こるという事態にありました。困った聖徳太子は、新たに仏教を入れることで、神官もかなり刺激されるし、お互いが上手くいけば良いというこ

とを考えたわけですね。それが実際に平安時代になって、車の両輪のようになって、仏教と神道というのではなく、両者が融合した新しい宗教を生み出したわけですね。大自然観と人間の知恵が融合して、新しいものを生み出したんですね。これをみると、ギリシャの流れがあっという間に日本に伝わってきたわけです。したがって、東西の融合というものは、我々が考えているものよりも、もっと素晴らしいものでした。

それが、正倉院です。ルーブル、メトロポリタン、大英博物館と色々ありますが、正倉院ほど質の高い美術館というものは世界中見てもないわけです。海外の多くのものは、お金で買ったか略奪品ですよね。しかし、正倉院は貢物であったり、聖武天皇、光明皇后のお集めになったものですから、実に正当な美術館だと思います。それも校倉造の木造です。一〇〇〇年以上の時を経て見事に存在しているわけですよね。それの管理能力、整理能力は実に見事なものです。時の信長や秀吉など独裁者だと思われている人でさえ、あそこには手もつけなかったわけです。比叡山は腐敗していたから、信長は焼き討ちしたかもしれないけれど、正倉院に関しては、やはり違ったわけですよね。だから、信長も秀吉もひどい理不尽な独裁者ではなかったわけです。これは素晴らしいことです。

小松　今日の配布資料の図を見ますと、あらゆる分野が「真理」に向かっていて「美」となっていますが、これはどういうことを意味しているのですか。

塚田　僕は空海の言葉の中で非常に好きな言葉があり、彼は「美しいことは正しい」と言っているんです。でも、それでは「美しいことは何なの」という話になってしまう訳ですけれども、それが凄い真理だと思うんです。例えば、ある風景を見た時に、つまらない建築があるのと、美しい建築があるのとでは、全く違うわけですよ。ヨーロッパで〝素晴らしいな〟と思うのは、残すべきものと変えるべきものとの区別が明確にできているし、これが実は最終的には観光立国としても日本を救う訳ですよね。

今までは本当に短期的経済優先の論理で、安っぽい建物が多く、出来たときには一番美しいけれども、使えば段々汚くなっていきます。昔の日本の建物というのは、出来たときよりも使っていけば、どんどん美しくなるような建物だったわけです。全てのことが中長期的だったのに、今は本当に短期的なことになってしまいました。経済の論理からみても、中長期的にみて正しいことは真理だと思うんですよ。目先の快楽に捕らわれないで、長期的に自分・息子・孫といったみんなが美しく楽しく幸せに本当に心を充実して生きていけるような論理というのは、絶対に成り立つと思うんですね。「経済」と「美」というのは、二律背反のものではなくて、絶対に一致していますよ。日本には、そういう時代があったのですから、それをもう一度探っていけば必ず、正解は出てくると思いますね。

トヨタウエイを世界に
―ダイアレクチック・アプローチ

石坂　芳男

一、はじめに

学校を出てから四五年間、トヨタの販売部門にいて、とくに海外部門を担当してきました。そんなことで、トヨタの生産方式については幾多の本が出ておりますが、販売方式についての本がなかったので私に書けということになり、一介のセールスマンとして泥臭くやってきたことをまとめたのがこの本「トヨタの販売方式」（あさ出版）です。私としては、自動車のような、どちらかといえばピークを過ぎた産業の話が参考なるかどうか疑わしいと思いましたが、私の経験や先輩が培われたことなどをお話させて頂ければと思います。

いまや世界はまさにグローバリゼイションの時代ですが、これまでの物・金・人が移動するというより、いよいよ情報が移動する時代になってきました。見えるものより、見えざるものが世界中をめぐる、たとえばグーグル・ワールドのような世界が展開してきた訳ですね、そんな時代に世界へ日本が発信することがあるとすれば、トヨタの経験が多少とも参考になれば幸いです。

二、トヨタウエイを世界へ

トヨタウエイというのは、ご承知の通りまず生産方式から生まれました。その特徴は、ジャストインタイム、自働化の思想、必要なものを、必要な時に、無理、無駄、むらなく供給する、そうした考えですね。それだと在庫を持たないで済む、その方式を体系的にまとめたものがトヨタ生産方式つまりトヨタウエイです。

これが世界的に認められたのはマサチューセッツ工科大学の教授が本を書いたお陰で、フォードが始めたマスプロダクション方式をさらに改良して独特のリーン・プロダクションにまで高めたのがトヨタだという訳です。日本は資源のない国ですから、付加価値の高いものをつくっていかなくてはいけない、そこでトヨタが懸命に考え編み出したのが、無駄のない効率的な、しかも品質の良い車をつくるプロダクションシステムです。それを教授は「リーンプロダクション」と名付けたのです。

これが世界に発信されて、いまや製造業だけでなく、いろいろの業種にも採用されています。たとえば、郵便システム、集配、仕分け、郵便の流れをジャストインタイムでやる、日本郵政にも適用され、また、アメリカの銀行システム、あちらでは小切手がサイン方式でしたが、それにも採用されて効率を発揮しているのです。

ところが、トヨタは元来ローカルな会社で生産も国内だけでしたから、それを世界に発信する必要もなかったのですね。しかし、諸般の情勢からご承知のように外国で生産することになりました。となると外国人にもその生産方式を伝え協力してもらわなくてはならない、それでその方式を文書化しマニュアル化しなくてはならなくなった。言い換えれば、それま

では「暗黙知」だった訳で、ちゃんと書いたものもなかったんですね。それでこれをまとめて「トヨタウエイ二〇〇一」というものに集約しました。「暗黙知」がやっと明文化されたのです。いまやトヨタの工場は世界に五〇カ所以上あって、従業員も二一万六〇〇〇人に達しています。それに正しく伝達していかないと品質のいい製品が効率よくできない、そこで張富士夫が社長時代の二〇〇一年にまとめた、それが「トヨタウエイ」です。

それには二本の柱があります。一つは知恵つまり改善です。これは「カイゼン」とカタカナで世界語になりました。より具体的には 現地主義、現物主義、チャレンジ、挑戦 です。そのため常にカイゼンして絶えず変化している、生産性をあげるために、品質をよくするために日々「カイゼン」です。それから もう一つは、人間性の尊重、相互信頼、チームワークです。個人主義が目立つ西洋に対してこのあたりが日本的な点でしょうか。これらは名古屋にある親工場で練り上げたものを世界中の工場に発信・展開させたものです。その意味で日本発の世界への発信の具体例になりましょうか。

三、トヨタの販売方式

さて、生産方式のトヨタウエイはそうした形で海外に発信されましたが、販売方式についてはなお暗黙知でした。しかし、海外各国に車を売っていくにはそれなりの知恵を集め努力をしてきたんです。しかし、国内販売が主で輸出がそう多くない時はそれで済んでいたのですが、海外でも大量に生産し売っていかなくてはならない、とくにレクサスのような高級車を新たに販売しなくてはならなくなった。そこで販売方式についてもマニュアルをつくる、意思統一をし、伝達していく必要が生まれた訳です。

それで長年販売をやってきた私のところにその役割がまわってきたのです。そこで私が副社長の時代、中心になってトヨタのセールス・アンド・マーケッティングなるものをつくりました。ここにありますが英語で書かれた「シルバー・ブックス」というもので、ここにトヨタの販売方式が集約的に表現されています。

ここでの特色は生産方式とは全然違う点にあります。それは日本発というのではなく、「世界発の世界返り」ということです。販売先は世界の一七〇カ国を超える国々です。そこは風土や地勢、人種言語、風俗や習慣が全部違うのです。ですからローカルに考えなくてはいけません。日本の方式をそのまま押しつけることはできない。その土地に合わせ考えなくてはいけない、つまりグローカルなんです。

昨年あたりの数字でみると、車の販売は八割が海外、二割が国内です。だから日本流は押しつけられないのです。たとえば、一番の顧客であるアメリカではむろん日本式は通用しません。日本は本来訪問販売方式です。でも、欧米諸国はみんなショウルーム方式をとっている。その他の発展途上国でもアメリカ式が多い。お客様は店頭に来てもらう、そこからセールスが始まる。店頭に客を連れてくる責任は店主にある、そういう方式です。

だから日本発ではなく世界の各地発のものを世界へ返すという発想になります。

シルバーブックに整理したトヨタウエイのキーワードには「ハーモニーの三C」がありま

す。コミュニケイションとコンシダレイションとコーオペレイションの３Ｃです。意思疎通、思いやり、協力ということになりましょうか。現地の状況を考えて、それにあわせて行動する、ここが一番違うところです。

四、レクサスとプリウスの挑戦

トヨタは原則的にプロセス志向の会社です。

それにも三つのＣがあります。コンスタント、コンシスタント、コンテイニュアス　このスリーＣを大事にしています。しかし、それだけでは駄目なので、「連続の中での非連続」ということがある。大きな時代の変化、パラダイムの変化が起きたときには、思い切ったチャレンジ、冒険が必要になる、それが連続性の中の非連続です。トヨタの場合、レクサスやプリウスがそれを象徴しています。

レクサスは、それまで大衆車のメーカーだったトヨタが高級車をつくろうとした挑戦です。私はレクサス誕生にずっと関わってきましたので、その過程をよく承知していますが、まず最初に、トップの大きなリスクのある大胆な決断がありました。パラダイムが変わるときに大胆な決断が出来るかどうかが企業の命運を左右しますね。それまでトヨタはずっと大衆車でやってきました。アメリカ市場でもカローラとかハイラックスとか、高くてもせいぜいクレシーダ程度を売っていたのが、本当の高級車、キャデラックやメルセデスに匹敵するものをつくろうということです。これには時代の背景もありました。日本の国力が高まって、エズラ・ヴォーゲルが例の「ジャパン・アズ・ナンバーワン」を書いて騒がれた頃です。トヨタの技術者にも最高級車をつくりたいという気持ちが高まっていました。そういうマグマが社内にわき上がってきていた。そうした気運を読んで決断をしたのが豊田英二会長でした。これは大変な決断です、非常に勇気のいる、社運を賭けての大決断でした。

しかもレクサスは最初からアメリカをターゲットにしています。そのマーケットで成功できるかどうか背水の陣で臨んだのです。技術者はむろんですが、販売部門も必死でした。まず名前を変えないといけないということで、レクサスブランドを立ち上げました。レクサスはドイツ語の「ＬＵＸＵＳ贅沢、一流」からの造語です。フォルクスワーゲンがアウデイを作る時は別会社にしました。バックオフィスまで別にしました。が、トヨタはブランドだけ変えて会社内につくりました。さて販売方式をどうするかが大きな問題でした。当時トヨタの販売店は全米に一二〇〇店ありました。が、レクサスはそれに頼らず別の販売ルートをつくりました。アメリカには高級所得者の分布があって、それに合わせて二〇〇店をレクサスのためのデイーラーに指定しました。でも七割までがトヨタの系列でした。そしてあとの三割がこれまでのラクジュアリーメーカーのデイーラー、つまりキャデラックやベンツを扱っている店でした。そこで鮮烈なデビューをはかったのです。結果的にレクサスは大成功でした。

プリウスも挑戦でした。低燃費の車をどうつくるか、これもリスクのある難題でしたが、奥田碩社長の決断でチャレンジしました。こうしてトヨタは、連続の中の非連続を果敢にや

ってきたのです。

五、ダイアレクチック・アプローチ

さて世界にトヨタの車を売っていく場合、それも年間七〇〇万台も八〇〇万台も売っていくとすれば、どう顧客を説得するか、買う気にさせるか、そこが大きな問題です。それについて私はこの本の中に、ダイアレクチック・アプローチということを書いたのです。そこでそれについて少し触れます。この言葉は実は経済学者の野中郁次郎先生の言葉で、それをお借りしているのです。

意味するところは、つまり相矛盾することを高次元で調和させようとするやり方です。例えばトヨタの技術屋はマキシマイズとミニマイズという相反する要求を持ちます、スピードは出したい、しかし燃費は下げたい。それを双方とも実現する方法です。

それには私どもは学者や研究者に頼んでケーススタディをやりました。八つくらいの課題について、三年くらいケーススタディをやって、それをまとめた。いわば矛盾と衝突の経営モデルです。さすがに優秀な学者は大したもので、英文名　ＥＸＴＲＥＭＥ　ＴＯＹＯＴＡという非常にいい本が出来ました。これはトヨタの中身をよく書いている、ここでは不可能と思われるような目標をたてる、それに挑戦する。いわば弁証法的に展開して高次元で解を求めるのです。

これを販売の面、説得の場面でいいますと、結局コミュニケイションの問題になります。そこで大事なことは場です。ミーティングや研修やパーティです。この場があって、はじめてコミュニケイションが出来ます。場の提供は経営者がやる、共通の価値観を構築する場をつくる、トヨタでは、場をいっぱい造り、その場を結ぶ、横に展開する、良い事例は横にもわたす、提案、カイゼン、知恵を・・・それで、人材開発、ＱＣサークルなどを自主的にやっています。

それからトヨタでは、グローバルナレッジセンターやユニバーシテイトヨタというものがあります。そこで教育をする。グローバルナレッジセンターでは、ミッションを広めていく、布教する、つまりトヨタウエイの伝道師を養成する。いろんなプログラムをつくり、知恵をしぼってやっています。

生産の面でもグローバルプロダクションセンターというのがあって、ここで各国のトレイナーを集めて教育しています。その他に三ヶ日というところにトヨタインスチチュートという幹部教育の場所がある、ここでは幹部候補生を集めてすべて英語でやる、英語ができないとは言わせないのです。

六、グローカルという考え方

トヨタの企業風土について最大の特徴を挙げれば「徹底した現地現物主義」でしょう。現場に行って現物をみて、どうしてだろう、何故だろうと考える。どこの国にも固有の歴史と文化があり、そこから生まれてくる商習慣というものがあります。これは日本にいていくら

資料を調べても議論して十分にはわからない。現場に行って。現地の様子を実際に見て、現地の人の話を聞いて初めて気がつくことが多い。このプロセスを省いてしまうと、結局は日本で決めたことの押しつけになって、うまく仕事が回らなくなるのです。ローカリティというのは人間が生きていく上で大変重要な要素です。どれほどグローバルな時代になってもローカルを無視したグローバルは成立しないと私は考えます。グローバルなものはローカルにぴったり合うように必要なアジャストを加えなくてはいけないのです。グローバルでありながらローカルである、両者が相互に対立したり矛盾したりしないように、高い次元で調和させる仕組みをつくっていく、グローバルな視点に立ちながら、ローカルに即した行動を工夫していくのです。

お互いに虚心坦懐、十分にコミュニケイションをとって、現地の事情や情報をシェアしてもらい、その上でお互いにとってプラスになる解決策を一緒になって考えていく。人間同士の信頼感を泥臭く築いていく事が大事なのです。

ここでも大事なのは前述したコミュニケイションの場です。たとえば、オフサイトミーティング、二〇～二五名程度で週末を利用して保養地に泊まり込み，裃を脱いで「気楽にまじめな話をする」、これが効果を発揮するのです。まあ、あの手この手でコミュニケイションを深め、なんでも本音で言い合える関係を築いておくことが重要なのです。

それからメッセージを伝えるときは、表現は簡潔に平明に、レトリックなどにはこだわらず直裁的に表現する。聴衆の心に届くような表現、相手の目線にあわせて話す、大勢の場合は誰一人居眠りさせない意気込み・・・ですね。結局のところ、人は気持ちで動くものです。ビジネスライクな欧米人でもそれは同じです。お互いの気持ちがきちんとつながりあえば、だいたいのことは乗り越えることができると思います。

七、よきリスナーであれ、そして最後は「誠意」でしょうか。

アメリカのあちこちで話をして歩いた、そこで「リーダーの要件はなにか」と聞かれる。それでアメリカ人の秘書と一緒に考えて八つのフレーズにそれを集約しました。私の名前が芳男なのでヨシズ・エイト・ルールということになりました。それがここにあるものです。

ヨシズ８ルール
(Yoshi's 8 rules)

ルール１	開かれた心と旅を愛する心を持て Have an open mind and love of travel
ルール２	よき聞き手であれ Be a good listener
ルール３	ポジティブな心を身につけよう Pack a positive attitude
ルール４	心身ともに健康であれ Be healthy in mind and body
ルール５	生涯、一人の学生であれ Be a student for life
ルール６	他者を尊重せよ Respect others
ルール７	完全なチームを構築せよ Build the entire team
ルール８	楽しもう Have fun !

その中でも一番大事なことはといえば、「良きリスナーであれ」ということでしょうか。

まず、相手のいうこと聞こうじゃないかということ、相当の無理難題でも我慢して聞く、これは忍耐がいります。しかし、まず相手のいう言い分をちゃんと聞く、真剣に聞く、それが大事、その上で聞けることは聞き、聞けないことはその理由をこんこんと話す、説得する。これが大事です。

それに、最後は「誠意」じゃないかと思います。これは万国共通です。よい聞き手になるということは、相手の目線で聞く、理解する、真剣に聞いてあげる、ここから始まる。そして出来るだけのことをしてあげる、出来ないことは出来ないとはっきりいう、それで理解しあえる、こころが通じる、そして心が動くと行動につながるのです。

七人の敵といいますが、もともと敵とは思わないのですね。よく話をしていれば意見が違うだけで敵ではないんです。世界に発信することを考えるなら、やはりこころを動かすことを考える必要がある、そんな風に思いますね。

質疑応答

石垣　これだけは聞きたいと思っていることがあります。私のキャリアはある意味で石坂さんとは逆さまで、グローバルな企業のＩＢＭの中でずっとやってきまして、今は純粋国内のドメスティックな中でやっているのです。そこで日本の社員によく言っているのは「話を聞いたら質問するのが礼儀だろう」「話を聞いたらすぐに質問しろ」ということです。外国人には「話を聞く前に、質問をするな」と言っています。これをずっとやってきました。

石坂さんのお話を聞いても、モチベーションをすぐ持てるアメリカ人やヨーロッパ人は、幹部エリートは別として極めて少ないと思うのです。普通のアメリカ人は、この話を聞いても分かりません。わかりませんからどこかでチェンジしないと本当の理解には達しないんですけれども、どこで乗り越えられるんだろうかと思うのです。

石坂　実は私はアメリカで社長をやった時に、九六年にいわゆるインターネットの幕開け時代でした。そこで、社長のホームページでヨシズフォーラムということでやったんですよ。その中で重要なことは、ビジョン、ミッション、トラベルです。こういうものが明確に示されないと、なかなかリーダーシップは取れないのです。インターネットに載せて従業員に分かりやすいように訴える。そうすると、答えが返ってくるのはマネージャーだけです。一般の人は全く帰ってこない。同時にコミュニティーレーションというのがありますから、私は車を寄付したりとか寄贈しているところの写真が出て、誰かと握手しているというのを出しますと、よくやったというお褒めの言葉が来るわけですね。やっぱりこういうものを共有できる人達は幹部だということです。幹部とこういうものを分かち合うために、私のリーダーシップのやり方は、インプルーシブマンということです。つまり、オフサイトミーティングです。金曜日の半分をここに当てます。つまり、家庭を大事にするアメリカのマナーという点で、トヨタウェイのチームビルディングをする、命題を与えて報告するのです。そして夜は飲み会ということで、皆さんのハートをつかむということです。そういうことをやっています。

幹部が当然、ディビジョンに展開してくれるだろうという期待を持ってやっていますから、その成果をモラル・サーヴェイで確かめます。モラル・サーヴェイを三年ぐらいやったんですけれども、結果がいいので、「Ｗｈａｔ，ｓ ｋｉｎｄ ｏｆ ｍａｇｉｃ ｄｉｄ ｙｏｕ ｕｓｅ？」ということを言われたんですね。「僕は何もマジックなんかしていない。どうしてそんなことを聞くんだ」と言いましたら、「あなたの会社はアメリカのハイパフォーマンスでいっている会社よりスコアがいい」と。なぜかというと、やっぱりモラルです。

金子　当然、アメリカだと転職するのが当たり前の社会ですから、辞めて行く人も多いでしょうが、トヨタの転職率というのはフォードなどに比べて低いんですか。リストラとかもトヨタのアメリカは一切やられていないのですか。

石坂　一般的に言いますと、極めて定着率はいいですね。そしてトヨタ色が染まっていると、「やめてくれないかな」と思うくらい、みんな一生懸命です。ＧＭから来た人、フォードから来た人、クライスラーから来た人いますけれども、やっぱりティームを作ってやるという気分がいいのでしょうね。私がよくやるのは、カラオケです。日本に研修で年に一回来るんですけれども、その時にね、いつも金曜日に終わるとみな帰っちゃうんですが、「だめだ、一晩泊って俺と一緒にいろ」と言うんです。「何をやるんですか」と聞くから、「箱根に行って泊って温泉に入って、カラオケやるぞ」とか、「初島へ連れて行って次の日は魚つりとだぞ」とか言いまして、そうすると一番いいのは日本人とアメリカ人のコミュニケーションが良くなるということではなく、アメリカ人の仲が悪いもの同士が仲良くなるのです。

「これまであいつとは一回も口きいたことはなかった。あの野郎きらいだった。でもよくよく話をしてみると、なかなかいい奴だな」と言ってくれるんですよ。一方、奥さんたちも招いて自宅でランチョンパーティーをやるんです。日米の奥さま方を呼んできて一緒にゲームをやるんです。彼らにとってそういうのは初めての経験だったらしいんですけれども、何回かやるうちに大変仲良くなりましたね。

日本人の奥様の中には英語ができない人なんてたくさんいますからね、ゲームならも真似でできますから、そういうことでコミュニケーションの場をつくるやり方も重層的に必ずしもこだわらないでやってみることが必要だとおもいます。これは裃を脱いでやるというように日本的ですよね。そういう思いでやって、良かったという例がたくさんありました。

塚本　僕はジェトロの時にアメリカに進出している日本の部品会社の人と一緒にメキシコとかブラジルとかに行きました。彼らが言うのに、やっぱりアメリカのビッグスリーに出すのとトヨタへ出すのとでは全然考え方が違うというんですよね。ビッグスリーのパーチェスの仕方というのは、とにかくコストカットで、もちろんある程度のクオリティーは求めるのでしょうけれども、コストカットでとにかく物凄くそこが機械的だというんですね。

日本の場合は、相当深いターゲットも出しながら、あまりめちゃくちゃなことを言わないというか、そういうところでアメリカと違う。ですから、日本の部品会社の人はもうビッグスリーとはやりたくないという位に言っている人がいます。その点トヨタは違うと思うのですが、どんなふうになっていますか。

石坂　今のご質問で大変興味深いのは、サプライアの問題です。サプライア・リレーションは特に私どものユニークなやり方がありまして、サプライア・サポートセンターというのをケンタッキーに持っているんです。そして改善指導をするのですが、それはトヨタの部品でなくても結構だということで、やっています。そうしたサポートセンターをしっかり持っているのは、私共だけではないかなと思います。

もう一つ、ある部品仮に一〇〇円だとしますよね。それがサプライアと一緒に努力して九〇円になったとします。トヨタの場合には両方が努力してやったんだから、七、三の割合で利益を分配にするなどして、サプライアに還元します。ロングタームリレーションを作るということが、私共の狙いなんですね。したがってトヨタの場合には、昔は「乾いたぞうきんを絞る」と言われたこともありましたけれども、あれはたとえごとでありまして、実はこういう仕組みになっているんですね。つまり、両方で技術革新をして仕組みを変える、コストをダウンした場合には、その果実をシェアするということがサプライアに勇気を与えるわけです。ここのところはあまり本とかにも書かれていませんが。

小野寺　似たような質問なんですけれども、トヨタとビッグスリーの研究開発に関する姿勢の差を説明して頂きたいなと思います。それから、中国でもアメリカでも同じような教育をされていると思いますけれども、日頃から我々が感ずるリスク要因のある国ということで、何か特別に配慮している点があるのかどうか、ということです。その辺に関する姿勢の差がジワジワと力の差になっているのではないかなと思うのですがどうですか。

石坂　研究開発費はケチらないという姿勢でやっております。トヨタの場合エンジニアも一万人おります。研究開発センターは日本が中心でございますけれども、今は日・米・欧それから最近ではタイやオーストラリアに設けておりまして、それぞれの地域でアッパーボディとかエンジンとか役割分担をしてやっております。将来は水素のエンジンをやっていきたいと思っていますので、そういう部分は日本が先端技術と研究部門をやっております。アリゾナにはテストコースがありまして、大きさは凄いです。相当真剣になって、やっております。デザインは日本、ヨーロッパ、アメリカそれぞれで行っております。

トヨタはＧＭと一緒にやってきましたので、ＧＭがハイブリッドはまだ研究段階なので「やるなら一緒にやった方がいいよ」と言ったんですが、向こうが乗ってこなかったんですね。私も当事者の一人ですが、ハイブリッドはいいということで全く乗らなかったです。このように、トヨタは一生懸命研究開発にも力を注いでいます。

それから、中国はおっしゃる通り対日関係について、非常に注意しなければならないです。工場の方はそれほど注意することはなく、大変素直に聞いてくれて、大丈夫なんですね。抵抗するのは、販売セクションで、「日本人の下でやれるか」というんですね。ですからどういうふうにやったかというと、中国の人はアメリカでトヨタが成績を上げていることは十分認識してから、アメリカ人を先生にしてアメリカ人の口からトヨタウェイをやっていくのです。そうすると、全然抵抗がないのです。アメリカ人から教わるのであれば、中国人だって全く抵抗がありません。「アメリカと同じように貴方も大きな国だから」と言ってね。

吹田　自動車産業のケースを一般的にこの研究会の趣旨に合わせますと、我々はどうグローバルに対応するかということに当てはまると思いますので、その点から質問させていただきます。コミュニティとかワシントン政府との折衝とかもご経験がおありかと思いますが、そこでの経験を踏まえながらお答え頂きたいのですが、もし今日本がグローバルに展開していく時に、「何処がまずいのか」「どういうふうにすればよいか」ご示唆があればお願いしたいです。

石坂　今申し上げたように、どういうふうにコミュニケーションをするかということなんですね。コミュニケーションを受ける方はどういうふうに考えるか、ということだと思うんです。コミュニケーションの方法は必ずしも押し付けではいけないわけです。日本は軍艦外交をやらないわけですよね。軍艦を持って行って脅してやるということはできないわけです。平和外交、国連中心主義なんて言っていますけれども、うまく機能しない。常任理事国にもなれないわけですから、情けないです。私はそういう時には、やっぱり智恵を出すということが大変重要だと思います。今まで申し上げましたように、いくつものアプローチがありますから、アプローチは多面的に考えてやる以外にないです。

ひとつの例でいいますと、海外へしょっちゅう行きますと、ＮＨＫというのは誰のためにやっているのかと思います。それは、日本の放送が見られるのは日本の駐在員はいいですよ。しかし、日本の情報の海外発信はほとんどされていませんね。この間、トヨタからＮＨＫの理事になったのがいるので言ったんです、「なんだ、あれは。海外ではＮＨＫの存在感はないぞ」と。ＣＡＴＶなんていうのは、もうガンガンやっているわけです。やはりこういうことは、皆が考えてもっとやっていかなければならないと思います。

それから、ビジット・ジャパン・プログラムというのがありますね。あれで最初五〇万人位を一〇〇〇万人に上げようということで、小泉内閣の時にスタートしたんです。今年は、九〇〇万人ぐらいになるようですけれども、一昨年位は七〇〇万人だったんです。それは、年間クロアチアへ行く人と同じなんです。

クロアチアは人口四〇〇万ですが、みなアドリア海が綺麗だというので行くのです。なぜ日本人は少ないのかというと、日本ではコミュニケーションをするためのトゥールが不足しているんですよね。例えば、日本語を理解できる外国人は少ないわけです。成田空港に着いた時に、荷物を持って降りてきてバスに乗る時に、道がもうごった返しているわけです。東京駅から成田へ行こうとしたときに、あのデコボコした所では、カートが引けないですよ。そういうものをスムーズに行うということを考えないで、道路ばかり造っても仕方ないですよね。インフラとかそうしたものを政府のせいではなく、我々自分たちのせいにしなければいけないと思うのです。

それからもう一つ大きなことは、教育だと思うんですね。海外からの留学生の受け入れ、そして後のフォローです。とくにフォローが弱いのと、インフラがないです。外国の学者や学生を受け入れて、下宿して生活してもらう。これには凄く物価が高いんですね。だから地方には、ガラガラになってしまった大学なんていっぱいあるんですよ。色々工夫することによって、外国人に日本に対する良い印象を与えるんですね。

僕はケンブリッジに行って、ケンブリッジのビジネススクールで二回ほどレクチャーをしたんですね。二年で二〇〇人いて、日本人はたった一人です。中国人二〇人くらいいます。何で日本人は一人しか来ないのかというと、要するに企業をはじめどこも、そういうところにお金を使わない。ＯＥＣＤの中でも大学教育にお金を使っている国として、日本は下の方です。そういうところから見直していかないと、やっぱり難しいと思います。ですから、私たちは、出先でやれることは何でもやりたいと思います。私などは国際会議によく出て、議論をします。議論しないと駄目ですね。英語で議論がまともに出来る人は少ないですね。そういう能力を身につけないと、やっぱりみな、置いてけぼりになっちゃいます。そういうことも含め、教育のなかでディベートができるように育てていかないといけないですね。そうすると、みなさんと分かり合える、名前も知ってもらえる、日本というのはどういう国かも分かってもらえていいのですが、残念ながらそういう状況にないです。

もう一つ重要なのは、ジェトロがやっていらっしゃるからいいんですけれども、日本の中小企業のノウハウを海外にもっと移植することです。日本の中小企業は、非常に優れています。中小企業は一人では出れませんので、助けてあげるわけです。日本には四〇年続いているＳＭＲＪといういい組織があるのです。こういうところが海外に出て行って、中小企業のノウハウを伝授するのです。こうしたことをもっと行うことによって、日本の確かな技術伝承が伝わるし、こういうものをバックに我々はやらないと、口ばっかりだねということになってしまいます。

泉　それからもう一つ。本の中に「7人の敵を友達にする」という項目がありましたけれども、非常に扱いにくい、気難しいディーラーをどのように説得して味方にしたのか、その辺をお願いします。

石坂　相手はフランス人なんですよね。物凄く厭らしい人がいたんです。「お前、トヨタの悪いところを全部言うから聞け」と言うんです。言い方も厭らしいし、態度も厭らしいし、それでも我慢して聞いていました。向こうも「こいつは良く我慢するな」と思ったでしょう。それでも飯を食べていても、まだ言っているんです。それで「わかりました、全部私が引き受けます。しかし、私の手に余ることもたくさんありますので、残念ながらこの場でお答えできません。」と言ったんですが。そして、「今日は、すべてを伺ったということで、ご勘弁頂きたい」と言うと「どうする気だ」と言うから、「良く考えて実行します」と言って、駐在員とも相談して数日後再びあって話しました。そこで解決できなかった問題は、「今度、現場を見て下さい。そして一緒に、解決しましょう」ということで、三日三晩、朝から晩までめいっぱい付き合いました。それで七割ぐらい満足して頂きました。残りの三割は「あなたの言うことは無理だ」と言いましたら、納得してくれました。それでフランスへ帰ってから、感謝状が送られてきました。「私は、あなたの心意気に感激しました。本当にいい思いをしました。３割は撤回します。」というような内容でした。それから好かれてしまって、すっかり友達になってしまいました。

だから、いつも僕は言うんです。「嫌な人とも逃げないで付き合え」と。苦手な人と付き合

いなさいと言います。大事なことは、誠意で嘘をつかないことです。

グローバル・デジタル VS ローカル・アナログ

石垣　禎信

一、もっと自信を持って行きましょう

大変厚かましいタイトルですが、仕事の現場の中で外国人や内外企業と付き合ってきた経験から感じていることを率直にお話したいと思います。日本の良さや日本人のリーダーシップ力、説得力は、我々が思っている以上に「凄いですよ」ということです。ですから、「もっと自信を持って行きましょう」というのが今日の言いたい内容です。

最初に経歴をお話したいと思いますが、私は奈良市の旧市街に生まれまして、どういうわけかカトリックの幼稚園に通いました。そこでの原体験は、「友達をいじめると、マリア様の前に連れて行かれて反省」という事から始まりました。クリスマスの時には、駐留の米軍が山ほど豊富な食料を持ってきてくれるのを見て、「外人は凄いな」と思っていました。

次に、外国語、コミュニケーションの話をしますと、たまたま中学の先生が変わった先生で、当時、奈良の大仏殿の周りには沢山の外人がいまして、中学一年の時に「Ｉ ａｍ ａ ｂｏｙ」「Ｍｙ ｎａｍｅ ｉｓ・・・」を習うと、我々をそこに連れて行って「ほら、教えた英語をしゃべって来い」というんです。私も当初から厚かましい方でしたので、外国人の前に行って話すと、外人は早口で返答するわけです。それを聞くと、皆怖くて逃げてきてしまうんです。しかし、それを繰り返しているうちに慣れてきまして、それがある意味では、語学に対するコンプレックスを感じずにきた原点かなと思います。

それから奈良を離れ上京し、一橋大学へ入りました。車が好きで自動車部に入ってラリーのドライバーをやっていました。そんなこともあって、就職の時の悩みがトヨタへ行くかＩＢＭへ行くかでした。車の関係ですと、先日ここで話をされましたトヨタの石坂氏が大学の先輩にいまして、「うちへ来い」ということで、名古屋まで面接を受けに行ったんですね。しかし、それとは別にＩＢＭの場合は、三年と四年の時に今で言うインターンのような形で研修をやるんですよ。それが当時カッコ良く見えまして、それにＩＢＭの初任給はトヨタの一・五倍だったんですね。それで、初任給に惹かれてＩＢＭへ行きました。それに、やはり東京で仕事がしたいという気持ちもありました。

二、ＩＢＭでの仕事

ＩＢＭでは営業を中心にありとあらゆる仕事をやりました。今のＩＢＭコーポレーションの会長はイタリア系のパルミサーノという方ですが、この人がその頃サービス事業全体を牛耳っていました。私はＩＢＭを卒業する少し前（一九九六年頃）に「日本型のアウトソーシング」という戦略的なモデルを提案し、情報処理に関する社員は全部ＩＢＭグループへ移籍してもらって「ＩＴ業務はすべてＩＢＭでやります」というモデルを創りました。そして、合併会社を作る是非について、時々パルミサーノやコーポレート（ＮＹの本社部門）とやり合って、首になるかならないかという瀬戸際までいきました。どれ位やり合ったかというと、ヨーロッパと

日本では時差がありますので、昼間の時間に準備して毎晩一二時以降、向こうの八時からですが、こちらの朝四時過ぎくらいまでやり合いました。私も自分のすべてを賭けていました。ＩＢＭも成長戦略を賭けていまして、プライドとビジネスのモデルを賭けていました。結論は「そこまでの決意なら、やってみよう」と説得に成功しましたが、今思い出してもエクサイティングな体験でした。

その後、ＩＢＭアジアパシフィックに出向しまして、外人の部下を何人も持ったりしました。アトランタにある部下の家へ行きますと、私の家の三倍から四倍ありまして「何でこんなに違うんだろう」という思いをよくしたこともあります。

こうした状況の中で体験したことですが、インターナショナルに日本人のことを話す場合によく言われる例えがあります。それが「タイタニック」「無人島」「象」です。

タイタニック号が氷山にぶつかりまして、私は船長の立場にいるとします。救命ボートはすでに子供と女性でいっぱいです。男の人に「海へ飛び込んで自ら逃げて下さい」という場合に、それぞれの国に対して色々な言い方があります。アメリカ人ですと「君はたくさんの保険が掛けられているから大丈夫だ」と言って船長は促します。スペイン人ですと、「海に飛び込むことは禁止されています」と言います。イギリス人には「こういう状況で飛び込むことは、紳士の道だ」と言います。こういう風にそれぞれの国に対する言い方があるんですが、最後に日本人に対しては、傍へ行って小さな声で「皆さん、飛びこんでおられますよ」と言うんです。私自身はあまり好きではないのですが、こういう風に言いますと、コミュニケーションが上手く成り立つという例です。

「無人島」というのは、男性二人と女性一人が遭難しました。さて、どうするでしょうかという話で、アメリカ人ですと、男同士どちらが素晴らしいかということで、えんえんとディベートをします。イギリス人ですと、お互いに紳士道ですので正式に紹介を受けるまで待ちますし、イタリア人ですとすぐに決闘となります。フランス人はさすがに立派で、「全然問題ありません。妻と愛人と住み分けして上手くやっていきますから」。では、日本人はというと、「本社にテレックスで指示を仰ぎます」ということになります。

こういう話は世界中どこでもやるんですけれども、アメリカ人はあまり乗ってこないんですよ。いろいろな人種がいるから一歩間違えると、人種差別の問題にもなり兼ねませんので、引いてしまいます。それに比べヨーロッパやアジアの人は、結構好きでジョークのネタにします。

最後の象の話も面白いです。インターナショナルスクールで、象についての作文を生徒に要求しました。アメリカ人は「裏庭で象を飼う」という題で作文を持ってきました。フランス人は「象との恋愛法」で、中国人は「Ｈｏｗ ｔｏ ｃｏｏｋ ｅｌｅｐｈａｎｔｓ？」という象の調理法です。では日本人はというと、「象から見た日本」でした。こうしたジョークは、実は今日のお話と関連しています。ある意味では非常に自虐的なジョークなんですけれども、ある意味ではかなり当たっているところもあります。私はその辺のところからいうと反対のタイプの日本人かもしれません。

商売仲間の中で私のあだ名は「説教強盗」と言われました。様々なサービス事業を担当し、

部下を持つようになりますと様々なトラブルが起こります。その時は真っ先にお客様に謝りに行きます。謝るのも上手いです。お詫びの最後のところになると、「お客様も今の体制ではこの辺に問題があります。これを機会にここまで強化して下さい」というように説教をして注文を取ってくるというので、このあだ名がつきました。

そんなことをしているうちに、ボストン・コンサルの堀紘一さんと会いまして、カッコ良く言えばヘッドハンティングされましてＩＢＭを卒業しました。戦略コンサルタントの日本法人の社長をやり、その後もいろんな経過がありまして、今はデーターセンター事業という情報通信システムの設備インフラを提供する商売です。多くのお客様が自分で強力な耐震性能のビルや、何重もの電源設備を持つことが難しいため、我々のような専門の事業者がサービスとして提供しています。イメージから言いますと、東京ドームの直径で一〇階建てのビルを想像してください。震度七強の地震がきても壊れないように、地下七〇メートルまで基礎を打ち、さらに免震構造をもつような凄いビルです。そこの電源は三重化、四重化されており通常の災害では絶対に電気が止まらない設計になっています。一つの建物としては世界最大だと思います。

このような中でビジネスをやっておりますが、経済の価値だけで物事が決まるわけではありません。ビジネスの中には政治の話もくっついてきます。

たとえば、私がＩＢＭに入社した一九七〇年代のことですが、営業に行くと、その頃は労働組合がまだまだ盛んでしたので、書記長や委員長もお客様の有力なメンバーです。そうすると「お前らはアメリカ帝国主義の手先だ、俺たちは絶対に国産のコンピューターを買う」などと言われました。こういうことで、経済の話は必ず政治にも絡むし、歴史や文化とも絡むのです。まあそんなことで、政治も歴史も文化にも興味を持ちまして、気がつくと辿りついた場所が「米欧亜回覧の会」でした。これが私の長い自己紹介です。

三、グローバル・デジタル化の現実

さて、「グローバル・デジタルＶＳローカル・アナログ」という本題に入りますが、ひとことで言いますと、世界は想像以上そして必要以上にグローバル化デジタル化している、ということです。逆に言うと、日本は想像以上にグローバル化デジタル化していないのではなくて、しているにもかかわらずそれを認識していないということが、言いたいことです。

例えば、昨年一一月のサブプライム問題を契機とする世界金融恐慌の話が一番分かりやすいのですが、その恐慌がグローバルで世界中を巻き込んだという話とデジタルでコンピューターでやっていて誰もリスクを見抜けなかったという話とは繋がっているんですね。やっている本人自身も大きさと複雑さに気付かなかった。これが「グローバルでデジタル」が世界を巻き込んじゃったという一番の好例です。インターネットやコンピューターに関しては、ネット社会としてこの話は理解して頂けると思います。

では次に、中国の粉ミルクが「なぜグローバルでデジタルなのか」という話です。これは、牛乳にメラニンを入れますと牛乳のタンパク質成分と偽装できますから、上等なたんぱく質に見えるのです。これが世界中に広がったわけです。ところが、あの会社はニュージーランドが

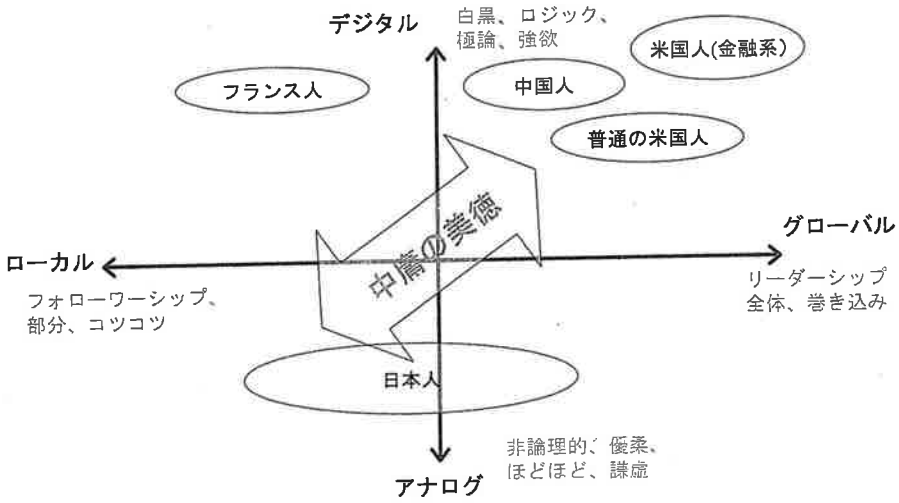
主要株主になっていまして、決して中国の会社ではなくグローバルカンパニーです。わからないうちに、世界中に輸出されました。実は、メラニンを入れたタンパク質の容量をコンピューターのデジタルでチェックしているのです。中国のデジタル測定器は偽装を見抜けませんでしたが、日本の測定器はもう一つのロジックを組み込んであるので、騙されませんでした。いちがいに「中国の悪い奴がやっている」というわけではなく、みなグローバルとデジタルのからくりなのです。

「うちのおばあちゃんは田舎の郵貯に貯金していて、コンピューターを見たことも触ったこともない。だからローカルでアナログよ」という人がいます。郵貯に預けること自体が世界の金融商品でグローバルにやっていることですし、日本の田舎に住んでいるということが必ずしもローカルじゃないんです。最近、日本の様々な商品の表示や説明書を見て、クレームや問い合わせで電話しますと、その電話先のコールセンターが日本だと思ったら大間違いで、オーストラリアやインド、中国の場合が多いのです。世界中で日本語のできる人を安く使っているのです。だから私はローカルでアナログで、グローバルやデジタルは関係ありませんと思っていても、そうではないんです。知らないうちに組み込まれてしまっていて、このギャップには、一般国民はともかく政治家も気が付いていないのです。

私はデーターセンターをやっておりますので、究極のリスクマネージメントのサービスを提供するためには、地震やテロを含めて思い切り嫌なことを考えなければいけない立場にあります。皆さんご存知のように日本は言霊の世界ですから、危ないことや怖いことを想定して「こんなことが起こった時、あなたはどうしますか？」と正面から問うと嫌われるんです。例えば大災害が起こってリソース（人、機材、食糧等々）が決定的にない時「あなたはどうしますか？」「誰を見捨てますか？」「どの業務を切りますか？」と聞くことです。皆さん本当は「決めておかねばならない」と分かっているのに、そこを正面から問うと嫌がり、危ないことはさけてしまうので、なかなかリスク対応が進まないという問題もあります。

もう一つリーダーシップの話をします。これはグループの場合も単独の場合も含めまして、色々な職業分類を表にしてみました。これはそれほど証明されたものではないのですが、政治家や経営者というのはどちらかというと、「全体を引っ張り回したい。利用したい」「富と権力を得たい」というモチベーションを持っています。逆に「個人でやりたい、あまり人を巻き込むのは得意でない。それからあまり富や権力志向がない」というと、先生とか職人の方です。一方、それほど人を巻き込む力はないのだけれどもうるさくて、富や権力志向が強いのはコンサルタントなどです。これはグローバル・デジタルの話とは似ているところがありまして、強引に理屈でまとめたのが次の表です。

「中庸の美徳」でリーダーシップを取るのは辛いが面白い



©2009 PMS Ltd. All right Reserved

四、「中庸の美徳」でリーダーシップ

ここでのグローバル・デジタルというのは、グローバルがリーダーシップ、全体を抱き込むイメージで、世界中を巻き込むということです。ローカルはどちらかというと部分、フォローワーシップ、付いていけばいいやというタイプ、こつこつというイメージです。デジタルはある意味では白黒の二進法の世界です。アナログは白黒のロジックに対して非論理的で、良く言えば謙虚で悪く言えば優柔不断というイメージです。この中で、日本人はどの辺に向かっているのかというと「中庸の美徳」、これは知足にも繋がっていくことですけれども、「ほどほど」ということが良いんだということで、私は説得してきました。

これも国によって違うんですけれども、アメリカ人と話していると一番右上の「思いっ切りリーダシップとデジタルの権化」のようなところを感じます。一般的にはもう少し下に位置するんですけれども。それに比べてフランス人はあまり人を巻き込むのは得意でないです。自分たちは文化の中心であるという意識が強いですので、それの分からぬ奴はほっておこうという感じです。しかし、結構ロジックは強いですよね。中国人は図のようにイメージしてみました。テロリストは右側のリーダーシップは思い切り強くて、非論理的な部分が強いですので、右下の部分に入るのかなという気がします。

このようにイメージ的には分けられるのですが、実は自分が体験的にビジネスの中で付き合

った感触を言いますと、世界の皆さんも極端に位置することには辟易しているんですね。どこの国の人も「豊かに暮らせる」とか「楽しく暮らせる」などという気持ちはそれほど変わらないんですよね。いくらアメリカ人がロジックが好きだと言っても、やはりホンネを聞いてみれば「実は疲れる、嫌だ」と言いますし、色々な国の人と話しても「中庸の美徳」「ほどほど」というところをみんなが求めているということを感じます。

先日、コミュニケーションのことで「沈黙」の話が出ました。日本人は会話の中で沈黙の最高限度は五．一秒であるのに対し、アメリカ人は〇．七四秒です。何かにつけ早いのがアメリカ人です。これは、スピーチの後の質疑応答などにも表れています。日本人は「質問ありませんか？」と聞いた時に沈黙している場合がほとんどです。そして翌日になると意見を持ってきます。ところが、アメリカ人は話が終わらない前に質問するのです。ここの差の部分で疑問を感じますが、本当は真ん中のところがいい、「平和にほどほどに楽しく暮らしたい」というのが九五％の人であると思います。いつでもロジックで、また何でもかんでも中庸でいいとは思いませんが。

そこで思うのですが、その「中庸」の美徳が、ちょうど今がチャンスです。昨年、グローバルに金融恐慌で破滅しましたし、エコロジー、資源、エネルギーが有限だということもわかってきましたので、この中庸ということも説得力を持つと思うのです。では、中庸でリーダーシップをとることは可能かというと、辛いが面白いと思います。リーダーシップというのは、理屈なんですね。ぐうの音も出ないまで論破するのが本来リーダーシップであるところに、「ほどほどだけど、気が向いたらついてきてよ」というのは辛いですが、段々そのような形に移行しているような気がしています。

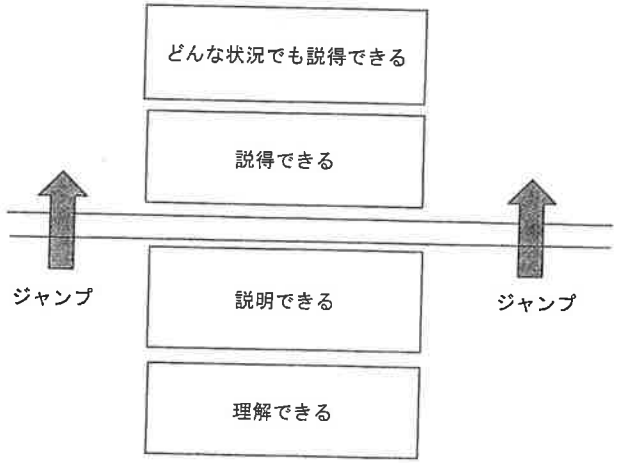
英語力の話ですが、二五年前にＩＢＭで調べたところ、世界中で英語が下手なのは日本人、韓国人と言われるぐらいビリを争っていたんです。ところが、ここ一五年で韓国は一気に変わり、英語が上手くなりました。日本は今や「置いてけぼり」なんですね。でも、日本人もそれほどロジックに弱いわけではなく、むしろ強いと思います。では、どのようにやるのかということですが、日本人はその気になれば説得力も凄いんですよ。その気になればできるのだけれども、ほとんどの人がその気になっていません。そこが一番の問題だと思うんです。

五、説明責任と説得責任

「説明責任」の他にもう一つ「説得責任」というのがあります。あまり説得責任という言葉は日本で使われないんですが、私は日本人の多くが説得責任を持たねばいけないと思っています。なぜかというと、説明責任はどちらかというと、言いわけになってしまうからです。言い訳を一生懸命にすることもいいんですけれども、その前になぜ説得しなければいけないかということを考えるべきです。

説明責任と説得責任(？)

その気になれば日本人の説得力(営業力)は凄いんです。



でも、説得(営業)することは、賤しい/恥かしい事と思われている(た)。

©2009 PMS Ltd. All right Reserved

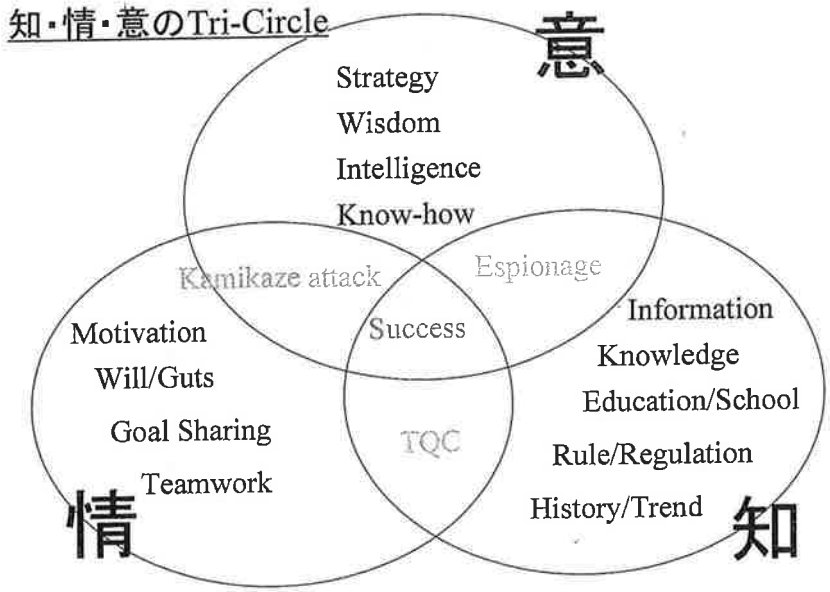
これは私のところの会社で使っている図なのですが、「理解できる」「説明できる」「説得できる」とあります。私の得意先会社は全体の八〇%が日本の伝統ある会社なので、ごく日本的な会社なんですね。社員のランクのところでも以前は、「理解できる」「説明できる」「よく説明できる」と上中下の三段評価だったんですね。でも「これでは、お客さんお金払ってくれないじゃないか」ということで、やり直しをさせたんです。普通の会社は「説明できる」で払ってくれますが、情報を売るとなると、その段階ではお金を払ってくれません。次の段階に「説得できる」その次には「どのような状況でも説得できる」という段階があって、ここまでこないとお客さんは払ってくれないよということを言ったんです。四年半くらい前にこのことで大論争しました。「説明できればいいんでしょ」ということと「俺たちはお金を頂かなければならないから説得までしないとダメ」というギャップを埋めるのが大変でした。

ところが、日本ではこれが難しいですね。なぜかというと、日本の場合は大抵説得すると、その人がその場所に居ずらくなることが起こります。実は説明することは下賤なことではないのですが、説得するとか営業するというと、これは賤しい立場の人がやるものだと思われています。「士農工商」という話もそうですが、よく「まいったな、営業に回されちゃったよ」という話も同じだと思います。この文化の発祥のもとは、天皇制とも関係がありそうだなと感じています。日本文化の中では説得するという行為は下賤で下品なことでした。が、私のような立

場になりますと、説得しないと一銭もお金が頂けないということになりまして、人間も少しづつ変わったようです。いざやってみますと日本人でもみな結構上手いんです。最初はカルチャーショックで下を見たり、ペーパーを見たりしていますが、やっている段階で快感になってきます。決して日本人の説得力は下手でも何でもなくて、発揮してこなかっただけだと思います。

六、「知」「情」「意」の必要性

ではなぜ説得する必要がなかったかということですが、「知」と「情」と「意」というのがあります。この三つが揃わないと駄目だとみています。天地人みたいなものですね。なかでも「意」が足りないように思います。「知」というのは情報、知識、法、規則、歴史、傾向などです。日本人がどちらかというと好きな「勉強すれば出来る」というところです。それから「情」は動機、やる気、ガッツ、共同化、チームワーク、共有化でここも日本人は好きです。意外に嫌いなのが「意」の部分です。一般にいやらしい言葉とされています。戦略、戦術、知恵、インテリジェンス、ノウハウなどです。一般に、このあたりのエネルギーや突っ込みが足りない。この三つを持たないとサクセスがないというのが私の持論です。



©2009 PMS Ltd. All right Reserved

たとえば、情と意のみがあるのは、戦前の「神風アタック」です。知と意があるのが、「謀略」のようなものです。知と情があるのはＴＱＣ（トータル・クオリティコントロール）です。これは品質の高い製品を作る時はいいんですけれども、何でもかんでもＴＱＣで、自分の将来を

語るのまでＴＱＣでデーターを作らなければいけないとなると困るわけです。私もこれに関しては苦い経験がいくつもありまして、ある企業に行き役員のところで戦略と改革の話をしましたら、「大変良い話ですね、つきましては役員会へいって話してくれ」と言うので、役員会へ行きました。そしたら「素晴らしい、ぜひこれをやらなくてはいかん。ついては石垣さん部長会へ行って話してくれ」、そこでもまた「次は部長、係長の所へ行って」という風にタライ回しされた経験があります。そして壁を見ましたら「みんなで取り組もう、大変革」と書かれていまして、何でもかんでもＴＱＣでは駄目だということなんです。

七、「中庸の美徳」とは

今世界では、グローバル・デジタルの極論ではうまくいかないということが、リーダー達にも一般の人々にも理解されつつあります。熱・エネルギー・資源の問題に各国がエゴ丸出しで取り組み始めています。今こそ、日本が「中庸の美徳」をキーワードにして「意外に凄い説得力」でリーダーシップをとるチャンスではないかというお話でした。

最後にひとこと付け加えたいのですが、四月に「米欧亜回覧の会」の例会であった谷村新司さんの話の中から印象深いフレーズを引用させてください。「中庸の美徳が何故いいか」を説得するために。

「皆がよくなるためには皆が我慢しなければならないことがある。」

したがって

「中間としての灰色ではなく、白黒の極限としての結果」

「中庸の美徳」とは中間としての灰色ではなく、

白黒の極限としての結果であり、解決策でもある。

質疑応答

吹田　期待していた通りのお話をして頂き、「やっぱりそうか」という感じで大変嬉しく思います。最初の図ですが、これについては政治家も分かっていない点が多いです。唯一分わかっている人に今の東大の学長がいて、「課題先進国」という表現を使っていたのを思い出しました。

「中庸の美徳」のリーダーシップ論が非常に興味深かったです。リーダーシップ論というと、ぐんぐん引っ張っていく突進型のイメージが強いですが、この温和なリーダーシップ論を展開していくのは非常に面白いと思いました。これは日本人としてのアドバンテージをもっと生かす道にもなりますし、日本人がもっとこのことを意識して展開していくべきだと思いました。

最後の話のところは、私もシンクタンクにいた時に体験した事ですが、経済データをお金に換えなければならないわけです。経済レポートは銀行の調査部で無料で配布しているんですね、それを我々はお金にしなければならないということがありました。それがだんだん行き詰って、コンサルティング事業を始めたんですよ。そこで研究員を鍛え上げる時に、今日の問題と同じ

ようなことを感じました。インフォメーション以下の部分が非常に強いです。情報はあるのになかなかお金にならないのです。お金に換えるということになると、「意」の領域に入らないといけないです。価値観も研究態度もすべて戦略と知恵に変えていかなければならないのですが、そこが難しいです。苦労しました。研究員の意識改革に身をつまされたことを思い出します。

三菱総研で「インフォメーション・インダストリー」を使うと言った時ですが、そこへ松下幸之助の通訳をやった人が来て、「インフォメーション」ではなくて、「インテリジェンス」だ。飯を食っていくためには、インテリジェンスにしなければいけないということで、それ以後インフォメーションをあまり使わなくなりました。

石垣 この「意」の価値を、教育現場でもそうなんですが、会社の中でもきちんと評価していないです。「知」のテストばっかりやっています。チームワークと情報のテストは結構やります。ところが「意」の部分はあまり評価されません。戦略を出した人は、日本社会ではあまり評価されないのです。嫌味になってしまいます。

吹田 そうなんです。今は多少は変わってきたのかもしれませんが、昔はみな「知」で採用するんですよね。だからいざとなった時に、お金に換えられないんですよね。この「意」を教えることというのは、学校教育でできることでしょうかね。

永池 東京の杉並の藤原和氏が中学の教科書を見て、正にこのことに腹を立てて、リクルートのフェローだったのが「よのなか科」という本を出しました。それがヒットして、教員の資格がないのに校長になったんですね。彼と色々話した時に今の話になったんですね。彼の言葉を使うと「情報処理力は日本の教育は強いけれども、情報編集力が弱い」といっていました。

石垣 私は情報システムでずっと食っていますが、法律がどうのこうのという話はいくらでも調べられるわけです。自分がわからなくても調べればいい。

ところがこの「意」の部分の力はどうやってつけるのか、そしてどうやって評価するのかが問題です。

吹田 私がやりましたのは「本は土日に読め」、「月曜から金曜まではお客様のところへ行って現場で、お前、こんなことも知らないのかと叩かれて来い」といいました。そして、そこから悔しい思いをしてメモしたものから、徹底的に学んでいけと言いました。そうすれば自然に道は見えてくるはずだと言ったんです。けれども、私は今現役を離れていて非常に感じているのは、今回の世界不況を誰が予測したのかということなんですね。去年のファイナンシャルタイムズを一年間ずっと見たんです。そうしましたら、一人だけいるんですね。これが一一のフレーズに分けて書いていまして、現実に起こっていることはその通りなんですね。私もびっくりしたんですが、本来経済のセンスがある研究員でしたら、現場の状況からわかるはずなんですよね。やはり現場から学ぶという姿勢が大事だと思います。

石垣 日本のマスコミほどエコノミストと評論家の好きな所はないですね。評論家は決して楽観的なことは言わないし、新聞とジャーナリストはなぜ明るいことを言わないのか、暗い話ばかりです。それは先ほどの図と関連していて、「知」と「情」の話は好きなんですが「意」であれやったらどうか、これやったらどうかという話は嫌いではないんでしょうけれども、あまり

受けないです。

吹田　そうなんですよね。だからこの「意」の部分を日本のリーダー層の中でどのように強化するかということなんでしょうね。

永池　それはやはり説得力ではないですか。出来上がった中で階段を上るなら別ですけれども、何かを起こす場合、人を動かす場合の最大の武器は説得力ですよ。ワンマンと強力なリーダーシップの違いというのは、ワンマンは説得力は必要ないです。説得力は強くなれば強くなるほど強いリーダーシップです。だから、ここを磨く教育をしないといけないと思います。

うちの場合は、色々やっている中で女性対象ですけれども、シェークスピアのジュリアス・シーザーをテキストにして朗読から演説までやらせます。これを声を張り上げて一年間やります。これは僕はシェークスピアというのは凄い天才だと思うんですけれども、大衆の気持ちを見事に変えていくのに良いテクニックだと思っています。これは私が実際に学生時代に出会って、私の説得力はここからスタートしました。この説得力が磨かれてこないと「意」に通じないと思います。

藤原　日本に一番欠けているし、これから磨かなければならないのは「意」だと思います。一昨年「暗闇に身を置いて」という日本語の翻訳で「前モサド長官の証言」という本が出たんです。オリジナルは英語です。私はこのオリジナルを読んで大変に感動し、すぐイスラエルに飛んでハラビーさんという長官を口説いて日本に連れてきたんです。

というのは、日本はインテリジェンスの問題で、安全保障の問題についても脇が甘いんです。そういうことに対するリーダーもいないです。こんなことでいいのかなという危惧を私はずっと持っていました。彼を二週間ばかり呼んで色々話を聞きました。そうすると、モサド長官の時に飛行機Ｆ１１やＦ２２をレバノンから盗んできているんですよね。ストラテジーについて、日本では考えも及ばないようなことをやっているんです。発想自体が凄いです。そして、国のためなら命を賭けてでもやるという精神力。そのリーダーの部下に対する愛情、その全てを持っている人がモサド長官だったんです。日本ではそのことすら知られていないという状況です。

石垣　あえて反論させて頂きます。軍事的な話については日本人はそのような発想はないと思うんですけれども、たまたまグローバル企業のＩＢＭで日本の戦略やアジアの戦略に絡んだ時に、世界的に名の知れた企業がどの程度かということも一応身体で見てきました。しかし、それほど恐れることはないと思います。ここで言っているところの突っ込みは凄いし、実行力と実行しながら変えていくというところが凄いんだと思います。

ここでやらなければいけないという時に、思い切り仮説を作って突っ込んで行って回すというところが凄いというのは、言えます。じゃあ、日本に発想そのものができないかというと、そんなことはないと思います。そこのところは自信を持ってもいいと思います。

藤原　発想があっても実行ができないのでしょう。そこのところは、リーダーですね。リーダーがそこまで腹をくくってやるかどうかということですね。

泉　逆に言うと、日本の工業力がここまで進んできた過程で、日本の技術者などは色々なものを盗んだりということをやってきているんじゃないですか。そうでなければ、ここまで伸びて

こなかったのではないかと思うのですが。

石垣　誤解しないように言わなければなりませんが、寸前のところまでやっています。日本が競争力を持っているＩＴや車などは、ある意味では日本が最初からトップだったわけではないですから。一時期ＩＢＭスパイ事件などもありましたが、これが表に出ると二〇〇億円以上の金を払わされるということで、裏から言うとものすごいことをやっています。それは逆にいうと、そこまでやらなければという物凄い危機感がありましたので。

藤原　一九八七年の東芝機械事件が正にそうですよね。その時にちょうど私はニューヨークにおりまして、「あんな形に東芝はなっちゃったが、誰か助けてくれ」と言われました。寺島実郎君とチームを組んで色々やったのですが、あの時の工作機械というのは素晴らしいものでした。それをソ連に売っちゃったんですね。もしかするとあれは罠だったかもしれません。日本があまりにも技術的に進んでいるものですから、工作機械というモノづくりの一番大切な機械をやられてしまったんです。罠も引っ掛けるんですよね、ＣＩＡなどの考え方です。モラルではないんですね。

森本　「中庸の美徳」はいいのですが、さて、あの中華思想のフランス人や強欲のアメリカ人を果たして説得しうるか疑問なんですね。どうやって攻めるか、具体的な方法はありやと伺いたいのですが。

石垣　資源や環境を材料に使えばいいと思うのです。たとえば資源ですが、アメリカ人だって、石油はあと数十年しか持ちませんよ、その後どうするのですか・・、とやる。そこで、太陽エネルギーを持ち出します。ある学者の説では、太陽エネルギーはまだ何億分の一しか利用していないというじゃないですか。これを活用しない手はないと思います。

私は実はその太陽エネルギー開発の研究会に参加しているんですが、その可能性は極めて大きい、そこに日本の出番があるという考えです。アメリカ人に「貴方、ＧＭのエコカー持っているの？。それよりも日本の企業と組んでやった方が早いよ」と説得するんです。

森本　それにしても日本だけでは負担が大きすぎるので、私はインド人を巻き込んだらどうかと思うのですが。アメリカ人、中国人はとても駄目だから、インド人と組んではどうか。というのは、インド人にはヒンドゥーがベースにある。仏教にも理解が深い、思想的なところで共通点があります。八億から一〇億のインド人を味方に引き入れれば、凄いパワーになります。この考えはどうですか。

石垣　インド人と手を組めれば、中国人もウンというかもしれませんね。アメリカ人は意外にインドが好きですしね。

泉　アメリカ人は強欲だと言うけれども、アメリカにも色々な人種がいて、考え方も違っている。だからアメリカ人は駄目だと言わずに、アメリカの中にも同調者を見つけて、それと協力してアメリカを内部から変えていく方法はないですか。

石垣　アメリカ人が「中庸」をいうのは自己矛盾ですね。アメリカで日本びいきの、日本大好き人間はやはり少数派、異常と思われていると思います。アメリカ一番という意識が強くて、それをとったらアメリカの存在意義がなくなると思っているのではないでしょうか。

吹田　そうですね、例えば軍事についてアメリカは凄い自信を持っていますね。一番だという看板は、そう簡単には捨てられないでしょう。それを言うなら、アメリカの持っている世界的公共財は軍事で

すが、それによってアメリカは世界の安全保障に貢献している、その代りをしてくれる国はありますか、ということになるでしょう。

浜地　日本的経営とアウトソーシングのことですが、例えば武田薬品の長谷川社長が厳しい国際競争に直面して日本人従業員を斬るかどうかで凄く悩んでいると聞きました。その狭間で物凄く辛い決断、選択をしなくてはならない。そのところをどう説明するかですね。

石垣　私が扱ったケースで言えば、ある銀行のIT関連の仕事をそっくりアウトソーシングするということがありました。それに一〇〇億円かかっている、外へ出せば八五億円で済む、それには三〇〇人ぐらいの首を切らなければならない。そこで合併会社をつくって、そのうち使える人を一五〇人位雇うための受け皿をつくるんですね。そして、銀行のスタッフとして活かせる人材は残してもらう、そういうふうにして雇用を確保するように努めました。

合併会社に残る人も、そのIT技能を上手く活かせば、それはそれで幸せなんです。情報処理という職種は銀行のコア部分ではないから、外へ出しても大丈夫なんです。会社にも個人自身もその方がいいということで、そう思い込ませることですね。日産自動車の場合もIBMで受けましたが、その時はゴーン社長と直接やり取りをしました。タフなネゴシエーションでしたが、最後にゴーンがいいました、「リラクタント・イエス」とね。

小松　アウトソーシングで感じることですけれども、ビジネス外の人間から見ると、アウトソーシングと聞くと外注というイメージが強く、何でもかんでもコストを下げるために外注してしまう。そこでは人間を育てるという環境が希薄化しているように思うのですが、その辺はどうなんですか。

石垣　経営の戦略的な手法としてのアウトソーシングは、「人の育成」を抜きには語れません。なぜならビジネスは全て、人、物、金、情報をいかに使うかであり、アウトソースを活用する側もアウトソーシングの表面的な利点のみが強調して伝わったためだと思います。曰く「安い」「外出し」「首切り容易」という言葉が躍り過ぎていますので、サービス業の渦中にいる私も自戒しなければと思います。

小松　もう一ついいですか。今日、用意して頂いたユニークな絵図についてですが、最後に「情」「知」「意」と三つの図がございますね。「情」と「知」は良くわかるのですが、「意」の意味を教えて頂ければと思います。戦略や戦術、知恵、意志の意を指していることはわかりますが、実際のところはどうなのでしょうか。そして、またこの「意」を養うことが重要というご指摘もありましたが、実際にこの力を磨くためにはどうしたらいいのでしょうか。

石垣　「意志」の「意」というと誤解を招き易いと思います。実際は「WILL」を意味しています。「意」の意味は、意志からスタートし、何とか実現したい気持ちが昇華し、覚悟になったようなものと考えてください。人の批判をうけることや場合によっては犠牲を払う覚悟です。だから戦略や知恵に繋がるのです。希望や「べき論」しか語れない政治やマスメディアの世界の議論は、「意志」の世界ではありません。知と情のみです。「覚悟を伴った意志」が今必要だと思います。

養う方法は、当事者、責任者として渦中で経験し、泣いたり喜んだりするなかで体得するばかりで、勉強では養えないものと思います。

日本は今　世界に何を発信すべきか
―日本は世界のモラルリーダーに

森本　淳之

一、現時点での歴史認識

世界は今まさに歴史的な転換期にある。今起こっている様々な現象の時代的、本質的変化を読み取らねばなりません。

(一)アフガン、イラク戦争で判明したこと

まずアフガン戦争やイラク戦争で判明したことは何かと一言で云えば、それは「一極覇権主義の終焉」であり、「多極化世界の始まり」です。これまでの冷戦終結後の世界は、超大国アメリカの一極覇権主義で世界の秩序を曲がりなりにも守ってきました。

ところがアフガン戦争とその後のイラク戦争によって明確になってきたことは、アメリカの圧倒的経済力と軍事力による制圧の限界がはっきり見えてきたことです。ブッシュ時代にアメリカは、経済的にも軍事的にも疲弊してしまいました。すなわち世界的秩序は勿論、局地的な秩序すら戦争や軍事力などの強制力ないし暴力によってでは、これを制圧できなくなってきており、非暴力や話し合いなどの平和的手段による粘り強い解決方法が求められているということです。そして非暴力についてはインドのガンジー主義に遡り、平和主義については原爆投下により戦争放棄の憲法を有し、核廃絶を訴える日本が今世界的にも注目されるところです。

(二) 今回のサブプライム金融危機で判明したこと

今回のサブプライム金融危機は直接的にはアメリカから発したことですが、瞬く間に世界中に伝播し世界を席巻しました。これはこれまでのように日本のバブルやアジアの経済危機といった局地的な現象ではなく、世界がまさに同時的に動く一つの経済「グローバルエコノミー」になっているということを意味します。そして今回のアメリカの市場経済はアダムスミスの云う「神の手」によって動いたのではなく、「強欲な資本主義」によって動かされたものであるといえます。

そこにはモラルなき拝金主義、金儲至上主義があり、弱肉強食の世界があり、格差と貧困が蔓延する社会が横たわっています。従って、今、世界に必要なのはこれらの「強欲な資本主義」や市場主義を統制あるいは制御するシステムであり、またそれをリードするコントローラーやモラルリーダーの存在です。

すなわちそこには新たな世界的コントロール機関の創設が期待されるところであり、むしろ足もとでは日本こそこのモラルリーダーの役を買って出るべきではないかと思います。

二、目指すべき世界像

これから人類が目指すべき世界はどのようなものであるか、まさに歴史的なパラダイムの転換「ｃｈａｎｇｅ」が必要と思われます。

一つには「暴走するグローバル資本主義」或いは「強欲資本主義の限界」が誰の眼にもはっきりしてきたことにより、いかなる「ポスト資本主義」を描くかが喫緊のテーマです。市場プラス政府による二元的「混合資本主義」を唱える学者もいますが、単に経済の問題ではなく世界的、地球的視野や観点が今や加えられなければなりません。

一方で「非暴力による平和主義」の推進が必要であり、他方で地球温暖化などに配慮する「地球市民」の誕生が必要と思います。

これからの地球は人口爆発により現在の六七億人が二〇五〇年には九一億人になるといわれています。この食料確保と一方での穀物資源の枯渇にどう対処していくべきか？まさに「節度のある市場経済」が望まれるところであります。そして「短命・過剰消費型の社会」から「長命・安定消費型の社会」へ、今まさに「足るを知る欲望抑制型」の「清貧の社会」を目指すべき時がきているのではないかということです。

自然と人間との調和による「サスティナビリティー社会」とは、まさにこの「欲望抑制型」の「清貧の社会」ではないでしょうか。そしてそれはきわめて仏教的な社会であり、まさに足るを知る最適循環型社会の「知足循環社会」が、今日、世界が目指すべき世界であると思います。

そしてここでも日本は世界の先頭に立って、まさに仏教発生の国インドと手を組み、これを推進すべきだと考えます。

資本主義社会はこれまで人間の欲望を開発して発展してきました。人間の欲望を充足する商品やサービスを開発してきました。

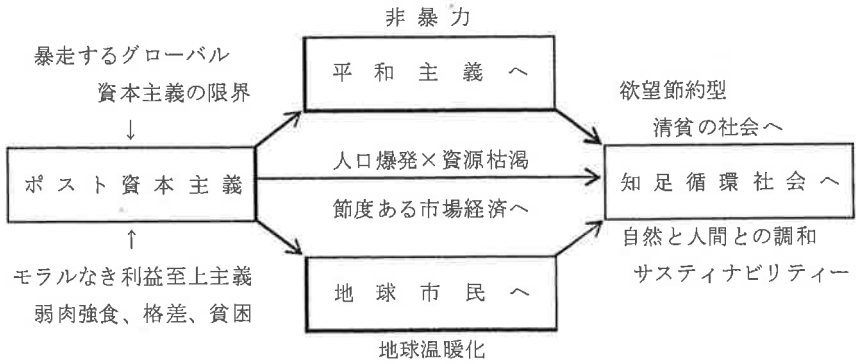
しかし、今や人口の増大と資源のせい約から果てしない人間の欲望を抑制しなければならなくなりました。即、欲望開発型から欲望抑制型への転換が必要です。

そしてさらには物質的価値より精神的・文化的価値を重視すべき時が来ていると思います。物質やエネルギーを消費しないで精神的なものを求める方向への転換が必要です。その一つに宗教への回帰があります。

いずれの場合もその大前提は世界が平和であることです。

テロや地域紛争や戦争の中では人々に幸せはありません。今や平和には絶対的価値があります。

そろそろ人間は自らの愚かさから抜け出さなければなりません。そして平和の価値を噛み締める時が今まさに来ているのです。



三、日本の役割

以上の一、二を踏まえて日本のあるべき道を一言で云えば、「世界平和を追求する世界のモラルリーダーたるべし」ということに尽きると思います。

しかし、これをどのような手段によって推進していくかですが、以下の三つの角度から直ちに行動を起すべきだと考えます。

（一）先ずインターネットを駆使して「平和主義」と「知足循環社会」の重要性を直ちに世界に発信し、アッピールすることです。その上で日本国は国連やＧ二〇や世界平和会議などあらゆる機会に、このことを世界に訴えていくことが必要です。

（二）次にモラルリーダーとして新たな世界の金融・通貨・貿易機構の創設を提案することです。

既に今世界に存在する国連やＩＭＦやＷＴＯなどの機関の中から金融・通貨・貿易を統合した新たな機構創設が早急に望まれています。それはまさにグローバルエコノミーをコントロールする機関でもあり、日本は今国連の常任理事国などを目指すより、この機構創設とその中でのモラルリーダーを目指すべきだと考えます。

（三）最後に「明治の岩倉視節団」ならぬ「平成の世界平和キャラバン隊」の世界一周の旅立ちを提案したいと思います。岩倉視節団は世界を見てきて明治の国家づくりのあり方に多大の影響を与えたわけですが、逆にこの平成の世においては、世界の中の経済的・文化的に遅れた国など発展途上国に対して「平和主義」の尊さや「知足循環社会」の大切さを大いにアピールし普及させる必要があり、そのリーダーを日本が勤めるのが、今最もふさわしいと考えます。そしてアジアやアフリカや中南米にこれに理解を示す国や賛同する国を増やしていくことが、また世界の平和や秩序維持に寄与するものと確信しています。

共生（シンビオーシス）から共創（コビベンス）へ
―「和して同ぜず」の精神

小松　優香

二〇〇六年の国際シンポジウムに始まり、この一年間グローバルジャパン研究会に参加させて頂き、私自身の研究テーマと合致していたこともあり、非常に勉強になり感銘を受けました。そこで感じたことを少し述べさせて頂きます。

一、大転換期の今

今の地球の状況、そして日本の状況は我々がこれまでに体験したことのないほどの大転換期にあり、その中でアメリカ文明に依拠した国際秩序ではなく、別の新しい国際システムの在り方が緊要に問われているように思います。その感は、九・一一事件それに続くアフガン、イラク戦争、そして昨年のサブプライム問題でますます強くなったように感じます。

一つの文明が成熟し版図を広げ、成長が止まると、新しい世界のリーダーが現れ国際システムが大きく変動する。かつて「パックス・ロマーナ」「パックス・ブリタニカ」と呼ばれたように、たとえそこにＰＡＸと呼ばれる平和が訪れようと閉塞感が漂う。この閉塞感ゆえの大転換期に今我々は直面しています。これをどう切り抜けて新しい道を開拓するか、その手がかりと方途は、歴史から学ぶことしかないのではないのでしょうか。

二、「近代の超克」が意味するもの

グローバルジャパン研究会は、二〇〇六年の国際シンポジウムの準備段階としての研究会を皮切りに、「世界の中の日本の役割を考える」をテーマとしてスタートしました。一〇〇年単位の文明的視野で歴史を鳥瞰し、「近代の超克」を考えること、「日本の役割」を明快にすることに主軸が置かれています。その流れで見ていくと、国際シンポジウムでの芳賀氏の「徳川平和のモデル」の話、五百旗頭氏の「日本は世界の世話役」の話、松本氏の「共生（シンビオーシス）と泥の文明」の話において、岩倉使節団を素材に江戸以降の近代日本を振り返り、そこでプラスとマイナスが整理され、教訓が汲み出されたことはとても有益でした。と同時に、二一世紀の地球文明を見据えた、進むべき理念が提示されていたように思います。そして今年の展開は、キャリアの豊富な実務家のお話がメインでしたので、それらの理念をより現実的なものとして足場を固めたように思います。こうした理想と現実の摺り合わせや照合を行うことは、我々の住む地球環境をより良い方向に近づけていく貴重な一歩だと考えております。

これまで、「近代の超克」「ポストモダンの在り方」について色々な場所で語られてきましたが、これは「歴史に学ぶ」ということと同じ意味で、過去の文明を明治以降の近代文明とは異なる文明体として捉え、我々と対等の視線、すなわち重心を低くして同じ目線で「観る眼」を養うことだと思います。一般に、前の時代を否定して自分たちの時代を良いとする功利的解釈、そして、歴史は時代を経るにつれてひたすら向上するという進歩史観、人間は必ず一歩一

歩向上しているという人間進歩論が語られますが、決してそんなことはない。時代を経ることで逆に退化していることもたくさんあります。芳賀氏のお話にあるように、現代よりも江戸の方が市井の民は優雅で潤いのある暮らしをしていたとも考えられ、一七世紀以降の西洋を中心とした時代の前は、アジア中心の時代があったわけです。一概に、現代の物差しが必ずしも正しいとは限らない。ましてや現代はとにかく金、金、金の世界で、色々なものの計りが利欲に走り過ぎている。大学の研究費もその一例でしょう。もっと素直に真っ直ぐな心の物差しで対等に見なければならない。古今東西による優位性劣位生、時代観における優位性劣位生、民族間の優位性劣位生を超えたところに「近代の超克」地球文明は存在していると思います。

顧みれば、科学が神の領域に入ってしまったことも、人間が自然を支配してしまったことも、一神教で直線的な西洋文明が優位にたったことも、ローマ帝国がキリスト教を公認して以来のことです。本来のヨーロッパまで遡れば、エーゲ文明に出てくる模様は全部曲線、渦巻き模様、豊穣の女神です。それは何千年と続いていました。ケルト民族の模様も曲線で、緑のヨーロッパを表わしています。これらは循環社会を意味し、命の継続を価値としています。これは、日本の八百万の神、一木一草すべてに神が宿っている考え、和の精神にも通じますし、インドでも東南アジアでもこうした命を尊ぶ循環思想はあります。こうした原点に還ることが必要だと思います。

三、日本からの提言にある「根幹」なるもの

現在、「平和」「貧困」「格差」「環境」という大きな問題を抱えたグローバル危機の時代で、生きとし生けるものの「命」の安全保障を考えていかなければなりません。そのために「日本から発信するものは何か」については、本研究会で議論され、「モラル」「知足」「最適循環」「美的生活」「平和構想」などいくつかのキーワードが提示されました。「これらの根幹にあるのは何か」自分なりに整理してみたところ、これらの根底にはすべてに通じる「和の心」「慈しみの心」だと思いました。こうした「温かな心」徳、誠、仁、礼、慈愛をもって世界に貢献すべきだと思います。ユネスコ憲章に「争いは人間の心の中で起こるものだから、人間ひとりひとりの心の中に平和の砦を築かなければならない」ということが謳われているように、すべての根幹にあるのは心です。その心の具合で、人間関係も、社会関係も、さらには国家間、地球環境まで徐々に変わってしまう。

吹田氏がカール・ヤスパースの「枢軸の時代」を例に挙げながら意識革命の必要性を提唱していますが、全く同じように思います。汎神論による枢軸革命を経た後、人類は科学革命を成し遂げ、科学と人間があまりにも強大な力を持ち過ぎた結果が今日のあり様です。もちろん、これは全て悪いわけではありません。我々が十分豊かな暮らしができるのは、科学のお陰です。しかし、状況は「生命」の在り方そのもの、エコロジー全体を見直さなければならないところにまで来てしまっているということです。それには、これまで交流し合ってきた各文明を対等に見ることで歴史を振り返り、過ちから学んでいかなければならない。そのために、まず自分の心を平和な状態にしなければならない。しかし、それだけでは命は守られないので、戦争を

したくてもできない制度を作っていかなければならない。ＥＵはそうした例だと思います。そして心を拓くことで、多様性を認める「一即多」「和して同ぜず」の方向へ向かうことが必要だと思います。堤言の中には、モラルの話、平和構想の話、美の話、戦略の話がありました。その全ての発信源となり、そこに還っていく、集約され収斂されるもの、すなわち中点となるのは「温かな心」だと思います。「温かな心」さえあれば、近代文明を超えた対等な眼差しを持つことも可能でしょうし、一歩ずつ小さなことの積み重ねではあるけれども、提言の中で出された問題も改善することは可能だと思います。

四、「和して同ぜず」「一即多」

ここで、最近のアカデミズム界の潮流として、比較文明論で著名な東京大学名誉教授の伊東俊太郎氏、静岡文化芸術大学学長の川勝平太氏、ユネスコ事務局長官房・特別参与である服部英二氏の三者によって行われた鼎談「文明間に通底する価値を求めて」（「環―歴史・環境・文明」藤原書店二〇〇七年ｖｏｌ.三一所収）をご紹介したいと思います。これは二〇〇五年にユネスコ創立六〇周年記念行事として、パリのユネスコ本部にて国際シンポジウム「文化の多様性と通底の価値―聖俗の葛藤に関する東西の対話」が行われ、その成果を受けて二〇〇七年に国連大学でそれを更に深めていく国際シンポジウム「文化多様性への新しい賭け―対話を通して通底の価値を探る」が開催される準備段階として行われたものです。ここでの内容は、先に記した芳賀氏の「平和への文化力の有効性」と松本氏の「共生」の理念を共通認識として基礎に据えた上で、さらに一歩深めた形になっており、我々のグローバルジャパン研究会との連続性を強く感じるものであります。

立脚点となった「文化の多様性」という概念は、一九九五年にジャック＝イブ・クストーが文化の多様性は生物多様性と同じように地球や人類の生存にとって必要不可欠なものだと指摘して以来、文化の多様性が維持されなければならないこと、またこれが文化の貴重な遺産として受け継いでいかなければならないことが非常に重要となりました。今までは「〇〇中心史観」でした。とくに西欧中心史観が非常に強かったわけですが、その他にも中華中心史観や色々なものがあったかも知れない。しかし、そういうものでない文化の多様性を大切にし、その相互の関係を重視していくという根本的なスタンスはそのまま受け止めなければならないと思います。

問題は、その次の段階です。文化の多様性―文化には色々なものがある、異なったものがある―ということで、それらを纏めるものが必要だということです。では、なぜ「普遍」ではなく「通底なるもの」なのでしょうか。服部氏は、普遍と通底の概念の違いを次のように述べています。

「例えばヨーロッパから発信されたものの中に「世界人権宣言」があるが、これは「ユニバーサル・デクラレーション」と訳され、「世界」とつくものはみな「普遍」を意味する。普遍というのは「同して和せず」で、その根底にはデカルトの「方法序説」の考えがある。デカルトは理性を最も平等に全ての人に分かり与えられているものとして、普遍なものとみなした。理

性とは分ける力を指し、自分と外的世界とを主客に分け、主体と客体から成る世界観を作っていく。そこに自然支配の根源があり、上下関係で物事を捉えていく見方につながっていくものである。普遍という時、普遍が上位、特殊が下位で、そういう関係の中での対話なので、本当の対話とは言えない。これに対して「通底」の場合には、異なる文化を対等な立場に並べて、大も小も文化である限りその尊厳は等しいと認める姿勢が根底にあり、通底＝和して同ぜずという価値観に結びついていく。」

このような普遍から通底への価値観の移行が文化の多様性を維持するためには求められており、こうした意識改革は決して無理なものではなく、少しずつ可能だと思います。それは日本のポジションが東西の中間にあるように、日本には昔からの極東の伝統文化もあるし、ヨーロッパからも多くのものを学んだ。色々なところから多くのものを吸収し、自ずから培ってきたものが「和して同ぜず」「一即多」「多即一」ということだと思います。重心を低くして、根底に流れる共通したものを見ていく視点、それこそが通底なる価値で日本の文化のコアにある「温かな心」だと思います。生活の中に美を見出すことでその心と凛とした気概、志を身につけ、それが日本文化の精神だと思います。

最後に、この鼎談では地球文明の理念としてコビベンス、「共生」「共成」「共創」が出されています。これは、一緒に生き合っていくという意味の言葉で、先のシンビオーシスとは違います。シンビオーシスのたまたまそこにいる、そこにあるという状態から共に生き合っていく、共に生存し合っていくという能動性、主体性を持つ概念です。他文化、他文明と共に互いの文化を認め合いながら生き合っていく、理解し合っていくという意味での「共生」、一つに纏まり合っていく、共に成り立っていくという意味での「共成」、そして共にこれから未来の地球社会を創っていくということでの「共創」が重要だと思います。このコビベンスの概念は、我々人間ひとりひとりに、生きることへの主体性と役割と責任を持たせた、生き方の拠り所を与えてくれるものではないでしょうか。

まとめ
―地球文明時代の思想を求めて

泉　三郎

総括的感想

まず、「全般的な論説」としての吹田氏の論と永池氏の論について感想を述べます。

一、吹田氏の論

1「近代を超える」について

最初に「日本において近代を超えるということは、どういうことか」と題して取り組み上の留意点を明示して頂いたことは、まことに有難いことでした。その論を踏まえて、私の考えを少し述べます。

「近代を超える」という意味は、近代文明を否定するのではなく、近代文明の資産を充分に生かしながら、よりよい生活を追求する姿勢と解釈したいと思います。

近代の精神は合理主義であり科学主義であり経済主義であると考えます。それが思想的なコアになりエンジンになって近代文明が築かれてきました、そのお陰で人類は驚くべき「豊かさと便利さ」を獲得しました。その果実をいま我々は充分に享受しています。ですから、西洋発の近代文明の成果にまず感謝し、その恩恵を大いに評価すべきだと思います。

問題は近代化つまり合理主義や科学主義や経済主義の行き過ぎであり、そこに偏りが生じ毒素が出てきているということです。その毒素を除き中和すべきものが日本の中にあり、それを世界に向けて発信できないかという思いがあるのです。要は、自然と文明のほどよい共存であり調和でありバランスであろうと思います。因みに申し上げれば、ここでいう「文明」とは文化も含め自然に対置する「人為人工の総称」として使っています。

2「大国化の道しかなかったのか」について

ここでは、横井小楠の「仁義の国」について、その道がなかったかと述べておられますが、これは当時の世界情勢、荒っぽい帝国主義が当たり前の時代においては時期尚早で望むべくもなかったと思うのです。日本としては、まず独立を志向して強兵をすすめなければならなかった。また「強国化の道」はあっても「大国化の道」という考えはその時点ではまだなかったと解釈すべきではないかと思います。

「大国化の道」が生まれたとすれば、日清・日露戦争を終えた段階でのことではないでしょうか。日本は日露戦争に勝ったけれど薄氷の上でのことであり、民衆は貧しい生活を余儀なくされていました。たとえ「強国」と評されてもとても「富国」の段階ではなかったのです。その貧しさが、むしろ大陸進出のトリガーになったと解釈すべきでありましょう。もし、小楠のいう「なんぞ富国にとどまらん、なんぞ強兵にとどまらん」という段階まで日本が達したとすれば、それは、明治維新後一二〇年を経た一九八五年あたりではないかと思います。日本は戦前に「強兵」を成し遂げましたが、夜郎自大になって無謀な戦争に突っ込み大失敗しました。

そして、戦後は「強兵」を避けて「軽武装国家」となり、経済成長に専心し「富国」を成し遂げました。そして、国民一般が豊かな生活を享受できるようになりました。したがって小楠の理想を掲げるのは、この時期まで待たねばならなかったというのが私の認識です。

それについては日本の近代化路線を敷いたといわれる大久保利通のことを想起します。明治十一年、大久保は凶刃に倒れますが、その日の朝、親しい後輩に漏らした言葉があります。「維新以来十年を経たけれど、昨年までは兵馬騒擾が頻発して、仕事らしい仕事はできなかった。（中略）いまや事ようやく平らかとなり、これからが本当の仕事である。思うにこれをやり抜くには十年かかる。明治元年より十年までが第一期で、兵事多くして創業の時であり、十一年より二十年までが二期で最も肝要なる時間であり、内容を整えて民産を殖する時である。そして二十一年より三十年までが三期で守成の時であり、後進賢者の継承修飾を待つときである」と。望むらくは官僚主導体制や明治憲法についても数十年後には一度見直し修飾をはかるべきだったのでありましょう。しかし、成功体験は往々にしてそれを踏襲継続させてしまうのです。それは人間の業（ゴウ）にも似て、まことに悩ましいところだと思います。

3 「中国との和平」について

頭山満と孫文とのやりとりはきわめて興味深く思いました。中国については、勝海舟も幕末すでに同様のことをいっています。中国が悠揚たる大国であり、それを敵にまわす、あるいは見くびることは日本の道を誤るといっています。しかし、明治初期の段階では、清朝政府は中華思想に依拠して頑迷固陋であり、西洋への対応もいかにも柔軟さを欠いていました。福沢諭吉がしびれを切らして「脱亜」と言う理由もそこにあったと思います。頭山と孫文が西洋を「獣の文明」といい、東洋を「人の文明」とっている思考形態は、当時の東洋的君子の共通の意見であったと思います。いうなれば東洋の理想政治「聖人政治」や「徳治主義」の規範からすると、西洋がそうみえるのであって、それはいわば儒教的教養のしからしむるところで、西郷隆盛や久米邦武にも共通していることだと思います。

中国はその後共産主義の独裁体制に入り、現在もその枠組みから抜け切れていません。が、この二十年に及ぶ西洋的な市場経済の導入でその社会は大いに変質しつつあります。そして、昨今の中国には自国の歴史に関する再評価や儒教思想の復活もみられますので、日中で共通の思想的基盤が醸成される可能性も見えて来ており、いわば東洋的な儒教倫理に基づく平和が開かれる道はこれから期待できるのではないかと思っています。

4 「日本型経営」について

日本の経営理念には、民を大事にする思想が長年の歴史を通じて連綿と流れていると考えたいのです。日本型経営の根幹は人間を大事にする思想にあり、上下間の格差や不平等感が薄いのが特徴だと思います。江戸時代の特権階級である大名や上級公家の生活にしても、西洋の同種の特権階級の桁外れの贅沢ぶりに比べると格段の差があるように感じます。西洋には古来階級意識が濃厚で、奴隷制度もごく最近まで残っており、西洋の為政者は大衆を権力や金力で支配しようとしました。それは「徳治主義」、「仁愛政治」を理想とする社会とは基本的に異なるのだと思います。その背景には狩猟社会と農耕社会の違いがあるという説がありますが、私

も同意見です。

吉野作造はかつて「民本主義」を唱え、伊丹敬之は「人本主義」を唱えました。民が本であり、人が本であるという考えで、金を本とする「資本主義」への対立概念です。久米邦武は「米欧回覧実記」で、西洋の「利益政治」に対し、東洋の「道義政治」を対置させていますが、利益と道義のどちらを上位に置くかの政治理念の違いであろうと思います。

これは一般の会社経営の場合にも適用される問題であり、日本型経営は「事業は人なり」の言葉に端的に表現されているように人を大事にします。よくいわれるように、日本の会社では社長や重役と一般社員のとの給与格差が十倍とか二十倍程度であるのに対し、西洋の会社が百倍以上であることにも表れています。日本の場合、会社は第一義的に、資本家の為にあるのではなく経営者や従業員のためにもある。西洋の場合、基本が階級社会でエリートとワーカーは一線を画しています、将校と兵卒、オフィサーとクラーク、同じ職場で働きながら食堂やトイレが差別されていることはよく指摘されることです。日本の場合、役職に上下はあっても人間的には同じという意識があり、機能分化はあっても人間的な差別はないということで、思想の根本に違いがあるのではないでしょうか。

5 「世界平和構想」について

現下の情勢を見れば、「世界の平和」がいかに実現困難なことであるかを痛感せざるを得ません。しかし、それでもなお、「勇気を奮い起して、この理念を実現したい。いままでの反省にもたって、陣形を立て直し、世界平和構想を打ち立てたい」との吹田氏の熱い思いが伝わってきます。私もまったく同感であり、いかに理想論と批判されようと、めげることなく、粘り強く愚直に「世界平和」を希求し、そのために出来ることをしていかなくてはならないと思います。

それにはやはり国連の改革がどうしても必要であり、ここでは、安保理事会の抜本的改組や上院の設置が提言され、その際には世界政府的機能も想定されています。日本はまだ常任理事国にもなれない状況にありますが、既存の仕組みにこだわらず、グローバルな大変化の時代を前提としながら、より次元の高い大構想での国連改革を具体的に提言し、その実現に向けて日本は明確な意思表示をし、加盟国を個別に説得していくくらいの気概をもちたいものだと思います。

もっとも、一足飛びにそこまでいくにはいかにも無理があるとの説もあり、まず欧州共同体のようなアジア共同体をつくるのが先決との主張もあります。が、私は、世界の危機的状況、地球的な問題は差し迫っており、それを解決するにはすでにＧ２０も現実のものとなってきていることを勘案し、世界政府的構想の機はもう熟してきていると思います。

オバマ大統領の登場も、そのチャンスであると思います。そしてインターネットの普及が、吹田氏の主張されている「下から着実に国連を動かしていく」ことを可能にするのではないかと思います。時代はもうそこまで来ているのではないでしょうか、小さな一歩でも踏み出すべき時がきているように感じます。

なお、吹田氏は三菱総合研究所で産業や企業調査に携わり常務取締役を経て敬愛大学で「日

本現代史」などを講じてこられた碩学です。したがって現実の経済・ビジネス分野と学問・研究分野の双方に軸足をもち、しかも思想や哲学に詳しく総合的視野と深い洞察力をお持ちです。それは、著書「西洋近代の〝普遍性〟を問う―欧米中心史観を超えて」や「日本近代史・瞥見」にも表出されており、当研究会では基調的な報告と各氏へのコメンテイター的役割を果たしていただきました。

二、永池氏の論

1　日本文明について

現代文明の直面する大問題を明快に整理し、「日本文明の課題」を浮き彫りにしてもらったのはまことにありがたいことでした。以下、永池氏の所論に若干のコメントを述べます。「現代文明の危機とは」については、二十一世紀文明研究所の近藤章人氏の捉え方を参考にして八つの項目を列挙されていますが、私は四つくらいに集約してみました。

(1)　科学主義の暴走

好奇心の赴くところ人間はすごいことまで突き止めてしまったという感じです。コンピューターという人工頭脳を発明したお陰で、人間は「神の領域」にまで入り込んでこんでしまった。これは実に大きな問題であり、「知恵の実」を食べてしまった人間の運命を暗示しているかにみえます。中でも一番の問題は「生命の神秘」にまで踏み込んでしまったことであり、遺伝子をみつけ、クローンや万能細胞までつくってしまったことであると思います。

これは核分裂と同じ問題を提起していますね。その科学技術が何のために利用されるかが問題なのです。原子力は電力の供給源として素晴らしい利益を人類にもたらしています、が、同時に核兵器の脅威が一方にあります。医療技術についても、欲望や金力と結びつくと、ごく一部の人のために利用されやすく、臓器や精子の売買というおぞましい事態を一方で生んでいます。われわれはこうした問題にはっきりした倫理基準を設け、解決策を提示しなくてはならないと思うのです。

(2)「覇権主義のせめぎ合い」

国家という主権を持つ政治単位がもう時代遅れになっていることを認識しなくてはならないと思います。交通通信機関の驚異的な発達、相互依存の貿易構造、地球温暖化、資源枯渇、海水汚染など地球大の問題がおきるなか、どうしても世界政府的な存在が必要になってきたということでしょう。これはあまりに理想主義的で、現実を知らないものだと反論されましょうが、いまこそ理想主義が必要であり、現実がそこまで危機的な状況に来ているというのが私の認識です。

その象徴的な事象が、二〇〇一年の「九・一一テロ」と、二〇〇八年「九・一五リーマンブラザース破綻」であり、それがこのことを世界に知らしめたと思います。国連、G7はいずれも機能せず、急遽「G20」が設置されてなんとか対応策を探りました。今や国家主権を制限して世界的な統治機構をつくりそこに権限を一部委譲することを具体的に検討する段階に達したとみるべきではないかと思います。それにはアメリカと中国という二つの超大国の同意が不

可欠になります。それだけに大問題であり大難問ですが、ねばり強い努力がそれをブレイクスルーするのではないでしょうか。

スケールは大違いですが、わが国の経験に照らせば、かつて犬猿の仲だった薩摩と長州の同盟を想起させ、三〇〇の藩を廃した「廃藩置県」を想起させます。グローバルなスケールでのこの種の大改革が必要な時期に達したのであり、世界を舞台に活躍する龍馬のような人物が平成の日本に現れることを期待したいと思います。

(3) 倫理、道徳、法秩序の欠如

ここでは世界的視野での貧困、絶対的な貧困が取り上げられ、それがテロの遠因になっているとの認識が示されています。そして、人類全体の一割の人間が「豊かな生活、贅沢な生活」を享受し、その陰で九割の人口が貧困にあえいでいると指摘しています。ここで持てるものの倫理、道徳、それを是正する法秩序の欠如が問題になります。ここでの根本的な問題は、現指導的国家のリーダーたちが、金銭、物質、利便至上主義に陥り、それが道義、倫理観の喪失につながっていると解釈すべきでしょう。しかし、この問題は道徳心だけに期待することは無理であり、どうしても革命的な法制改革が必要になると思います。それはたとえば日本の戦後改革時と同じような、財産税や累進課税の新設であり、資源浪費には資源税、環境破壊や汚染に対しては環境税の設置などが考慮されてしかるべきであろうと思います。そこまで踏み込む決心、覚悟が出来るかどうか、世論を喚起できるかが勝負どころではないでしょうか。

(4) 学問、科学間の専門化、分業化、

これもまことに重要な問題であり、西洋の合理主義、科学の進歩の結果、分析、細分化がすすみ、専門化による弊害を生んでいます。そこでは微に入り細にわたり問題を究明することに傾き、全体像を見失う危険を伴います。俗に言う「木を見て森をみない」結果になり、医療の分野でいえば、部分治療に陥り人体全体を診る視点に欠けることになります。政治についても同様で、各省が省益を優先し、各局が局益を優先し、何が一番大事なのか見誤るケースが起きています。概して近代文明社会においては枝葉末節が盛大に繁茂し根幹部分がやせ細る傾向があります。学問の分野では特にその弊害が甚だしく、法律や経済の場合も一番大事な人間が欠落してしまうことが多いのです。人間にとって、人類にとっていま何が一番大事か、大局に着眼し原点に返ること、学際、総合など、それを束ねる哲学、思想の重要性を強調したいと思います。

2 「日本文明を世界に発信するための条件」について

この項目は、永池氏の多年の経験と研究に基づくもので現実的で説得力があると思いました。

(1) 戦前の失敗から学んで文明的孤立を避けること。

日本が唯我独尊的な発信をしても受け入れられないこと。ここ数百年の間に西洋文明が優位を占め世界を覆ってしまった以上、そして戦後とくに日本人自身が西洋的思考に感化されてしまった以上、世界に向けてはむろん日本人に対してもまた、むしろ西洋の言葉や論理をもって説得する必要があるとしていることは注目に値します。

（2）日本古来の生命観、宇宙観を西洋的な視座から再構築すること

これも前項に準じる提案であって、日本古来の思想を語る場合でも、西洋的な視点や論理で説くことの重要性を指摘しています。問題はこれを如何に具体的に表現していくかであり、永池氏がバイブルやシェクスピアをしばしば引用して説明しているケースはその実践例であると思います。

（3）世界文明と通底する倫理観、たとえば、武士道や、商人道について

これはいま世界でもっとも大事なことであり、緊急に求められていることだと思います。顧みれば、すでに明治時代に日本人は意外にもそれに果敢に挑戦し、試みていたと思います。たとえば、ここに二つの和歌があります・・・

磨かずば玉の光もいでざらん　ひとのこころもかくこそあれかし

花の春　紅葉の秋の盃も　ほどほどにこそくままほしけれ

これは、ベンジャミン・フランクリンの人生訓を明治天皇の美子皇后が美しい大和言葉に翻案したものです。原文は素っ気なくダイレクトで「時間を空費するな」、「酒を呑みすぎるな」の教えです。当時のアメリカの ピューリタンの教えも、いろいろの形で咀嚼され表現されて日本人の倫理基準となったとも思われ、現代でもこうした試みがなされるべきだと思うのです。

（4）キリスト教と儒教の共通点を基盤にすべきこと

東西両洋では表現方法にちがいはあっても同じ人間として通底する価値観があるはずで、いまや違いを強調するよりその同質性を強調すべき時であると思います。そうした試みが盛んになされることを期待したいと思います。

（5）人間中心主義から一歩外へ出て宇宙主義の視野をもつこと

人間中心主義は、科学技術と経済の驚異的発展によって、人間圏の拡大がめざましく、地球資源の収奪と環境破壊を惹起するまでにいたっています。あまたある生物の中で人間だけが突出して生態系を乱している。これは人間中心主義のいきつく過誤であり、より広い視野でことを判断しなければなりません。それには地球的、宇宙的な視野が必要とされ、生命現象についても同様の視野が肝要だと思います。

（6）西洋文明の行き詰まりは、それを模倣摂取してきた現日本文明の行き詰まりでもあります。われわれは日本列島という山だらけの小さな空間に一億三千万人が住んでいるため極めて濃密な形で、近代文明の最前線に立っていることになり、その意味で西洋の先進国に共通する問題点に直面していることになります。日本人はその認識を明確に持って、それが惹起する問題点にも敢然と取り組むべきだと思うのです。

3「日本型個人主義」について

永池氏は、日本人が「日本」を取り戻すための条件 について、次の三つを挙げています。第一は、象徴天皇こそ日本の伝統であって、明治の天皇制は一時的な方便だったということ。 第二は、民主主義は外来のものではなく、その伝統は日本にも脈々と流れていたこと。 第三は、戦後の日本を総括して、「日本型個人主義」に問題があるとしていること、です。

中でも緊急の重大事は「日本型個人主義」にあり、その改造を目指し真に日本的な個人主義を構築する必要があると強調している点です。現下の「日本型個人主義」は、エゴイズム、自己中心主義、甘えの構造、神を持たない傲慢さ、謙虚さを欠く点、国家意識の欠落、防衛意識の欠如、公の精神が欠落などであり、それをいかに是正していくか、教育全般の大問題であり、その具体策と実践が待たれるところです。

なお、永池氏は家庭教育の実践家として三十年のキャリアを持ち、スコーレ協会を主宰して全国に千の拠点をもち、二万五千人の会員を擁しています。家庭こそ人間が人間らしく育つための最も重要な孵卵器であり、その再生に日々努力されています。そしてその現場体験と指導実践の中から、以上のような広く深い「新生命論」や「新文明論」を展開されていることを付記したいと思います。

次に実体験に基づいた各氏の個別の論について若干のコメントを述べます。

三、西井易穂氏の論

西井氏は中外製薬の取締役研究所所長として創薬に注力してこられた方で、いまも毎日百万人が服用しているという骨粗鬆症の新薬を開発した実績があります。しかし、それは平坦な道ではなかったのです。アメリカでは「二重盲験」という制度に阻まれて認可が受けられず、十五年間の闘争の末やっと認められた経験をお持ちです。そこで西井氏は西洋医薬の論理と東洋医薬の論理の違いを思い知らされ、その体験を下敷きにしながら本論を展開しているのです。

西井氏の説は、西洋医学の長所と欠点、東洋医学の長所と欠点を見ながら、その融合を説いています。西洋医学の長所と東洋医学の長所がお互いの短所を補う関係になることが望ましいのです。しかし、現状は西洋医学があまりに優勢で、機械や数値に頼りすぎ平均的治療になってしまっている、東洋は本来、自然治癒力に期待する、そこに東西の医療の考えの違いがあり、それぞれの長所短所が浮き彫りにされています。個人個人にあった治療が軽視され、ないがしろにされることが多く、平均的な治療に陥る怖れが多いのです。西洋医学は全体性を見ないで、部分治療の弊害に陥っているのです。

それは西洋的な論理の欠陥を示しているといっていいでしょう。医療の問題は誰もが経験している身近なことであり、それだけに聞くものも理解が早くわかりやすいのです。

東洋的な漢方や 気の力についても自らの経験も踏まえての言及がありました。現代の先端的な医学によっても解明できない不可思議な現象がいくらもあることが明らかにされました。西洋科学主義の統計偏重、平均値主義、数値に頼る方式に大いなる警鐘を鳴らしている点は、他の分野にも大いに通じることで多くの示唆に富む報告でありました。

四、塚田晴可氏の論

塚田氏は美の面からの発言です。

日本の美はどこに特徴があるのか、日本の美意識は第一に「自然を敬う」ことだといいます。それは古代神道に通じる考えで、戦前「神道」は戦争の為に利用され誤解されてアレルギーを覚える人もありますが、本来は自然を敬うまっとうな思想であり、そこに美を見いだすのが日本の特性であるというのです。「美の教師は自然であり、自然の中にいることが美を感じ、美を学ぶ最短の道である」というのが塚田氏の主張です。

日本の美の第二の特徴は何か、それは「神仏習合」だとします。釈迦の教え、山川草木悉皆成仏、どんなものにも仏性があるという考えは、神道とむすびついて、寛容で柔軟な美学を生みだしていると説きます。

日本の美の第三の特徴は、ひらがなの美しさであるといいます。そのしなやかな美、たおやかな美、のびやかな美から、源氏物語も古今和歌集も生まれました。そこに漢字では表せない日本ならではの優しい美学があるのです。

四つは引き算の美学、余白の美です。足し算でなく引き算の美学、それは茶の湯の「侘び・さび」にも通じる美学ですが、素の美しさ、シンプルな美、自然の美、曲線の美、余白の美、そこに無の思想があるのです。もし、こうした、自然の美、空の思想、ゆとりの哲学を世界中の人が分かち合うことが出来れば、世界は必ず良い方向に変わることが可能だとの考えです。

塚田氏には「美神の邂逅」という著書がありますが、そこでは古今東西の一見対極にあるようなものが、共存し響き会って美をつくっていることを、現物の写真によって示しています。それは塚田氏のギャラリーの名称になっている「無境」にふさわしい概念であり、塚田的な美の世界をあらわしています。そこに「崇高な微笑」という題のページがあり、ふくよかな頬とつつみこむような慈悲のまなざしをもつガンダーラの石像と、日本画家、安田靫彦の「紅白梅図」とが合わされています。その解説で塚田氏はこういっています。

「ギリシャ美術と仏教美術が出会った瞬間、仏陀は静かに笑みを浮かべた。長い長い時をへて、ここ日本、旧暦の正月、凛とした気配、初春のやわらかな光のなか、あくまでも穏やかで神々しいまでの微笑が目に映る。背景には靫彦の紅白梅図を掛けた。品格のある日本画だけがもつ、線の美しさに、塑像の眉や頬のゆるやかな曲線が呼応する。じっとみつめる。仏はふたたび微笑んだ」

キリスト像にはみられない、仏像の美しさがここにあります。自然の結晶ともいうべき紅白梅と得も言われぬハーモニーを醸し出しているのです。

美は言語を超えて伝える力をもつ、理性でなく感性に訴える、その直截な感化力は大きく、美のもつ力の不思議さを考えさせてくれます。日本は美の宝庫です。四季に彩られる自然、そして古くはシルクロードを経て、今日はさまざまな道をへて世界中の美が集まり、それが無言の中に「平和で豊かな世界」を現出させてくれるのです。そして日本の美はいつも日常の生活の中にある、たとえば茶の湯はその象徴的な存在ですが、日常の生活に美が生かされています。日本には「美しい生活」というものがあり、それが日本の発信すべき貴重な資産だということでありましょう。

人間の欲望は、量から質へと変質し、究極は「美」へと昇華していきます。権力、金力、名誉、

名声、しかし、最後は美に収斂していきます。その美を志向すべきではないか、美の王国、自然と人工の織りなす美の王国、それが日本の目指すべき姿というべきではないのか、塚田氏の論説はそれを強く感じさせます。

五、石坂芳男氏の論

石坂氏のトヨタ自動車における長年の体験は、世界市場への挑戦であり、メイドインジャパンを売り込むための貴重な実践でありました。それは日本的経営の具体的な表れであり、異文化の人を説き伏せるノウハウの積み上げでもあったのです。

石坂氏は入社以来四五年にわたり販売畑をあるき、二一世紀を迎えるころ、百七十カ国に七百万台の車を販売した担当副社長でありました。しかし、それは極めて平凡で地道な説得の連続であり、結局は人と人とのコミュニケイションによるものだったというのです。その経験から滲み出る言葉は、「よきリスナーになれ」ということであり、最後は「誠」だと述べています。この「まこと」というキーワードはすごく印象的です。それは西洋流にいえば「愛」であり、儒教的にいえば「恕」であり、日本流にいえば「おもいやり」でありましょうか。それは世界共通の価値観、人間としての共感であり、そこに国境や民族による差異はないのです。

ここで重要な指摘の一つは、欧米の場合、エリート層を説く場合と、一般人を対象とする場合とは自ずから異なっていることです。一般のワーカーを対象とする場合は情に訴える、感性に訴えることが必要であり、それは呑んだり食べたりの「ノミュニケイション」のような、肌の触れあいがより有効だということを示唆しています。

また、製造方式のトヨタウエイの伝達と販売面でのトヨタウエイのやり方には明らかな違いがあることも注目すべき点です。販売の場合は顧客の声を聞くことが第一であり、各国各地域は地勢風土も違い風俗習慣も異なる訳ですから、それに合わせて対応する必要があるということです。それはグローバルでありながらローカルなのであり、それを石坂氏は「世界返り」と称しています。トヨタウエイを一方的に押しつけてはならないのであり、相手の要望に応える、ローカルな要望に応える、それが「世界返り」の意味なのです。この考え方は政治や外交においても極めて大切なことだと思います。

また、トヨタの世界戦略はきわめて用意周到なものであり、きわめて戦略的でもあります。その要はトヨタウエイを明確な言葉として明文化し、それを研修によって学び、伝道師として育てることです。これは結果を出すことが至上命令である企業では当然のこととしてなされるのですが、国家として政治や軍事や外交のことをなす場合も同じであるべきだと思います。しかし、現実には、そこまで真剣に対応しているかといえば大いなる疑問があります。そこには利潤動機がない代わりに、公人としての志や使命感、責任感が必須になるでしょう。いずれにしろ、トヨタウエイの方式は、そうした意味で極めて学ぶべき点が多いと思います。

六、石垣禎信氏の論

ＩＢＭという国際企業で長年アメリカ式経営の体験を経て、現在は日本企業の経営者として活躍する石垣氏は、一方で日本文化への理解も深く、日本的心情の持ち主でもあります。奈良に生まれ育った境遇はその文化的伝統を体内に宿し、国際的なビジネス場裏で戦いながらも物心双方のバランスを維持してきた理由でありましょうか。

石垣氏の所論は、その最先端のＩＴビジネスのただ中にあって、なお日本人の感性を持ち続け、それを逆手にとって勝ち抜いてきたタフネスとやさしさを感じさせます。それをデジタルとアナログ、グローバルとジャパン、理性と感性、利害と心情という対立軸で捉え、その境界線を往来しながら、説明段階から、説得段階へと飛躍する、セールスの極意を開陳してくれました。

そこでは「覚悟」や「意志」の重要性が説かれます。日本人が概してそれを軽視し、曖昧なうちに推移していることを衝きます。「説明」から「説得」へジャンプすることの重要性、そして最後の処では極めて人間的な心情に訴える、そしてそのキーワードは意外にも「中庸」なのでありました。それは、建前と本音の狭間にあって、人間の本質に迫ることを意味するのでありましょう。誰もが闘争社会の厳しさに疲れ、救いを求めているとの洞察によるものであり、そこには人間としてごく当たり前の生活感覚があり、平凡な生活を大事にし、普通の幸福にあこがれる心情を基盤にしていることが読み取れます。

石垣氏は、日本が思想や主張を発信していく場合、戦略が必要であることを主張し、その具体的な手法を提示してくれました。日本人には普通そこまでの「覚悟」や「意志」がなく、とことん考えないことに問題があるといいます。世界はいまやそれでは生き抜いていけない、主張すべきは堂々と主張すべきであり、執拗に説得することも必要なのです。グローバリゼイションが進む世界では、この壁を突破しブレイクスルーしていくことが求められます。これから日本が思想や哲学を発信していくとすれば、同じことが要求されるとの主張でありました。

その他に、熱心な研究会のメンバーであった森本敦之氏の発言と小松優香さんの寄稿について述べます。

八、森本氏の発言ついて

現時点での歴史認識として「世界は今、歴史的な転回点にある」とし、「日本は世界のモラルリーダーになるべきだ」との提言です。その理由として次のものを挙げていますが、私も同意見です。

1、アフガン・イラク戦争の結果、アメリカの一極覇権主義は終りを告げた。つまり、現下の世界の問題は、軍事力で解決しようとしてももはや無理であることが判明した、そういう時代になったとの歴史認識をもつべきだという点。

2、サブプライムに端を発した金融危機により、グローバルエコノミーが現実の姿となり、この悪影響を避けるには市場経済主義者の信じる「神の手」ではなく、世界的なコントローラー、モラルリーダーが必要であると指摘します。

また、アジアにおけるリーダーシップについて、中国との連携の難しさを指摘し、もう一つの大国インドとの連携、協力関係の強化を訴えています。

そして、日本の役割として、三つのことを挙げています。

一つは平和主義と知足循環社会の重要性を世界にアピールすること、それには画期的な情報技術のインターネットを活用すべきこと。

二つは「世界のモラルリーダー」として、世界の金融・通貨・貿易機構の創設を提案すること。

三つはかつての「岩倉使節団」にならい、平成の世界平和キャラバン隊を派遣すべきだと述べて、具体的なアクションへの情熱を披瀝しました。いまや世界は議論している段階ではなく、直ちになんらかの行動を起こすべき時だと結んでいます。

いずれも傾聴に値すべき意見だと思いました。

九、小松氏の寄稿について

毎回熱心に出席し、セクレタリー役も担当してくれた小松氏からの小論についてもコメントを述べたいと思います。

小松氏は千葉大学大学院の研究フェローであり、「公共哲学」を主たる関心領域としながら「石橋湛山」を研究し、さらに最近は広く「文明論」に視点を展開させている、当会としては貴重な、若き、アカデミックなメンバーです。小松氏は各種の学会にも参加しており、このコメントには若い世代の考え方と最新の学会の動きが反映されていて大変興味深く、また学ぶことが多いと感じます。

まず、二〇〇六年の国際シンポジウム「世界の中の日本の役割」についての簡単な言及がありますが、ここで、芳賀徹、五百旗頭真、松本健一各氏の所説の紹介があり、それをベースに今回の研究会がなされていることの意味を再認識させてくれます。

次いで、最近の学会の動きについての紹介があります。これにより「ユネスコ」でも同様なテーマでシンポジウムが催され、さらにそれをフォロウする形で日本でも伊東俊太郎、川勝平太、服部英二氏によって議論が展開されていることを知ることが出来ます。このことはアカデミズムの世界でも同じような問題意識で議論されていることを知ることが出来てこころ強く感じました。とくにここで紹介されている服部氏の「普遍」と「通底」の違いは、諸文明間の「優位性・劣位性」と「対等」との違いを明確にして説得力があります。

そして最後に小松氏自身の感想として、二〇〇六年国際シンポジウムから、二〇〇八年の当研究会での発表・質疑を通じ、そこに一貫性と連続性があることを指摘すると同時に、国際シンポジウムではいわばアカデミックな「理念」に終わっていたものが、本研究会における実務者の体験を通じての発表によって現実的に裏付けされ肉付けされたという評価になっています。そして、これからの方向について、世界における「多様性」の意味が「一即多」であり「和して同ぜず」であり、それは実は「日本文化の心」であり、そこに日本からの発信のコアになる思想があるという主張です。そして、その集約的表現として「共生」から一歩踏み込んで伊

東俊太郎氏の言葉「共創」であるべきだと述べていることの意味は大きいと思います。

総括的まとめ

最後に、私の総括的まとめを述べます。

吹田氏や永池氏が述べているように、この研究会のテーマは極めて大きく、勢いの赴くところ、おのずから「西洋近代を超える」や「日本文明論」という壮大な課題に導かれることになります。これは一朝一夕にはいかない大事業であり、また当会の力を超えるものであるという印象をぬぐえません。

一方、核の脅威、テロ、戦争、貧困、環境と、事態は切迫しており、もう議論している段階ではない、精緻な理論や言説を構築するよりラフな議論でもいいから、もはや行動に移るべきだという森本氏の意見もあります。思えば、このような議論は日本の各地で、いろいろ分野で展開されており、一般市民の間でも切実な問題と捉えられていると思います。これは現代日本の趨勢であり世論の赴くところではないかと感じています。

そこで今後の当会の方向としては、むしろコーデイネーター役や事務局的立場にたって、国内外から一級の有識者、論客を迎え、市民の間からも論者を募って、集中的に大議論を演出することが考えられます。それは、かつて大平首相がやったように、本来なら総理大臣が主宰し、その直属の調査室とか諮問機関でおこなうような性質のものです。そのようなことが現内閣に期待できないとしたら、市民の間でやるしかない、民間でやるしかないという気持ちです。

そこで参考になるのは、石坂氏の報告にあった「トヨタ」の世界戦略です。まだ暗黙知であった「トヨタウエイ」を文字化して明快なビジョンとして打ち立てたように、市民なりの感覚で「ニッポンウエイ」を文字化し、誰にもわかるヴィジョンとして描くことです。次いで、世界に発信していくために、具体的な戦略をたてることであり、その担い手となるような、平成の志士を養成することです。

そこであらためて「日本とは何か」、「日本から発信出来るものは何か」を問うてみます。これは私見ですが、その要件を箇条的に挙げれば次のようになりましょう。

1「中の国、中庸の国、中和の国」

日本は決して大国ではありません。しかし、小国でもないのです。日本は本来、「中の国」というのがふさわしいのでないかと思います。国土の面積からいえば小国です、しかも国土の七〇％以上を山岳によって占められています。しかも、資源小国です、食糧の自給さえおぼつかず、エネルギーも海外にほとんどを依存しています。しかし、決して小国ではないのです。一億三千万人の人口は、教育水準の高い、有能で器用な素質をもち、感性豊かな美的センスと伝統的にモラルの高い国民であります。そしてその生み出す経済力はいまなお世界第二位を維持しています。この人材パワーはいわゆる大国の力に決してひけをとりません。その上、日本は思想的に「中庸」を尊び、「中和」を得意とする国です。

そうした意味も含めて日本は「中の国」というのがふさわしいと思います。

2「世界への恩返し」

トヨタウエイの海外戦略は「よきリスナーになれ」ということでした。「世界返し」という言葉も使っています。こちらの思想や考えを相手に押しつけるのではなく、相手の言い分をよく聞いて、利害を調整し、中和させていく、その方式こそ「中庸の国」、「中和の国」としての日本の役割でありましょう。そこでのキーワードは「世界への恩返し」ではないでしょうか。日本は、これまで世界の大文明からいろいろのものを学んできました。かつては中国文明であり、近来は西洋文明です。その恩恵の上に現在の日本の豊かで便利な生活を享受し多様な文化をエンジョイできているのです。そして、今日ただいま、食糧、エネルギー、諸資源、その他もろもろのものについて、日々世界各国、各地の恩恵を多大に受けて生活をしているのです。そのことを思えば、わたしたちは「世界に恩返し」することを考えなくてはなりません。そこに心根を据えることが大事なのではないか、世界のために役に立つ、地球と人類のために少しでも役に立つことを志向すべきではないでしょうか。少なくともマイナスをふりまくのではなく、プラスをふりまく覚悟と姿勢がなければならないと思うのです。それこそが今後の日本の目指すべき道ではないのか。そして、そういう人材を積極的に養成し、世界各地に送り出すべきであると思うのです。

3　美しい生活、美しい文明

さて、そうした前提で、当会に出来ることは何かを考えてみましょう。大議論、大構想は専門家に任せるとして、私たちにふさわしいもっと身近で実現可能な方法はないかを探ってみました。そこで思いつくことは、市井の民としての生活者の視点からの提案です。

それは大地に生活する虫の目の視点です。「個人の生活」の実感から問題点を拾い上げ議論を起こす方向です。まず、庶民感覚で、世界でいま起こっていること、日本で起こっていることで、「いかにもおかしい、不条理だ、愚かしい」と思う点を列挙してみましょう。

① すごい貧困とすごい贅沢、貧富の格差、（世界的にも、国内的にも）
② 精神的貧困、時間貧乏、忙しすぎる生活、余裕のなさ、ストレス　神経症
③ 殺し、テロ、紛争、戦争の悲惨
④ 猛烈な浪費、無駄、過剰生産、過剰消費、ゴミの山、もったいないことだらけ
⑤ 地球温暖化、異常気象、天変地異、集中豪雨、暴風、洪水、干魃
⑥ こころのふれあいの欠如、家庭・職場・潤いある社会の崩壊、
⑦ 生き甲斐の欠落、感動・生きる喜びの無さ、仕事・奉仕・自己実現の欠如
⑧ 合理主義の傲慢、科学の不遜、自然への不敬、

それに対して日本人が持っている生活の知恵はどこにあるのでしょう。それは、難解な哲学や高尚な思想より、日常的なことば、詩歌、諺、名言、寸言にあるのではないでしょうか。それは市井の民の生活哲学ともいうべきものであります。思いつくまま、箇条的にそれを例示してみれば次のようなものになりましょう・・・

① 過ぎたるは及ばざるが如し、ほどほど、よい加減、足るを知る
② 多忙の忙はこころを亡くすです、こころ豊か、ゆとり　ユーモア、余裕　のどか
③ 寛容、施し、まどか、まろやか　慈悲　おもいやり　仁愛、徳
④ もったいない、シンプル、質素、清富、円満
⑤ 循環、サイクル、摂理、宇宙、陰陽、輪廻
⑥ 憩い、ふれあい、おしゃべり、団欒、寄り合い、うるおい、感動、共感
⑦ 生き甲斐、働く喜び、役立つ喜び、自己表現の喜び、仕事、ボランテイアの喜び
⑧ 自然の驚異、不可思議への畏敬、はかなさ、謙虚さ

政治の目指すところもつまるところは、個人の幸福、生きる喜び、生き甲斐です。

文明の諸道具もこれを充足することが本来の目的であって、技術や経済もそのためのもの、仕事も会社もビジネスも、国家も社会もそのためにあるのです。にもかかわらず、現実は「本末転倒」になっていることが多い、経済成長のために個人の生活を犠牲にし、技術の進歩のために個人の幸福を犠牲にし、国家や社会のために個人の生活の充足を妨げています。

そこで、生き甲斐、幸福を考え直していきたいのです。個人の生活こそが究極の目的であり諸システムの基盤であることを忘れてはなりません。文明も文化も、社会も国家もそのためにある道具だとの考えから発想すべきだと思うのです。

人間の生活にとってもっとも大事なことはなにか。もういちど虚心坦懐に考えてみる必要があります。それはごく少数のものであり、わずかなものです。それはまことに平凡な当たり前のことです。「衣食住」であり、「仕事と娯楽」であり、「家族、友人、愛する人」であります。人生の達人といわれるイタリア人はそれを「マンジャーレ、カンターレ、アモーレ」と表現しました。日本流にいえば、食事、おしゃべり、なごみです、これを「タベーレ、ダベーレ、イダカーレ」といってもよいかと思います。われわれが、神社仏閣でお祈りするときの中身も同じようなものです。お願い事は「健康」であり、「商売繁盛」であり、「家庭円満」、「安全」です。それを保証するのが「政治」であり、そのための道具が文明と理解すべきでありましょう。

福沢諭吉は「文明とは、衣食を豊かにして、人品を高尚にするにあり」といいました。それは物心共に豊かにすることです、しかし、それも過ぎたるは及ばざるが如しです。過不足ないもの、それが「最適」であり、「福徳円満」の相です。それは無駄がなく、角がなく、円のようにまろやかです。その姿は美しいのです。そこに私たちが求める生活、「美しい生活」があり、そしてその総体としての「美しい文明」があります。

4　壮大な夢「地球文明の共創」

さて、しかし、個人の生活ばかりみていて事が済むわけはありません。それは常に深く国家や世界とかかわっています。グローバリゼイションが進展する現代社会ではその傾向がいよいよ強くなります。そこで目を世界に、地球大にひろげなくてはなりません。つまり、虫の目の

他に、もう一つの視点、大空から眺めおろす鳥の目、はるかな星からみるグローバルな視点が必要なのです。

一九六九年人類がロケットをとばして月面に立ったとき、人類は何万年の歴史において画期的な時代を迎えました。最新の技術によって送られてくる映像によって、人々は初めて「無限の宇宙空間に浮かぶ青い地球」を実感しました。そこから「宇宙船地球号」の言葉が生まれ、「世界は一つの村」という解釈が生まれました。「地球文明の時代」の曙です。　奇しくもそれから百年前の一八六九年、世界はやはり画期的な時代を迎えました。その年、アメリカの大陸横断鉄道が開通し、スエズ運河が開通したからです。当時の最先端技術の産物、蒸気機関車と蒸気船によって地球はひとつになったのです。一八七二年、未来小説家のジュール・ヴェルヌはその新事態を素材として「八十日間世界一周」を書きました。それは、それまで風任せの舟旅であり馬の背にゆられて数年も要するアドヴェンチュアラスな旅が、新技術の活用によって誰もが短期間で安全に世界を旅することができることを証明したのでした。

わが「岩倉使節団」が西洋文明の見学に出たのもまさにこの時期であり、六三二日間かけて米欧諸国はむろん世界一周の旅をしたのです。その随行記者というべき久米邦武は「米欧回覧実記」の中でこう書きました。

「方今ノ時宜ハ、異常ノ運ニ際会セルコトヲ顧ルヘシ、明治中興ノ政ハ、古今未曾有ノ変革ニシテ、其ノ大要ハ三ニ帰ス、将門ノ権ヲ収メテ、天皇ノ親裁ニ復ス、一ナリ、各藩ノ分治ヲ併セテ、一統ノ政治トナス、二ナリ、鎖国ノ政ヲ改メテ開国ノ規模ヲ定ム、三ナリ、此一アルモ亦改革容易ナラサルニ、其ノ三ヲ併セテ、方今豹変運ニアタル、是殆ト天為ナリ、人為ニアラス、其ノ由テ然ル所ヲ熟察スレハ、世界気運ノ変ニ催ササルニアラサルハナシ」

明治維新の大変革が、開国や廃藩置県を伴う古今未曾有の大改革であり、人為のなせるわざではなく天為であり、その大本を熟察すれば「世界気運の変」だというのです。その「世界気運の変」が、今、まさにさらなら大スケールで、異常気象や環境問題まで巻き込んで起きていることを知らなくてはなりません。

江戸時代、日本は極東の孤島で、まるでそこが「小宇宙」であるかのように安穏に暮らしていました。それは芳賀徹氏が「徳川の平和」で表現されたように、農業文明の時代としては他文明と比べても最も高度な生活を日本人はエンジョイしていたといえましょう。しかし、新技術が拓いた蒸気船・蒸気車、電信の新時代によって、その徳川システムは瓦解し、明治の新体制がつくられました。そのとき、犬猿の仲といわれた大藩、薩摩と長州を同盟させ、統一国家をつくった、その仲介者は土佐藩であり立役者は坂本龍馬でありました。

日本はいま、「世界気運の大変化」に遭遇して、グローバル時代の「大藩連合」や「廃藩置県」を目指すべき位置にいるのではないか、かつての土佐や肥前の立場にあるのではないか、と思うのです。超大国の米国と中国を結び、国家主権を制限して、いよいよ「世界連邦政府」の樹立に一歩を踏み出すべき時が来たのではないのでしょうか。機は熟しつつあります。「地球文明の共創」のために、日本は先頭を切ってそのために働くべき時ではないでしょうか。

日本には「中庸」の精神があり、「仲介」の役を果たすべき素質があります。

ここで幕末の思想家、横井小楠のあの大理想を想起すべきだと思います。

「堯舜、孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を尽くさば、なんぞ富国にとどまらん、なんぞ強兵にとどまらん、大義を世界に布かんのみ」

大義とは何か、小楠の思想は、西郷隆盛の「敬天愛人」に表現されていると思います。自然を敬い、人間を大事にすること。西洋文明は人間中心主義に偏り傲慢になりすぎました、自由も欲望も貪欲になりすぎて自己中心主義に陥ってしまいました。それを正すためには、人知の限界を知り、自然の摂理に従順でなくてはなりません。その「敬天愛人」を英語で表現するとどうなるか、私はこれを「コスミックヒューマニズム」といいかえてはどうかと思います。宇宙的な摂理の中でのヒューマニズム・・・自然環境や生態系も尊重しながら、世界人類に通底する価値観・モラルを共有して、地球文明を共に創っていくこと、それが二一世紀の大義であろうかと思います。

いまこそ、この大理想をグローバルなスケールで実現すべき時ではないのか。したたかに、しなやかに、粘り強く、日本人はその壮大な夢に向かって果敢に挑戦していく気概と覚悟をもつべきではないのか。

この研究会の記録を読み返してみるとき、そのことがしきりに去来するのであります。

〈執筆者紹介〉

泉三郎

ノンフィクション作家。一橋大卒。事業経営のかたわら、「岩倉使節団」のルートを辿る旅を続け、その成果をもとに、著作、スライド、ＤＶＤ映像を制作。ＮＰＯ法人「米欧亜回覧の会」を設立。「岩倉使節団という冒険」「誇り高き日本人」など岩倉使節団に関する著書多数。一方、茶の湯にも関わり、日本文化についての造詣深く、「茶の湯と美を楽しむ会」を主宰。著書に「千利休ゆかりの茶室、獨楽庵物語」がある。

吹田尚一

（社）日本経済復興協会理事。早稲田大卒。（財）三菱経済研究所を経て（株）三菱総合研究所に移籍。日本経済、政治、企業問題の調査研究を担当し、常務取締役を退職後、敬愛大学国際学部教授となる。日本経済発展論、日本現代史を教える傍ら、政治・社会・思想など幅広い分野を掘り下げてきた。著書に「大転換の企業経営」「日本経済の転換と再生」「西洋近代の『普遍性』を問う」などがある。

永池榮吉

（社）スコーレ家庭教育振興協会会長。教育学博士。毎月、生涯学習誌『すこ～れ』を発行。家庭教育の現場に携わりながら、現代の日本型個人主義のあり方を批判し、独自の「あるべき日本人像」を展開。「スコーレ」とは、学び・遊び・余暇を意味するギリシャ語で、スクールの語源をあらわす。同協会は、北海道から九州まで、全国各地に一〇〇〇の拠点を持ち、会員は二五〇〇〇名に及ぶ。著書は、「生き方の基本―論語と聖書に学ぶ」「人生の難題を解決する―魔法の言葉」「こだまする生命」など多数。

西井易穂

埼玉医科大学客員教授。医学博士。中外製薬取締役研究所所長を経て、現在、人・健康・医学の研究所所長。西洋医学と東洋医学の根本的違いを認識した上で、「骨粗鬆症」の改善となる新薬を発見。個人一人一人に合った治療のあり方、副作用の少ない薬のあり方を追求し、総合的見地からの医療を提唱している。また、そうした観点からの新薬づくりに挑戦している。共編の事典として「カルシウムと骨」がある。

塚田晴可

ギャラリー「無境」主人。成蹊大卒。その後、一九九四年に銀座にギャラリー無境を開廊し、自らの「ものを見抜く目」が認めた東西の古美術と現代作家の作品を紹介してきた。美術品の鑑定評価、アートコーディネートや執筆、講演、茶会

など幅広く活躍中。著書に「美神の邂逅」「暮らしの中に新・古美術」がある。シャープな審美眼には定評があり、「婦人画報」や「和楽」では度々取り上げられている。

石坂芳男　トヨタ自動車（株）顧問。一橋大卒。トヨタ自動車販売会社（当時）入社以来、一貫してアジア・オーストラリア・欧州・米国などの販売およびマーケティングを担当し、一三年の海外駐在経験がある。一九九六年米国トヨタ社長、二〇〇一年トヨタ自動車（株）副社長（海外部門統括担当）に就任。Ｔｈｅ Ｔｏｙｏｔａ Ｗａｙ ｉｎ Ｓａｌｅｓ ａｎｄ Ｍａｒｋｅｔｉｎｇの取りまとめに当たった。ＡＰＥＣビジネス諮問委員会日本代表委員などを歴任。著書に「トヨタ販売方式」がある。

石垣禎信　（株）アット東京代表取締役社長。（株）日本ＩＢＭ入社以来、営業課長、営業部長を経て一九九三年にＩＢＭアジアパシフィック流通インダストリー担当ディレクターに就任。九七年にＩＢＭアウトソーシング事業部長、二〇〇一年外資系戦略コンサルティング会社の（株）セピエント代表取締役社長。現在はこれまでの経験を生かし、プロフェショナル戦略コンサルタントとして、世界最大級のデータセンターを運営している。

森本淳之　（株）東京流通センター代表取締役副社長。（株）三菱地所入社以来、取締役開発業務部長、常務取締役住宅開発事業本部副本部長を経て二〇〇五年に三菱地所専務執行役員住宅事業本部長。同年、（株）三菱地所顧問となり、二〇〇六年より現職。

小松優香　千葉大学大学院フェロー。「ソフィア塾」主宰。大学院時代に国際関係を学び、石橋湛山、公共哲学に関する研究から思想や文明論へと幅を広げている。グローバルジャパン研究会の「東洋と西洋を超えた」地球文明への視点に共鳴し、経験豊富な先輩達の実体験を聴きながら、理想と理念にとどまらない等身大の日本の目指すべき方向性および役割を模索している。

〈研究会参加者〉

研究会に参加し、積極的に発言してくださった方のお名前を列挙させて頂きます。

岩崎洋三、小野博正、小野寺満憲、楠木孝雄、近藤義彦、多田幸子、塚本弘、納家弘美、西井正臣、浜地道雄、藤田実、藤原宣夫、藤原ヒロミ、渡辺恭江

一年間の研究会成果をこうして報告できることを大変嬉しく思います。皆さまのご協力とご支援に心よりお礼申し上げます。

泉　三郎

日本は今世界へ何を発信すべきか

二〇〇九年九月二〇日

「米欧亜回覧の会」

グローバルジャパン研究会

事務局連絡先

電　話　〇八〇-六六一二-一一〇一

ファックス　〇四三-二三八-六六九〇